

日本質的心理学会

第19回大会

大会テーマ

ひろがる・ひろげる

日程

2022年
10/29_土~30_日

開催場所

愛知大学名古屋キャンパス

愛知県名古屋市平池町4丁目60番6

(JR名古屋駅・新幹線名古屋駅からあおなみ線ささしまライブ駅下車、徒歩5分)

AICHI 2022



Japanese Association
of Qualitative Psychology

日本質的心理学会第 19 回大会

プログラム抄録集

愛知大学

開催のご挨拶

今回の大会のテーマは「ひろがる・ひろげる」となりました。質的研究法は通常の学問領域のようにある特定の分野についての研究の手法というよりは、いろいろな領域をまたいで使われています。質的研究法の出発点は、イギリスのロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで人類学を学んだ、ポーランド出身のブロニスワス・カスperl・マリノフスキといわれています。彼は1910年代にパプア・ニューギニアのトロブリアンド諸島でフィールドワークを行っており、現地に長期間滞在して、原住民の生活を詳細にわたり観察をして、原住民の人々がどのような規範や慣習を持って生活しているのかを分析しました。その後、1920年代以降、アメリカのシカゴ大学の社会学者たちが、近隣のスラム街の人々の生活や彼らが抱える社会問題について現地調査を行い、スラム街に住む人々がどのような考えのもと生活しているのかを明らかにしました。

現在では人類学や社会学に限らず、心理学、看護学、言語学、教育学、女性学などでも質的研究法が使われるようになり、学問横断的な研究方法となっています。このように質的研究法は学問分野をまたいで、徐々に「ひろがり」をみせています。また質的研究法は、当初人類学では参与観察が主流でした。その後、人々の行動様式の記述である参与観察のほかに、インタビューという手法が使われるようになると、インタビューされる人の内面の様子ばかりでなく、インタビューする人との共同作業で、そのインタビューされた人が、自分の経験した事象を再構築するという考え方が出てきました。さらに分析対象についても、写真や絵はがき、落書きなどがデータとみなされるようになりました。またあるテーマについて数名の人が一緒に談議しているところを観察するフォーカス・グループの手法も用いられるようになりました。このように質的研究法は一つの手法に縛られることなく、様々な調査方法を利用して、研究の領域を「ひろげる」研究法といえます。

今回、大会の会場となる愛知大学は、戦前中国の上海にあった東亜同文書院の教員たちが、戦後すぐに愛知県豊橋市に設立した私立大学です。東亜同文書院では、卒業研究として中国での現地調査が行われていました。そこで学ぶ日本人学生たちは、中国の広い範囲を歩いてフィールドワークを行い、その調査結果をまとめました。いまではそれらの卒業研究が、中国に関してとても貴重な資料とみなされています。このように愛知大学では伝統的に質的研究法と関連のあるフィールドワークを重要な調査方法とみなしていた歴史があり、そこで今回日本質的心理学会年次大会が開催されることになにか縁があると考えています。

日本質的心理学会第19回大会準備・実行委員長
塚本鋭司

目次

1. 大会参加者へのご案内	1
2. 大会企画概要	3
3. 会場へのアクセス	5
4. 会場案内	6
5. 大会スケジュール	10
6. 大会プログラム・抄録	
(1) 大会企画招待講演	12
(2) 講習会	15
(3) 大会企画シンポジウム・委員会企画シンポジウム	16
(4) 会員企画シンポジウム	26
(5) 口頭発表	53
(6) ポスター発表	73

1. 大会参加者へのご案内

1) 大会概要

大会テーマ： 「ひろがる・ひろげる」

第 19 回大会

公式サイト： <https://www.jaqp2022.jp>

Twitter <https://twitter.com/jaqp2022aichi>

Instagram <https://www.instagram.com/jaqp2022aichi/>

YouTube https://www.youtube.com/channel/UCzeRCWxdif4QRrpINi_bDA

Facebook <https://www.facebook.com/100168902551728/>

日本質的心理学会 HP： <http://www.jaqp.jp>

第 19 回大会事務局メールアドレス： jaqpaichi2022@gmail.com

会期： 2022 年 10 月 29 日（土）～ 30 日（日）

場所： 愛知大学名古屋キャンパス

2) 大会参加について

受付場所および時間： 講義棟 11 階 1104 教室（10 月 29 日、30 日ともに 9:00 開始）

① 大会参加事前申し込みの方

入金済みの方には事前に大会抄録、参加証と領収書が発送されています。受付でネームホルダーを受け取り、各会場へお越しください。

② 大会当日参加申し込みの方

当日参加の方は受付でご記名後、参加費を現金でお支払ください。参加費は下記の通りです。

大会参加費（当日）：	非会員	7,000 円
	一般会員	5,000 円
	会員（大学院）	3,000 円
	会員（学部）	1,500 円

* 学生会員の方は学生証をご提示ください。聴講生、研究生は学生に含まれます。

* 大会初日の開始時刻前後は受付の混雑が予想されます。新型コロナウイルスの感染防止対策の観点から、混雑時にはお並びいただく人数を制限する可能性もございます。時間には十分なゆとりをもってお越しくださるようお願い申し上げます。

* 大会期間中のお知らせや変更は、受付の掲示スペースにてお知らせいたします。

* 期間中には日本質的心理学会デスクが設置されます。入会等の各種問い合わせはこちらにお願いします。

3) クローク

大会期間中、講義棟 11 階 1104 教室にクロークを設け、皆さまのお荷物をお預かりいたします。利用時間は 10 月 29 日（土）9:00～18:00 および、10 月 30 日（日）9:00～16:00 です。ご利用際には必ず係員より番号札をお受け取りください。なお貴重品についてはお預かりできませんので、個人で管理していただきますようお願いいたします。

4) 学内無線 LAN の使用について

大会期間中、本学では 10 月 29 日（土）9:00 から 10 月 30 日（日）17:00 まで、ゲスト用に無線 LAN がアクセスできます。ユーザーID は JAQP2022 で、パスワードは学会当日、受付会場においてお知らせします。なお、大会事務局では無線 LAN の接続方法についてのお問い合わせにはお答え出来ませんのでご了承ください。

5) 昼食

大会1日目（10月29日）大会2日目（10月30日）ともに学内の食堂の営業はございません。大会期間中は、愛知大学周辺の飲食店やコンビニエンスストアを、ご利用ください。

6) 休憩・喫煙に関するご注意

講義棟11階 1104 教室は、休憩スペースとしてもご利用可能です。なおゴミにつきましては、なるべくお持ち帰りいただきますようお願いいたします。また、愛知大学の本館・研究棟の南に駐輪場があります。南へ行くというのは、新幹線の線路でいうと、名古屋駅から東京方向へ歩くことを意味します。その駐輪場の南側に木で覆われたスペースがあります。そこが喫煙場所となります。喫煙場所以外での喫煙は禁止されていますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

7) 会員控室（打ち合わせ室）

シンポジウムの打ち合わせには、講義棟11階 1104 教室をご利用ください。5階と 11階エスカレーター付近のミーティングスペースもご利用いただけます。なお大会当日は他の階において資格試験等が実施されておりますので、大会フロア（5階と 11階）以外のスペース利用はご遠慮ください。

8) 書籍および企業の展示・販売

大会期間中には書籍販売の展示を 5階ポスター会場（501~506 教室）で行いますのでぜひお立ち寄りください。

9) 託児

託児は、事前申込制となっております。当日受付にて、お申込をされていた旨をお伝えください。なお「託児スペース利用規定」に同意いただいた方に、ご利用いただけます。

2. 大会企画概要

第19回大会では下記の招待講演と講習会、シンポジウム、口頭発表、ポスター発表を開催いたします。

【招待講演】

10月30日（日）9:00 ～ 11:00 講義棟 11階 1103教室 (Zoomによる講演)

「Race, Class, and Gender in Qualitative Research: Investigating from an Intersectional Lens」

「質的研究における人種、階級、ジェンダー—交差性のレンズを通しての調査—」

Jennifer Esposito Norris, Ph.D. (Georgia State University)

ジェニファー・エスポジート・ノリス（ジョージア州立大学）

＊ 司会、通訳： 塚本鋭司（愛知大学国際コミュニケーション学部）

【講習会】

10月29日（土）10:00 ～ 12:00 講義棟 11階 1101教室

「ロボットを媒介する関与観察・フィールド観察の手法—新たなブレークスルーに向けて—」

松本光太郎（茨城大学）

＊ 講習会は事前申込をされた方のみ参加できます。

【シンポジウム】

本大会では、大会企画シンポジウム1件、常任理事会企画シンポジウム1件、委員会企画シンポジウム3件、そして会員企画シンポジウム14件を開催いたします。それぞれのシンポジウムの開催日時および会場につきましては大会プログラムをご参照ください。

シンポジウム会場には、マイク、プロジェクター、PC接続用ケーブルをご用意しています（接続ケーブルの仕様はHDMI、もしくはRGB(D-Sub15ピン)です。Mac用アダプターのご用意は出来ませんのでご注意ください）。ノートパソコンを使用される場合は発表者ご自身でご用意ください。会場の機器の使用方法是各会場の大会スタッフまでお尋ねください。

【口頭発表】

<発表の形式>

1セッション(120分)に6～7つの発表を予定しています。各発表は、発表12分、議論3分(計15分)です。残りの約30分は議論の時間とします。この議論の時間の進行は座長にお願いします。座長は発表者の中から選び、大会実行委員会からご連絡します。なお、PowerPointやKeynote等のスライドを使用して発表する場合、見やすいフォント（28ポイント以上推奨）の大きさにしてください。

発表会場には、マイク、プロジェクター、PC接続用ケーブルをご用意しています（接続ケーブルの仕様はHDMI、もしくはRGB(D-Sub15ピン)です。Mac用アダプターのご用意は出来ませんのでご注意ください）。ノートパソコンを使用される場合は発表者ご自身でご用意ください。会場の機器の使用方法是各会場の大会スタッフまでお尋ねください。

<発表上の注意>

倫理的配慮が必要な研究の場合には、それに関する記載をしてください。利益相反の有無については、当日発表資料に明記してください。

発表当日の時点で未発表のものに限り、二重発表は認められません。

<口頭発表の座長を担当される方へ>

- ・座長の方には、各担当セッションの進行をお願いいたします。
- ・各発表は、発表 12 分、議論 3 分(計 15 分)です。各セッションの進行については座長の先生にお任せいたしますが、複数セッションを移動する参加者もいますので、予定の時間をできるだけ超過することのないようにご協力をお願いいたします。予定通りに進行した場合、全登壇者発表後 15~30分程度の総合議論の時間を設けることができます。それぞれの発表への質疑応答や、各発表に共通 する内容や論点についての議論をしていただけます。
- ・セッションごとに学生アルバイトを配置予定です。本部との連絡係を担当いたします。技術的な問題や PC の操作方法については答えられない場合がありますが、何かあった折には、学生アルバイトにもお声かけください。

【ポスター発表】

<発表の形式>

ポスター発表は大会 1 日目（10 月 29 日）、2 日目（10 月 30 日）に分けて実施いたします。

ポスターは 5 階ポスター会場（501~506 教室）において、9:30 より掲示可能です。発表者は、各 自の発表日時および演題番号を確認して所定のパネルにポスターを貼り付けてください。

在席責任時間は 1 日目の発表者は 12:00~13:00、2 日目の発表者は 13:15~14:15 です。この時間帯にはご自身のポスター前で待機して質疑応答を行ってください（スタッフが発表者の在席を確認します）。ポスターの取り外しは、1 日目発表者は 17:00 までに、2 日目発表者は 15:30 までに行ってください。片付けられなかったポスターは大会事務局で回収し処分いたします。

所定スペース内でポスターが貼れる範囲は、縦 180cm×横 90cm です。ポスターの貼付には大会事務局で準備した画鋏をご使用ください。演題番号は事務局で事前に貼付してあります。

<発表上の注意>

倫理的配慮が必要な研究の場合には、それに関する記載をしてください。利益相反の有無については、当日発表資料に明記してください。

発表当日の時点で未発表のものに限り、二重発表は認められません。

* 優秀口頭発表賞・優秀ポスター賞

今年度の大会発表では、発表申込時の抄録と自身の研究の卓越性についてのアピールをもとに、大会当日「大会発表候補者セッション」を設定し、口頭発表とポスター発表について審査を行い、各 2 件を優秀賞として選出します。大会 2 日目（10 月 30 日）12:15 から行われる総会で表彰式を行います。

対象は大学院(修士課程、博士課程)在学中または修了後 3 年以内の方です。自薦制になっております。抄録に基づく 1 次選考を通過した発表が、本審査の対象となります。

3. 会場へのアクセス

愛知大学名古屋キャンパス 愛知県名古屋市中村区平池町 4-60-6

各駅からのアクセス

- 鉄道をご利用の場合

「名古屋」駅より徒歩約 15 分
あおなみ線「ささしまライブ」駅下車 歩行者デッキ直通
近鉄「米野」駅下車 徒歩約 5 分

- バスをご利用の場合

ささしまウェルカムバス「ささしまライブ」下車
名鉄バス「愛知大学前」下車
名古屋市営バス「ささしまライブ」下車

- 飛行機をご利用の場合

中部国際空港 着。「中部国際空港」駅より「名鉄岐阜」駅、もしくは「新鵜沼」駅行きの特急に乗車、「名鉄名古屋」駅下車
あおなみ線「ささしまライブ」駅下車 歩行者デッキ直通

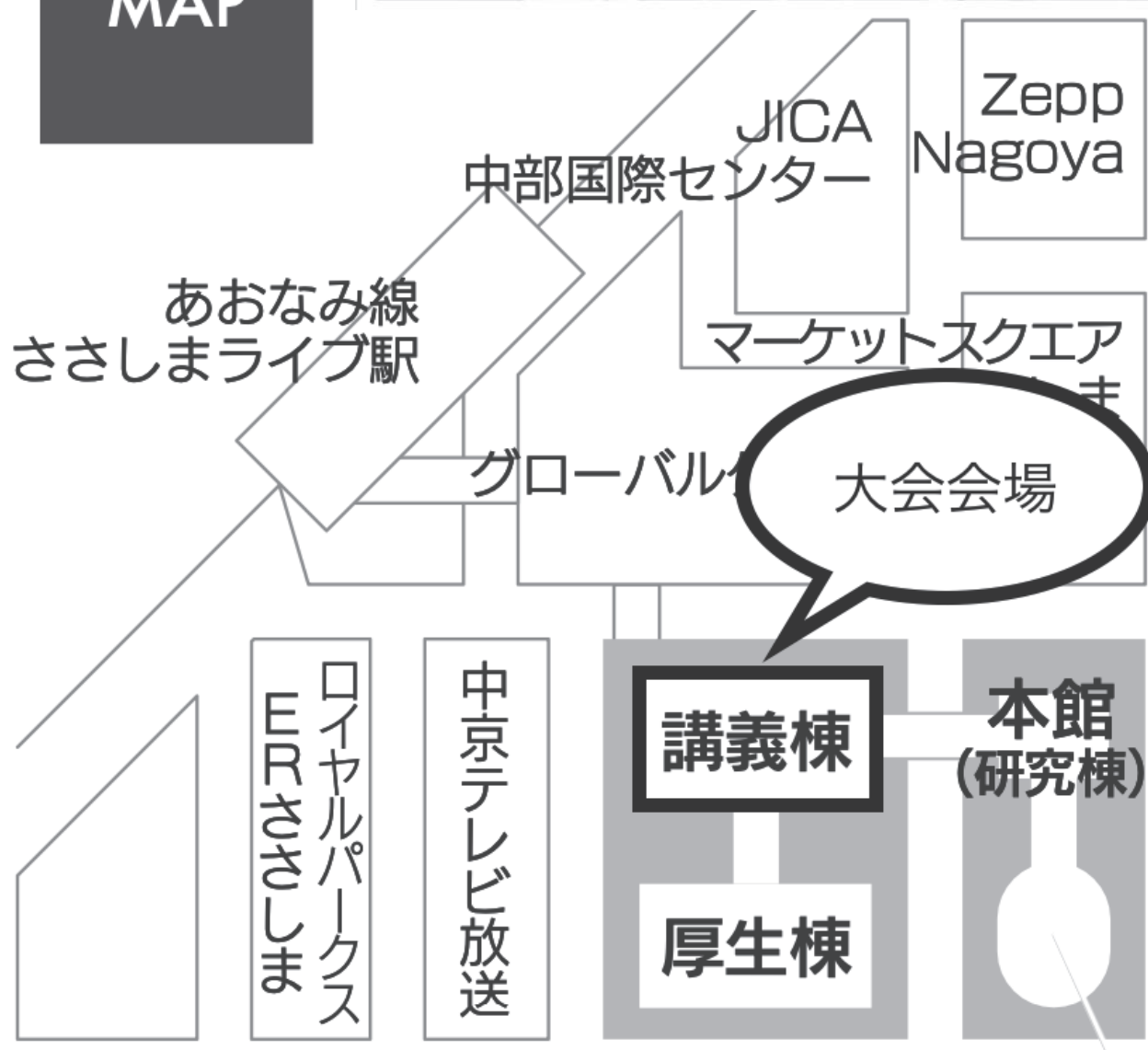


4. 会場案内

愛知大学名古屋キャンパス
講義棟 5階、11階

<大会会場と周辺地図>

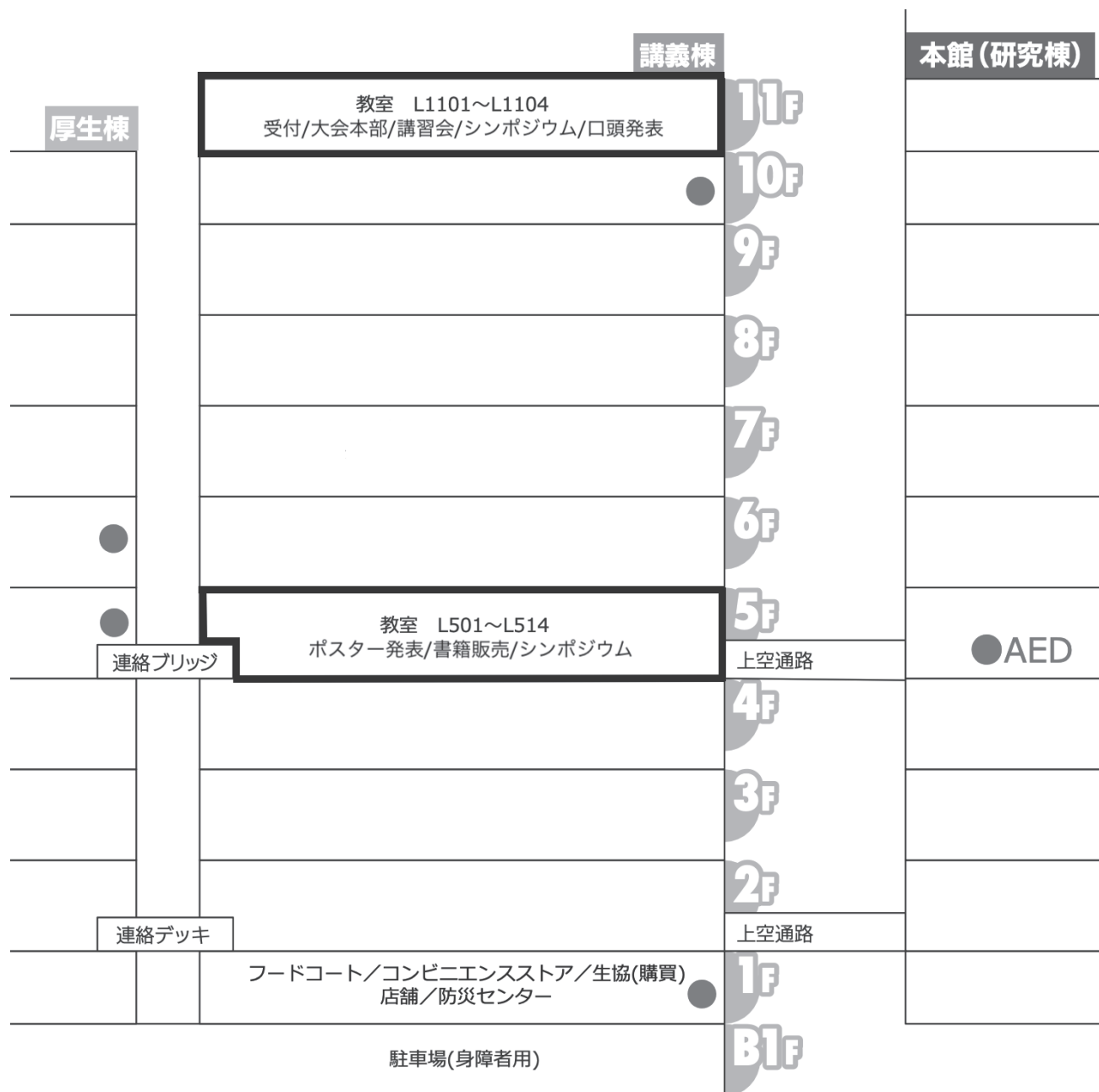
MAP



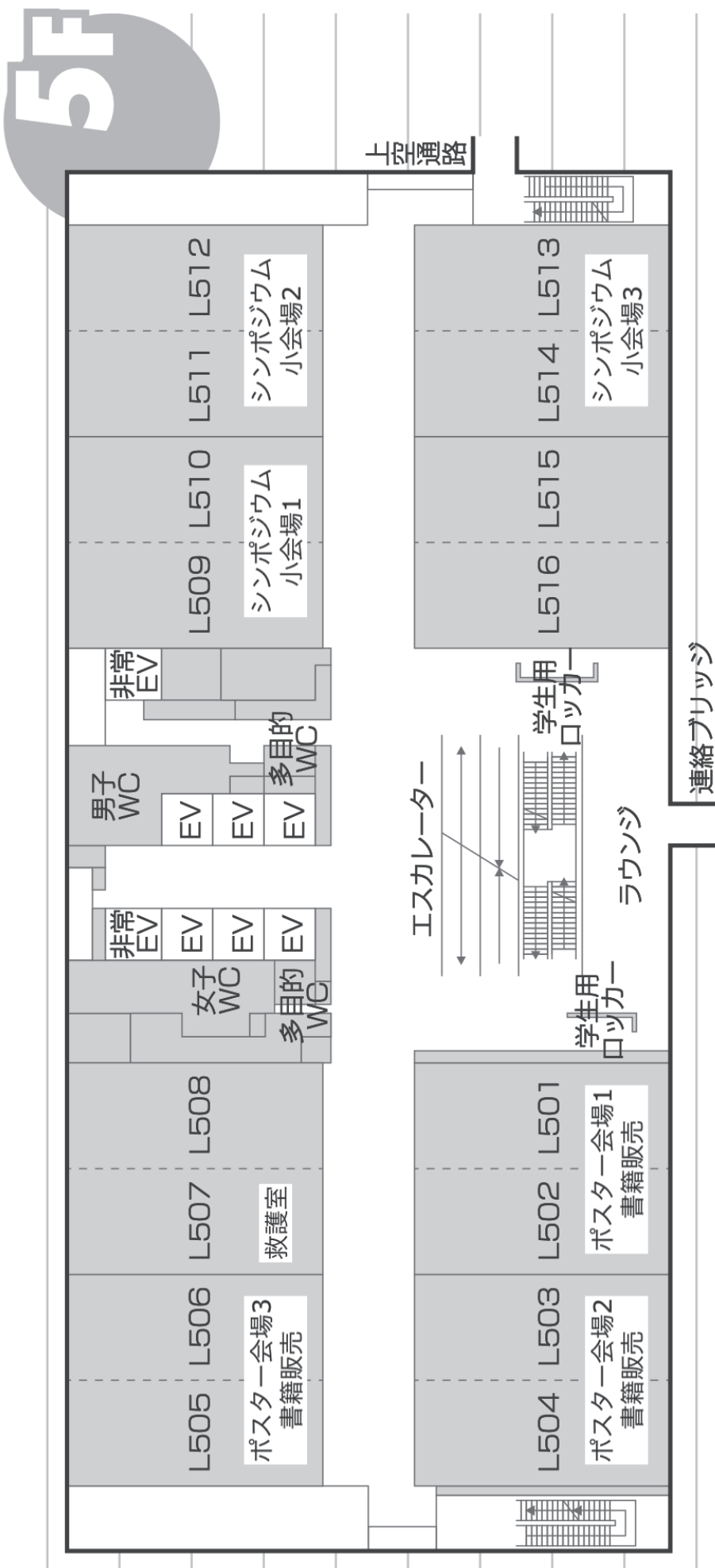
<フロアマップ>

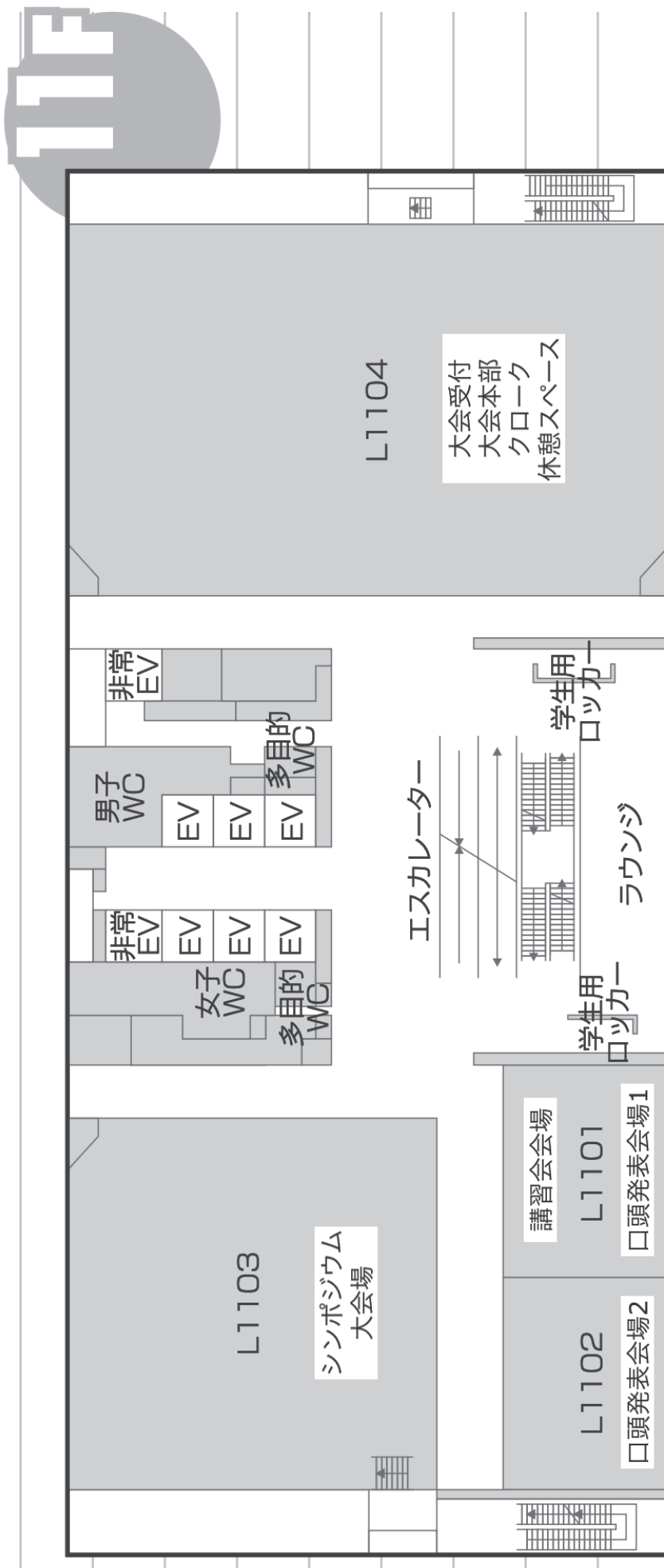
講義棟 5階会場・・・ポスター発表、書籍販売、シンポジウム

講義棟 11階会場・・・受付、大会本部、講習会、シンポジウム、口頭発表



*自動販売機は講義棟3階～11階(5階除く)にあります





5. 大会スケジュール

質的心理学会第19回大会タイムテーブル

10月29日 (土)

受付		シンポジウム大会場 (1104教室)	シンポジウム小会場1 (509・510教室)	シンポジウム小会場2 (511・512教室)	シンポジウム小会場3 (513・514教室)	講習会・口頭発表会場1 (1101教室)	口頭発表会場2 (1102教室)	ポスター会場 (501・508教室)	
9:00	受付開始	(10:00-12:00) 委員会企画シンポ 質的アプローチの多様性 への理解をひろげる 大会準備委員会 委員会企画シンポ 質的研究者、アートに学ぶ 研究交流委員会 会員企画シンポ1 ナラティヴラーニングの 射程と可能性 企画者：横山草介 会員企画シンポ2 フィールドに花開く質 企画者：木下寛子 講習会 ロボットを媒介する関与観察・ フィールド観察の手法 講師：松本光太郎							書籍販売開始 ポスター掲示開始
9:30									
10:00									
10:30									
11:00									
11:30									
12:00		(13:30-15:30) 常任理事会企画シンポ (韓・日) 日本と韓国における 土着心理学の新たな展開 常任理事会 会員企画シンポ3 関係記の活用と可能性 企画者：星直子 会員企画シンポ4 ビデオデータを用いた コミュニケーション研究の現在 企画者：榎田美雄 会員企画シンポ5 主体性をとらえなおす 企画者：土倉英志 口頭発表セッション1 (一般セッション)							ポスター発表表(P1-P3) 在籍責任時間
12:30									
13:00									
13:30									
14:00									
14:30									
15:00		(16:00-18:00) 委員会企画シンポ コミュニケーションにおける 身体性を問う 質的心理学会フォーラム編集委員会 会員企画シンポ6 生活世界とコモنز 企画者：菅野幸恵 会員企画シンポ7 ヤーン・ヴァルサナーの記号論的文化 心理学と根拠経路等定性アプローチ (TEA)の関係性を考える 企画者：宮下太陽 会員企画シンポ8 研究法を拡張しよう 企画者：松本光太郎 口頭発表セッション3 (一般セッション)							ポスター掲示・書籍販売終了
15:30									
16:00									
16:30									
17:00									
17:30									
18:00	受付終了								

質的心理学会第19回大会タイムテーブル

10月30日（日）

受付		シンポジウム大会場 (1104教室)	シンポジウム小会場 1 (509・510教室)	シンポジウム小会場 2 (511・512教室)	シンポジウム小会場 3 (513・514教室)	講習会・口頭発表会場 1 (1101教室)	口頭発表会場 2 (1102教室)	ポスター会場 (501~506教室)		
(9:00- 11:00)										
9:00	受付開始	招待講演 (英) Race, Class, and Gender in Qualitative Research. Jennifer E. Norris 司会・通訳：塚本説司	(10:00- 12:00)	会員企画シンポ 10 映画とビジュアル・ナラティヴ 企画者：家島明彦	会員企画シンポ 11 障害概念の再生産からの逃避 企画者：楠友輔	口頭発表セッション 5 (一般セッション)	口頭発表セッション 6 (優秀賞選考セッション)	書籍販売開始 ポスター掲示開始		
9:30										
10:00										
10:30										
11:00										
11:30		会員企画シンポ 9 「ザ・ベクデルテスト」を ワークショップする 企画者：園部友里恵	会員企画シンポ 10 映画とビジュアル・ナラティヴ 企画者：家島明彦	会員企画シンポ 11 障害概念の再生産からの逃避 企画者：楠友輔	口頭発表セッション 5 (一般セッション)	口頭発表セッション 6 (優秀賞選考セッション)				
12:00		総会 (12:15- 13:15)	(13:00- 15:30)	委員会企画シンポ 「障害」と「病い」をめぐる 質的研究 『質的心理学研究』編集委員会	会員企画シンポ 12 言説分析と社会的課題 企画者：川野健治	会員企画シンポ 13 TEAにおける個体化の有用性について の検討 企画者：福山未智	会員企画シンポ 14 現象学的人間科学の現段階 企画者：渡辺恒夫	口頭発表セッション 7 (一般セッション)	口頭発表セッション 8 (一般セッション)	ポスター発表 (P4- P6) 在籍責任時間
12:30										
13:00										
13:30										
14:00										
14:30										
15:00										
15:30	受付終了									ポスター掲示・書籍販売終了

6. 大会プログラム・抄録

大会企画招待講演 10月30日（日）9:00-11:00 1103 教室 (Zoomによる講演)

Race, Class, and Gender in Qualitative Research: Investigating from an Intersectional Lens

質的研究における人種、階級、ジェンダー
—交差性のレンズを通しての調査—

Jennifer Esposito Norris, Ph.D.

Professor and Department Chair of
Educational Policy Studies
Georgia State University
Atlanta, GA, U.S.



<講演者紹介>

ジェニファー・エスポジート・ノリス教授は、ジョージア州立大学の教育政策学部の学部長である。彼女の研究は、2つの系統に分けることができる。第一に、人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティは、広義の教育における人の体験にどのような影響を与えるのか？第二に、疎外された集団は大衆文化の中でどのように表象され、それがどのような影響を及ぼすのか？談話分析、メディア分析、自己エスノグラフィー、エスノグラフィー、インタビュー、ケーススタディなど様々な方法論と、交差性、批判的人種理論、批判的人種フェミニズムなどの理論的枠組みを活用して研究している。

Education:

Ph.D. Syracuse University

M.Ed. Elms College

B.S. University of Massachusetts, Amherst

Work Experience:

Professor- Georgia State University 2017-Current

Associate Professor – Georgia State University 2010-2016

Assistant Professor- Georgia State University 2004-2009

Assistant Professor- Millersville University 2002-2004

Recent publications:

Books:

Esposito, J. and Evans-Winters, V. (2021). *Introduction to Intersectional Qualitative Research*. Thousand Oaks, CA: Sage.

*Winner of the 2022 Most Promising New Textbook Award from the Textbook & Academic Authors Association

Edwards, E. and Esposito, J. (2020). *Intersectional analysis as a method to analyze popular culture: Clarity in the matrix*. New York: Routledge.

*Winner of the International Congress of Qualitative Inquiry (ICQI) 2021 Book Award.

*Winner of the American Educational Studies Association (AESA) 2021 Critics' Choice Book Award.

Articles:

Edwards, E. and Esposito, J. (2022). Popular culture as an educative site regarding the January 6, 2021 insurrection: Grappling with complexity through intersectional analyses. *Cultural Studies – Critical Methodologies*. DOI: <https://doi.org/10.1177/15327086221094285>

Ellison, T.L. and Esposito, J. (2021). Multimodal expressions of self: Telling ghost stories as intersectional African American and Latinx American scholars. *Qualitative Inquiry*. Article first published online May 20, 2021 DOI:<https://doi.org/10.1177/10778004211014630>

Race, Class, and Gender in Qualitative Research: Investigating from an Intersectional Lens

Jennifer Esposito Norris
Georgia State University, USA

Intersectional qualitative research is a relatively new field and emerged from a frustration with the limits of traditional qualitative research. Intersectionality is a sociological frame which recognizes overlapping systems of domination and interlocking identities (race, class, gender) that have material consequences on peoples' lives. This way of understanding, framing, and conducting research means the researcher must recognize the complexity inherent with a frame that aims to change the nature of the research relationship and the understanding of what counts as valid research. Intersectional research tries to center the cultural experiences, values and beliefs of both the research participants and the researcher. This talk will explore what intersectional qualitative research is as well as how one can conduct it.

質的研究における人種、階級、ジェンダー —交差性のレンズを通しての調査—

ジェニファー・エスポジート・ノリス
ジョージア州立大学

交差性の質的研究は比較的新しい分野であり、伝統的な質的研究の限界に対する不満から生まれた。インターセクショナリティは、人々の生活に物質的な結果をもたらす支配とそれと連動するアイデンティティ(人種、階級、性別)が重なりあうシステムを認識する社会学的枠組みである。このような理解、枠組み、および研究の実施方法は、研究者が研究関係の性質と有効な研究と見なされるものの理解を変えることを目的とした枠組みに内在する複雑さを認識しなければならないことを意味する。交差性の研究は、研究参加者と研究者の両方の文化的経験、価値観、信念を中心に据えようとする。この講演では、交差性の質的研究とは何か、そしてそれをどのように実施できるかを探る。

ロボットを媒介する関与観察・フィールド観察の手法 —新たなブレークスルーに向けて—

講師：松本光太郎（茨城大学人文社会科学部）

この講習会で受講者とともに探索したいことは、ロボットを媒介する質的研究の新たなブレークスルーの可能性です。コロナ禍の生活は、それまで日常であった対面での人間同士のふれあいを制限しました。質的研究はインタビューや参与観察など、対面での密なコミュニケーションを背景として行うことが一般的であっただけに、研究者の対応は難しかったように思います。そのような状況下で、zoomなどインターネットアプリを介したインタビューなど非対面でもできることへの取り組みが始まっています。最近になってようやくコロナ禍とどう付き合っていくのかを探るフェーズに移行しつつあるようにみえます。

対面でできること、対面でなくてもできること、そして対面しないからこそできること、つまり質的研究における新たなブレークスルーの可能性を探索するよいタイミングではないでしょうか。

講習会では、今春公刊の『質的心理学研究』21号に掲載されたロボットを媒介した関与観察

（小嶋、2022）およびフィールド観察（松本、2022）の手法を取り上げます。人間が人間を直接観察することや人間に直接話を聞くことが人間を理解する方法の王道です。しかし、直接見られることや自らを語ることを望まない人は少なくありません。

上記の論文はロボットを媒介することで人間の新たな一面を明らかにできることを提示しています。本講習会では、受講者とともにロボットを媒介することで取り組むことのできる新たな研究テーマのアイデア出し、それからロボットを媒介することで得られることと失ってしまうことの議論を通して、ロボットを媒介する質的研究の新たなブレークスルーの可能性を探索します。

質的アプローチの多様性への理解をひろげる

—「生きづらさ」をめぐるデータ分析から—

企画： 日本質的心理学会第19回大会準備委員会
司会： 松嶋秀明（滋賀県立大学人間文化学部）
話題提供： 西名諒平（神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部）
話題提供： 戈木クレイグヒル滋子（元・慶応義塾大学看護医療学部）
話題提供： 細馬宏道（早稲田大学文学学術院）
話題提供： 安田裕子（立命館大学総合心理学部）
指定討論： サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

企画趣旨

「質的研究」が対象とする現象は、多くの要因が複雑にからみあい、視点の持ち方によって異なる様相をもたらす。と同時に、それを記述するアプローチも多様である。ひとくちに「質的研究」といっても、国内外のハンドブックには多くのアプローチがならび、ひとつにまとめられるものではない。

この多様性がもたらす帰結を、私たちはどのくらい理解しているだろうか。ある現象について、それぞれの研究方法をとることでもたらされる違いは共有されているのだろうか？。たしかに論文には、なぜ（ほかでもなく）この研究方法を選んだのかと問われ、その（研究）アプローチを選んだことを自覚的に語ることが求められるし、それらしいことが書いてある。実際のところ、自分が得意な手法だから、先行研究で多くとりあげられる方法だからということでそれが選ばれることになっていないだろうか。街灯の下で探し物をする男の寓話のように、そのことが発見を無意図的に構成してしまう懸念はないだろうか。もちろん、マッピングの試みは様々になされているだろうが、研究プロセスの具体にふみこんで比較する機会はそれほどないように思われる。

そこで本シンポジウムでは、比較的よく知られるアプローチとして「会話分析・相互行為分析」「グラウンデッドセオリーアプローチ(GTA)」「複線経路等至性アプローチ(TEA)」の3つをとりあげた。会話分析・相互行為分析では細馬宏通氏に、GTAでは西名諒平氏と戈木クレイグヒル滋子氏に、そしてTEAには安田裕子氏に話題提供いただく。いずれも具体的な研究の面白さはもちろん、方法論の発信にも積極的にとりくまれてきた（代表的なものとして、細馬・菊池, 2019、西名・戈木クレイグヒル・岩田, 2021、戈木クレイグヒル, 2021、安田・サトウ, 2022）。

それぞれの話題提供者には、ある共通のデータを分析してもらい、個々のアプローチの分析がどのようにすすみ、どのような結果を生み出すのか、それをディスプレイする場をつくることにした。対象とするデータには、DIPEX-JAPAN「健康と病の語りアーカイブ」のうち「新型コロナウイルス感染症の語り」の1人（インタビュー01）（<https://www.dipex-j.org/covid-19/profile/cov01/>）の語りをとりあげた。改めていうまでもなく「新型コロナウイルス感染症」は、個人はもちろん、対人関係の持ち方、文化・社会のあり方にいたるまで多次元にわたって複雑な「生きづらさ」をもたらしてきた。その理解の切り口は多様であり、本シンポでの質的研究の諸アプローチの比較対象としてうってつけだろう。データがweb上で公開されており、シンポジウムの内容を、参加者各々の分析体験と重ねあわせられることも、会員諸氏の学びを深める道具立てとして魅力的である。心理学史、あるいは方法論のマッピング（サトウ・春日・神崎, 2019）など、方法論をメタに位置付けた議論を展開されてきたサトウタツヤ氏の指定討論とあわせて、全体として、質的研究のアプローチの多様性をあじわう時間としたい。

引用文献

- 細馬宏通・菊池浩平(編)(2019). ELAN 入門—言語学・行動学からメディア研究まで. ひつじ書房.
- 西名諒平・戈木クレイグヒル滋子・岩田真幸 (2021) きょうだいの居場所をつくる—小児集中治療入院児と面会するきょうだいへの支援. 日本看護科学会誌, 41, 395-404.
- 戈木クレイグヒル滋子(編) (2021). グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた研究ハンドブック. 新曜社.
- サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実(編) (2019). 質的研究法マッピング. 新曜社.
- 安田裕子・サトウタツヤ(編).(2022).TEA による対人援助プロセスと分岐の記述—保育、看護、臨床・障害分野の実践的研究. 誠信書房

Broaden Understanding of the Variety in Qualitative Methodologies:

By Comparing Three Ways of Analyzing “Adversity Experience” Narrative

Matsushima Hideaki (University of Shiga prefecture), Moderator
Nishina Ryohei (Kanagawa University of Human Service), Presenting Author
Saiki-Craighill Shigeko (Keio University: Emeritus), Presenting Author
Hosoma Hiromichi (Waseda University), Presenting Author
Yasuda Yuko (Ritsumeikan University), Presenting Author
Sato Tatsuya (Ritsumeikan University), Discussant

Language: Japanese

日本と韓国における土着心理学の新たな展開 —「土地の力」の概念を中心に—

企 画： 伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）
 呉宣児（共愛学園前橋国際大学国際社会学部）
 金智慧（早稲田大学人間科学学術院）
司 会： 伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）
話題提供： 村本邦子（立命館大学大学院人間科学研究科）
話題提供： 韓圭錫（全南大学校社会科学大学心理学科）
指定討論： 南博文（立命館大学 OIC 総合研究機構）
指定討論： 都丞梨（成均館大学校教育学部）

企画趣旨

日本質的心理学会大会で過去4年間にわたり、「土地の力」をキーワードに据えたシンポジウムを開き、それぞれのフィールドでの知見をつなぎながら議論を重ねてきた。前回の第18回大会は日韓合同の大会であったが、韓国・光州の全南大学校で土着心理学の研究・教育に長年従事してきた韓圭錫（ハン・ギョソク）を迎え、ここまでの「土地の力」をめぐる議論にその視点から加わっていただいた。さらに2022年6月にオンラインで開催されたSQIP（The Society for Qualitative Inquiry in Psychology）でも共同でラウンドテーブルを企画・開催し、私たちの議論を、日本・韓国以外に広げていくきっかけをつくった。

人間は誰しも、ある土地に根ざして生きているはずであるが、にもかかわらず心理学においてはその点への注目はこれまでとても希薄であった。それは近代化された社会に生きる私たちとしても、ともすると無視もしくは軽視してしまっている視点であろう。日本や韓国などの東アジアのなかの特定のローカリティに根ざした「土地の力」とは何か、これまで土着心理学として議論されてきたことを踏まえさらに新たな議論を展開する。東アジアと一言でいっても、そのなかのローカリティは同じではなく、ひとくくりにすることができない多様性が存在する。そこでこのシンポジウムでは、それぞれの土地に暮らす人々のケアにもつながる議論を、長年にわたるフィールドワークの知見をもとに丁寧に展開し、この「土地の力」に立脚した人間の見方を示したい。土着心理学と「土地の力」に着目した私たちのパースペクティブは、主流の心理学研究が十分焦点を当ててこなかったところに立ち、東アジア発の地に足のついた新たな展望を心理学研究にもたらしめようとするところだろう。

話題提供1：「土地の力」と土着心理学の可能性（村本邦子）

臨床心理士として暴力被害によるトラウマに携わり、戦争、大量虐殺、文化剥奪などによるトラウマの世代間連鎖にも関心を持つ一方で、ハワイの原住民、台湾、沖縄など歴史的に抑圧・搾取されてきた人々が土地とのつながりや共同体との結びつきのなかで苦難を生き延びる力を醸成してきたことに注目していた。東日本大震災を受け、被災と復興の証人になろうと毎年東北に通い続けるなかで、自然環境や歴史とともに作りあげられてきた東北の文化が災厄を生き抜く力の土台となっていることを感じ、これを「土地の力」と名づけた。たとえば、特定の土地に根差した東北の民話活動は、生死を分かち危機を乗り越え、体験を次世代に語り継ごうとする努力を通じて人々を繋ぎ、全国の支援者を巻き込みながら町の復興に寄与していた。これらを説明しようとする時、個に基づくトラウマやレジリエンスの概念では不足であり、先祖代々の歴史が刻まれた土地との強い結びつきを考慮に入れた共同体もしくは集合体（コレクティブ）を想定する必要があった。そのなかにも個も含まれている。この土着性（the indigenous）を心理学に持ち込む理論展開ができればと考えている。

話題提供 2：土着の世界観に基づく統合的観点（韓圭錫）

村本らは、大規模な災害を経験した地域社会で現れるコミュニティ復元活動を理解するために、地域住民たちの民話活動や祭りを選り、「土地の力」というテーマで研究を進めてきた。このアプローチは、現代心理学の分析的(analytic)アプローチとは異なり、土着心理学的哲学を通してその認識論的基盤を正当化することができる。「土地の力」研究は、これまで様々な経路を通して言及されていた総体的 (holistic) アプローチを具現する研究になりうる。人間を、自然と分離された存在ではなく、統合された存在として見る東アジア人の世界観に基づく研究の価値と新しい観点から出てくる洞察について議論したい。この議論は、個人中心の現代心理学が直面している問題に対する代替的な探求を可能にするだろう。

New Developments in Japanese-Korean Indigenous Psychology:

Focusing on the Concept of "the Power of the Land"

ITO Tetsuji (Ibaraki University), Moderator

OH Sun Ah (Kyoai Gakuen University), Moderator

KIM Jihye (Waseda University), Moderator

HAN Gyuseog (Chonnam National University), Presenting Author

MURAMOTO Kuniko (Ritsumeikan University), Presenting Author

MINAMI Hirofumi (Ritsumeikan University), Discussant

DO Seung Lee (Sungkyunkwan University), Discussant

Language: Japanese and Korean with interpretation

「障害」と「病い」をめぐる質的研究

企画/司会/話題提供： 古井克憲（和歌山大学教育学部）
企画/話題提供： 藤田裕一（神戸学院大学総合リハビリテーション学部）
話題提供： 石田絵美子（兵庫医科大学看護学部）
話題提供： 道信良子（福井県立大学看護福祉学部）

企画趣旨

『質的心理学研究第24号』で組まれる特集「『障害』と『病い』をめぐる質的研究」のキックオフシンポジウムである。本シンポジウムでは、心理・医療・看護・福祉等の領域で、話題提供者がどのようなリサーチクエストをもち、どのように質的研究を行ってきたのか、について発表し、「障害」と「病い」をめぐる質的研究の今後の展望についてディスカッションを深めたい。同時に、リサーチクエストの問いを明らかにするために、どのような研究デザインを用いてきたのか、及び研究方法論に関するディスカッションも試みたい。

重度知的障害者の地域生活支援の現場でのフィールドワークから

：古井克憲（和歌山大学教育学部）

私はこれまで、重度知的障害者の地域生活支援の現場で約20年間フィールドワークを行い、社会福祉学の領域で研究を進めてきた。リサーチクエストは、重度障害者がどのようにグループホーム（GH）や一人で生活しているのか、重度障害者が「自分らしく地域で当たり前暮らし」ためにどのような支援が求められるかである。作業所での実習生やGHでのヘルパーとしての参与観察、職員及び障害のある人への聞き取り、現場主催の学習会への参加、アクションリサーチも実施し、その結果を発表してきた。この間、福祉制度や社会状況は大きく変化している。研究倫理の取り扱いがより厳重になされるようになった。今回は、私のフィールドワークの省察とともに、語ることが困難な重度障害者の支援に関わる質的研究について、今後の展望を含めて考察する。

身体障害者の当事者性と質的研究、ミックスメソッド

：藤田裕一（神戸学院大学総合リハビリテーション学部）

私は身体障害者（二分脊椎症者）の当事者として、身体障害者（二分脊椎症者中心）に関する心理学、社会福祉学にまたがる研究を行ってきた。身体障害者の当事者として感じてきた「身体障害があっても幸せに生きることができる」という思いが、「身体障害がありつつも幸福感が高まることや、障害の意味づけが変化することに影響する要因は何か」というリサーチクエストとなり、量的研究と質的研究を組み合わせたミックスメソッドを用いて調査を試みてきた。今回は私のこれまでの、特に質的研究で行ってきた内容の紹介とその省察、ならびに質的研究と量的研究を組み合わせたミックスメソッドの意義などを紹介する。その上で、身体障害者の当事者性の理解という点にもつながると考えられる質的研究の今後の展望と可能性について考察する。

「障害」や「病い」を持つ人々の日常を記述するということ

：石田絵美子（兵庫医科大学看護学部）

近年医療改革の下、入院期間の短縮化が推進されている。報告者は、そのような時代の流れに取りこぼされているかのような筋ジストロフィー病棟や精神科療養病棟で、長期間療養生活を送る患者たちの生活や彼らを支援する看護師たちのかかわりに関心を持ち、研究を行ってきた。患者たちの入院生活は、病院という組織の中での様々な管理や規則下にあり、一般社会と比較して非日常の世界である。しかし、鷲田（2008）が非日常は日常へと簡単に移行すると指摘したように、患者たちは、長期入院生活を非日常から日常の世界へと移行させて日々を過ごしていた。そのような患者たちの日々の営みを記述することによって、彼らが病院という枠組みを超えて、一人の人としてどのように生きるかという個々の姿勢を見だしてきた。しかし、そのような彼らの日常を記述することの意義・意味については十分に検討してこなかった。そこで本報告では、「障害」や「病い」を持つ人々の日常を記述することはどのようなことなのかについて考え、その可能性について考えてみたい。

小児がんの子どもたちが生きる姿を通して、子どもの生命を大切にする社会づくりについて考える：道信良子（福井県立大学看護福祉学部）

私は、人としてこの世界に「在る」ということを、小児がんの子どもたちの生きる姿から考えている。私は「在る」とは「生きる」ことと同じであるととらえているが、私の専門である医療人類学では、人が「在る/生きる」ことを、医療の制度とのかかわりのなかでとらえていく。小児がん医療には、小児がんを患っている子どもを治療する医師、病棟や外来で小児がんの子どもの看護にあたる看護師がいる。さらに、さまざまなセラピストからなる多職種のチームも子どもの病気からの回復を支えている。病気の子どもたちも、自分の身体をいたわり、体力をつけて、治療に向き合っていく。手立てがなく、自分に与えられた時間を生きていく子どももいる。このような「小児がん医療」の制度は、人が人として在る/生きるということの何に光をあてていけば良いのだろうか。ヘルス・エスノグラフィの資料をもとにこの問いについて考え、その生命のありようにかかわらず、人としてこの世界に「在る」ということを尊重する社会づくりに向けて、考察する。

Qualitative Research on “Disability” and “Illness”

Katsunori Furui (Wakayama University), Moderator and Presenting Author

Yuichi Fujita (Kobe Gakuin University), Presenting Author

Emiko Ishida (Hyogo Medical University), Presenting Author

Ryoko Michinobu (Fukui Prefectural University), Presenting Author

Language: Japanese

コミュニケーションにおける身体性を問う

—コミュニケーションがつくる身体性，身体性がつくるコミュニケーション—

企 画	:	池口佳子（文京学院大学） 渡邊照美（佛教大学）
司 会（兼企画）	:	石井由香理（上智大学）
話題提供	:	栩川綾子（日本赤十字豊田看護大学）
話題提供	:	奥田紗史美（大阪教育大学）
話題提供	:	ミカロヴァー・ズザナ（上智大学大学院）
話題提供	:	加戸友佳子（神戸大学）
指定討論（兼企画）	:	堀田裕子（摂南大学）

企画趣旨

コミュニケーションにおいて、身体は、所与の前提であり、自明なものとされ、これまで十分に議論されてこなかった。しかしながら、コミュニケーションがいかにより我々の身体に影響を与えるのか、また、身体性はいかにして私たちのコミュニケーションを可能にし、条件づけるのかは問われるべき重要なテーマである。例えば、新型コロナウイルスを契機にした技術革新や「新しい生活様式」は、コミュニケーションと身体性にどのような影響を与えたのだろうか。日々、我々が何気なく行なっているコミュニケーションを、身体性に関わる探究をしている心理学・看護学・社会学の各領域の研究者とともに、見つめ直す機会としたい。

話題提供 1：患者の実存を支える身体性のつながり

—下肢切断患者への看護師のかかわりの内実（栩川綾子）

今回、下肢切断した患者への看護師のかかわりを、看護師が彼らを看護する場面に参与観察したデータから、現象学的に記述した。看護師は、下肢切断の選択しかなかった患者の過去の危機的状況を体感し、また切断後の患者の未来を志向しながら、前向きになっている自分を感じていた。下肢切断した身体で過去や未来を行き来する患者に、看護師は身体で応答しながら交流していた。本報告から、身体性のコミュニケーションの意味について考えたい。

話題提供 2：会うことのできない時代の心理臨床——学生相談の実践から

（奥田紗史美）

学生相談での実践をもとに、臨床的なコミュニケーションと身体性について考えたい。特に遠隔での心理支援と、対面での心理支援との違いについて、身体性の観点から考察する。遠隔の相談には、「その場のムード」を共有するには限界がある。しかし同時に、空間的距離をなくし、多様な人が相談にアクセスすることを可能にする。また、対面に伴う侵襲性を緩和することができる。遠隔での心理支援は、コロナ後も活用されるものと思われる。

話題提供 3：タトゥーにおける身体性と社会性（ミカロヴァー・ズザナ）

タトゥーイーたちがどのように自分の身体性をコミュニケーションに活用しているのか、またその相手は誰か。タトゥー・デザインの選択は、自己ナラティブの連続性や志向を支え、さらに、タトゥーイーたちは、タトゥーをネガティブに捉える規範と、より肯定的に捉える海外のタトゥー文化も参照しながら、自分の行為の意味づけを行っている。上記のようなタトゥーの身体性と社会性の間にある相互的なコミュニケーションについて報告する。

話題提供4：アトピー性皮膚炎の「掻くこと」はいかに捉えられてきたか (加戸友佳子)

本発表では、アトピー性皮膚炎病者の「掻く」行為の具体的な様相と、それがいかなるまなざしにさらされてきたかに焦点を当てたい。掻くことは身体のコントロール不全として認識されがちなが、一定の目的を持った身体への傷付けとも、精神疾患とも同一視できない独特の様相を呈し、それ自体掴みづらいものである。掻くことをめぐる考察は、現実に関わる皮膚とそれをめぐる相互作用についての認識論的検討も、必然的に伴うこととなる。

Physicality, Corporeality, and Embodiment in Communication:

Interrelation Between Aspects of the Body and of Communication

Yoshiko Ikeguchi (Bunkyo Gakuin University), Organizer

Terumi Watanabe (Bukkyo University), Organizer

Yukari Ishii (Sophia University), Organizer & Moderator

Yuko Hotta (Setsunan University), Organizer & Discussant

Ayako Tochikawa (Japanese Red Cross Toyota College of Nursing), Presenting Author

Satomi Okuda (Osaka Kyoiku University), Presenting Author

Michalova Zuzana (Sophia University, Graduate School) Presenting Author

Kado Yukako (Kobe University), Presenting Author

Language: Japanese

質的研究者、アートに学ぶ —誰に、何を、どのように伝えるのか—

企画・指定討論：	佐藤由紀（玉川大学リベラルアーツ学部）
企画・司会：	小澤伊久美（国際基督教大学教養学部）
企画・司会：	橋本あかね（大阪大学人間科学研究科）
企画：	河合直樹（札幌学院大学人文学部）
話題提供：	渡辺篤（現代美術家）
話題提供：	カタヨセヒロシ（俳優・ダンサー）
指定討論：	石川良子（松山大学人文学部）

企画趣旨

研究者がアートを研究対象としてみると、特にアートが **social engagement** として語られるとき、端的な「結果」に着目しがちだ。しかしアートは、特定の対象者に何をどう味わってほしいか、その鑑賞プロセスも自覚的に設計されている。そしてその設計は、作品が存在する前後の長い時間も含めて設計されている。

私たち研究者が研究対象としてアート作品をみると、あるいはアートという営みをみると、こういったことを理解する必要がある。さらに言えば、こうした「自覚的な設計」は、私たち研究者にとっても重要であると言えるだろう。誰に何の目的で何を伝えたくて、その研究をするのか。研究者はともすれば、同じ領域・同じ分野の中で形成された「お作法」の中で、こうした点には無自覚になってしまっていないだろうか。また、伝える対象と目的に自覚的であったとしても、その研究の営み、そして伝え方をどのように設計すればどれくらいの持続に耐えうる強度があるのかまで意識しているだろうか。質的研究に取り組む者が領域を超えて拡がり、社会的にも一定の認知を得た今、私たちは改めて自分達が誰に何をどのような目的からどのように伝えるのかを見つめ直す必要がある。

そこで本企画では、現代美術家や俳優といった実践家の方に、作品の作り手の視点のもちかた、手法の選択、強度の高い作品として成立させるためにおこなってきたことなどをお話しいただいた後、作り手や作品を学術的視点からみてきた研究者とともに議論をおこない、最後はフロアからの質疑応答も含め、アートの智慧を学べればと考えている。

話題提供1：ひきこもりと共に世界を変える方法（渡辺篤）

現代美術家。神奈川在住。東京藝術大学大学院修了。武蔵野美術大学非常勤講師。2020年「横浜文化賞文化・芸術奨励賞」。2022年は「国際芸術祭あいち」及び「瀬戸内国際芸術祭」へ参加。

近年は、自身も元当事者である「ひきこもり」にまつわる関係性の課題について、当事者と協働するアートプロジェクトを多数実施。姿が見えづらく、その声を聞くことに困難さが伴う孤立/孤独問題は、コロナ禍において今日的なテーマとなったが、同時に人類普遍の課題と言える。価値を拡張し続ける「現代アート」を媒介に、一体どこに何の変化をもたらしてきたのか？ひきこもりをやめさせることを目的化しないアートとは？その一見、複雑な実践を、作品の解説を交えながらご提示します。<https://www.atsushi-watanabe.jp/>

話題提供2：実演家から見るインプロのおもしろさと矛盾（カタヨセヒロシ）

ぼくは1997年に即興の芝居（インプロ）に出会い、まだ日本では知られていなかった即興演劇を公演として成立させるための試行錯誤を繰り返してきました。現在は「この瞬間を一緒に笑おう」を合言葉に即興の芝居×コメディパフォーマンスをする男6人組グループ「ロクディム」の共同主宰をしています。因みにこのメンバーは97年～98年に出会い共に試行錯誤をしてきたメンバーでもあります。今なお公演として成立するための試行錯誤は続いています。ぼくたちの公演はライブが基本なので完全に同じことを繰り返すことはできません。しかし、成立する確率を上げることはできてきました。これまで27都府県で活動を実施、学校や企業等からの依頼でワークショップもおこなってきましたが、そのプロセスをお話ししたいと思います。<https://6dim.com/>

指定討論：アートに学ぶ（石川良子・佐藤由紀）

Qualitative Researchers, Learning from Art:

To Whom, What, and How Do We Convey?

SATO, Yuki (Tamagawa University), Discussant

OZAWA, Ikumi (International Christian University), Moderator

HASHIMOTO, Akane (Osaka University), Moderator

KAWAI, Naoki (Sapporo Gakuin University), Organizer

WATANABE, Atsushi (Contemporary Artist), Presenting Author

KATAYOSE, Hiroshi (Actor & Dancer), Presenting Author

ISHIKAWA, Ryoko (Matsuyama University), Discussant

Language: Japanese

ナラティブラーニングの射程と可能性

企画： 横山草介（東京都市大学 人間科学部）
話題提供： 庄井良信（藤女子大学 人間生活学部）
話題提供： 嶋口裕基（名城大学 教職センター）
話題提供： 横山草介（東京都市大学 人間科学部）

企画趣旨

ナラティブという概念と学習や教育という概念との接続可能性を検討していくための足掛かりを与えてくれる概念の1つに「ナラティブラーニング (Narrative Learning)」(Hakkarainen, 2008) という概念がある。この概念は、ナラティブという概念がその視野に収める現実世界と虚構世界とを特定の筋 (plot) のうちにむすびつける機能や、自己や文化、出来事を動的に意味づける機能といった点に着目しつつ、人間の学習という営為を意味生成という観点から一方においては認識論的に、他方においては実践的に刷新しようとする挑戦の1つとしてみてよいだろう。だが、ナラティブという概念の多義性も一因してか、「ナラティブラーニング」という概念のその魅力的な響きに比して、この概念の射程や可能性については未だ曖昧さが残されているようにも思われる。そこで本シンポジウムでは Hakkarainen の「ナラティブラーニング」の概念を再訪しつつ、ナラティブ概念と学習、教育との接続可能性についての議論も含む Bruner のナラティブ論との対話的な検討を通して、ナラティブラーニングという概念の射程とその可能性について発展的な検討を行うこととしたい。

話題提供 1：ストーリーテリングと即興詩人のアート（庄井良信）

Vygotsky は「芸術心理学」（1925/1971）のなかで、クルイロフの寓話「狼と子羊」を例示し、読者がイメージ体験する悲劇のカタストロフィ (catastrophe) の中に、心的情動体験の1つの典型を見いだしていた。また、Vygotsky は、遊びと創造的想像に関する論稿の中で、自己と環境との「間」に生じる心的情動体験 (perezhivanie) が、遊び、演じる世界 (play-world) の重要な契機であると考えていた。その文脈で、Vygotsky は「遊びは『発達の最近接領域』を創造する」と言及した。

Hakkarainen が構想したナラティブラーニングは、こうした Vygotsky の遊びと創造的想像に関する文化歴史学派的理論を背景にしている。それは、虚構場面を伴うプレイワールド (演劇空間) において、自己物語 (self-narrative) のプロットを、文化の探索と創造という物語のプロットに投影し、新たな意味を創造し合う学習活動の理論として展開した。そこには、①人類初期の共同体の儀式 (演劇) としてのストーリーテリングで、語られ (語り合われた) 文化的ナラティブ、②心的情動体験が、揺らぎのある多声楽的な対話の中で語られ、語り直された協働的ナラティブ、③即興詩人が伝承してきた詩的ナラティブという3つの位相があった。シンポジウムでは、この動的な接面を明らかにしたい。

話題提供 2：ナラティブと規範：文化の弁証法を手がかりに（嶋口裕基）

Bruner はナラティブを規範 (canon) から逸脱したストーリーと見なしている。規範からの逸脱がない限り、ナラティブとしての語りは起こらない。ナラティブを学習の媒体としてみなすとき、Bruner の考えに基づけば、「規範からの逸脱」がキーポイントとなる。

規範からどうして逸脱してしまうのか。Bruner の理説に手がかりを求めるなら、「文化の弁証法」

(dialectic of culture) という概念がその候補として挙げられる。文化の弁証法に基づけば、規範は文化の一部である。そしてその規範は絶えず想像できる別のものと衝突している。

文化の弁証法から見ると、ナラティブに規範が含まれているのであれば、その規範は絶えず想像できる別のものと衝突していることになる。だから、ナラティブは規範の逸脱を描くのである。ナラティブを学習の媒体にするには、あるいはナラティブが学習の媒体となるには、「想像できる別のもの」が必要となる。想像できる別のものが生まれる条件を探りつつ、学習の媒体としてのナラティブに検討を加える。

話題提供 3 : Narrative Learning を「意味の行為」の視座から再定義する（横山草介）

Bruner (1990) の「意味の行為 (Acts of meaning)」は、不測の事態に対する精神が、当の事態を理解可能にする可能性の脈絡 (context) を探索する行為として再定義することができる (横山, 2018a, 2018b, 2019)。Bruner において「ナラティブ (narrative)」という概念は、この可能性の脈絡を探索する行為の媒体として位置づけることができる。では、こうした Bruner の視座から Narrative Learning という概念の再定義を試みるならば、一体どのような概念上の視野が拓けるだろうか。Bruner (1990) の「意味の行為」論をパラフレーズするならば、そこに見出されるのは、何らかの「驚き (thaumazein: θαυμάζειν)」の体験を契機として、当の体験を理解可能にし得る可能性の脈絡を探索する行為として定義される探究のプロセスである。そして、ナラティブという概念は、「驚き」の体験を理解可能にし得る可能性の脈絡を探索する行為を跡づけ、そこに見出された何らかの意味を他者との間に共有可能なかたちで差し出す媒体として位置づけられることになる。Narrative Learning という概念をこの意味のもとに再定義することによって、同概念の理論的、実践的な視野を拡張することができるのではないだろうか。

Perspectives and Possibilities on Narrative Learning

Sosuke Yokoyama (Tokyo City University), Moderator

Yoshinobu Shoi (Fuji Women's University), Presenting Author

Hiroki Shimaguchi (Meijo University), Presenting Author

Sosuke Yokoyama (Tokyo City University), Presenting Author

Language: Japanese

フィールドに花開く質

—社会・文化的、歴史的行為としての「解釈」と「翻訳」—

企画・司会： 木下寛子（九州大学大学院人間環境学研究院）

話題提供： 辻本昌弘（東北大学大学院文学研究科）

話題提供： ハッ塚一郎（熊本大学大学院教育学研究科）

話題提供： 保坂裕子（兵庫県立大学環境人間学部）

企画趣旨：「解釈」と「翻訳」という実践・行為

本企画はフィールドにおける「解釈」と「翻訳」の意味と役割と共に考えようとする試みである。「質的研究」では、フィールドにおいて誰かや何かに関わって何かを理解するところに新しい知が見出されることを期待する。その時重視されるのは、「説明」（事物や出来事が「何故かくあるのか」見通しを良くする行為）よりもフィールドで領得されている意味をクリアに見えるようにする「解釈」の行為だった。そして、解釈されたものが例えば心理学の領域において表現される過程、そしてその心理学領域の成立にも「翻訳」という出来事が生じている。心理学ないし社会科学の知にとっての「解釈」と「翻訳」の意味と役割を問うことは、質的研究において再発見された幾重にも重なる理解の位相を解きほぐす作業であり、同時に、日本で「心理学する」（心理学を専門領域として引き受けて、心理学的に対象理解をしようとする）ことにとっての質的研究の意味を掴み直すことに繋がるだろう。なお今年6月の“Blooming qualities in fields: For psychology as historical/interpretive practices”(in SQIP conference 2022)の議論を日本語で再開する目論見も兼ねている。

話題提供1：間接的抵抗について（辻本昌弘）

この話題提供では、権力者に対する間接的抵抗の事例を提示したうえで、理論と実践の両面から考察をくわえる。抵抗には、直接的抵抗と間接的抵抗の2つがある。直接的抵抗とは、非人道的行為をおこなう権力者と、処罰を覚悟のうえで公然と対決する行動である。民衆蜂起、抗議デモ、ストライキがその代表例である。直接的抵抗をすると、社会的排斥などの不利な処遇、逮捕や投獄、場合によっては殺害といった処罰を被ることがある。間接的抵抗とは、処罰を被らないかたちで権力者の非人道的行為を骨抜きにする行動である。たいていの間接的抵抗は、権力者に表面上は服従するふりをしておきながらこっそり逆らうという面従腹背のかたちをとる。この話題提供では以下の3点を論じる。①ミルグラムの服従実験に仮託して間接的抵抗がいかなるものか示す。②戦争や虐殺といった極限状況で発生した間接的抵抗の事例を提示する。③間接的抵抗の有効性と限界を理論と実践の両面から考察する。

話題提供2：いじめ・火事・危険なもの：言説の病理と翻訳的対応（ハッ塚一郎）

いじめを日本固有の社会病理とみなす信憑は根強い。しかし国際比較研究は、いじめが普遍的な現象であることを早い段階から示してきた。比較研究は同時に、日本的ないじめ現象に固有の偏りや特徴も明らかにしつつある。ところが、いじめを日本に特有の悪しき伝統と位置づけ、自然現象のごとく避けがたい絶望的な宿命のようにみなす感覚は、むしろ一層強まっている。いじめを忌避し関わり合いを避ける風潮の一方、取り返しのつかない深刻な事案が表面化した途端、部外者による激しいバッシングが起きる傾向も強まっている。複雑な課題に向き合い時間をかけるのではなく、とりあえず先送りにして様子を見、動向が定まったら尻馬に乗るような言説的傾向にこそ、日本的ないじめの本質を見出せるかもしれない。こうした構造を対象化し、教職志望学生を鼓舞しいじめ対応の不安を少しでも軽減するための言説実践「火事のメタファー」について報告する。あわせて、対話と自己理解としての翻訳、自文化内部における発見とアクションとしての翻訳という論点について考察する。

話題提供 3：子どもの貧困問題を誰の「問題」とするのか（保坂裕子）

早急に対応が求められる多くの社会的課題のなかでも特に「子どもの貧困」の問題は、子どもの虐待問題やいじめ問題とならび、命に関わる急を要する課題であることは確かであろう。いわゆる「子ども食堂」の急速な増加が、そのニーズの高まりを顕著に示しているともいえる。しかし一方で、「子ども食堂」の増加は果たして、喜ぶべきことなのだろうか。それは「子ども食堂」の機能をどのように意味づけるのかによってもこたえが異なる。言い換えれば、事態をどのポジションからどのような言説で語り、解釈するのかによって評価が異なるのである。そこで本シンポジウムでは、発表者が続けているさまざまな課題を抱える子ども支援活動へのフィールドワークから見えてきた、ポジションの違いによる言説の差異や多様さを提示し、子どもの貧困問題を語る言説の整理を試みることで、「問題」の所在を確認したい。そのうえで、それぞれの主体が互いに協働していくために、それらの言説がいかように翻訳されているのか、あるいはどのような翻訳が必要となるのかについて議論したい。

Blooming Qualities in Fields:

For Psychology as Historical Practices / Interpretive Acts

Hiroko KINOSHITA (Kyushu University), Moderator

Masahiro TSUJIMOTO (Tohoku University), Presenting Author

Ichiro YATSUZUKA (Kumamoto University), Presenting Author

Yuko HOSAKA (University of Hyogo), Presenting Author

Language: Japanese

闘病記の活用と可能性

企画： 星直子（所属なし）
司会： 星直子（所属なし）
話題提供： 門林道子（日本女子大学人間社会学部）
話題提供： 菊池麻由美（東邦大学看護学部）
話題提供： 井出里美（帝京大学医学部付属病院）
指定討論： 寺山範子（湘南鎌倉医療大学）

企画趣旨

私達は「闘病記を読む会」を約2年間継続してきた。闘病記とは、「病気と闘う（向き合う）プロセスが書かれた手記（門林：臨床死生学事典、2000）」である。この定義においては、家族が書いたものも含まれるようになった。メンバーには看護職研究者・実践者、社会学研究者、図書館司書、学生（学部、院）などが学際的に加わっている。これまでの会では、対象にした闘病記は、障害、がん、脳機能障害など多様な闘病記を読んできた。当事者からの視角はいわゆる疾病、治療の知識を超え、当事者の病いをもって生きる生活体験を学び、さまざまな視点で視点からの体験について学べ、意見交換することができた。

自主シンポジウムでは、この成果をもとに、今一度、闘病記とは何か、闘病記を「読む」ことの意義等を研究と実践の視角、講義や臨床の現場での活用などから検討し、参加者と意見交換することによって、意義を共有し、会のより有効な発展の機会としたい。

話題提供1：「闘病記」とは何か、変遷、研究への活用（門林道子）

闘病記とは何か、がん闘病記の変遷、研究への活用について提案する。

話題提供2：講義への活用（菊池麻由美）

看護系講義における活用の実際と学生の反応について報告する。

話題提供3：臨床における活用（井出里美、寺山範子）

実践活動で見えにくい、当事者の体験についての理解について報告する。

Discussion with the illness Narratives

Naoko HOSHI (Independent), Moderator

Michiko KADOBAYASHI (Japan Women's University), Presenting Author

Mayumi KIKUCHI (Toho University), Presenting Author

Satomi IDE (Teikyo University Hospital), Presenting Author

Noriko TERAYAMA (Shonan Kamakura University of Medical Science), Discussant

Language: Japanese

ビデオデータを用いたコミュニケーション研究の現在

—医療通訳、在宅医療、遠隔コミュニケーションによる「常識批判」—

企画・司会：檜田美雄（神戸市看護大学看護学部教授）
話題提供：飯田奈美子（立命館大学専門研究員）
話題提供：松浦智恵美（立命館大学大学院先端総合学術研究科）
話題提供：加戸友佳子（神戸大学）
指定討論：堀田裕子（摂南大学 学長付特任教授）

企画趣旨

本シンポジウムは、実際のビデオデータに基づいて、3人の話題提供者から「常識批判」的な知見の報告をして頂くという企画である。

21世紀に入って22年目となった現在、学問世界の中で社会学という科学は、他の諸科学とはかなり異なった位相に進みつつあることが明確になりつつある。

それは、佐藤俊樹に言わせれば、「社会学2.0」（反社会学）ではない「社会学1.5」（常識の反転は必ずしも常識否定とは限らない、と考えるような社会学）への方向性であるといえよう（佐藤俊樹 2013 「常識をうまく手放す」、in『社会学ワンダーランド』新世社）。

また、筒井淳也に言わせれば、「反証可能性」が高いことを金科玉条とした「演繹的推論モデル」の呪縛から離脱した「『非サイエンス』的な知としての社会学」への方向であるといえよう（筒井淳也 2021 『社会学』岩波書店）。

「社会学1.5」にしろ、「『非サイエンス』的な知としての社会学」にしろ、現実社会との照応関係が社会学としての成立に重要であるということが、佐藤と筒井の2人によって強調されている。つまり、手間暇がかかるのだ。頭の中だけでは、学問にならないのだ。そのかわり、社会変動の激しい現代社会では、実際の社会との照応関係が担保されるため、社会学は他の学問よりも「現実フィット感」のある学問としての地位を得ることができる。そういった位相で、つまり、他の科学とは価値基準の異なる学問として成立する方向性で、現代社会学は発展しつつあるのである。

しかし、それは「質的心理学」が目指してきたことだったのではないのか。現実にはありそうもない「実験状況」を元にした「架空の/理想の心理学的人間」の形成というようなことを批判するとき、すでに目指されていたことではないのか。あるいは、それは「エスノメソドロジー・会話分析」が目指してきたことだったのではないのか。現実社会内に存在している意味連関と関係のない「尺度」や「因子」を外から当てはめる、「法則発見的な社会学」の現実遊離性に対置する形で、「レリバンス」を重視して社会現象を探究してきた EMCA が狙っていた方向性なのではないだろうか。

以上の問題意識によって、今回の3本の発表は紐付けられている。すなわち、思念的検討だけではたり付くことができないような「常識批判」が、ビデオデータを用いることで可能であること。そこから、単なる「常識」の折り返しではないような「常識批判の知」の獲得が可能となること。3本の研究はいずれも、これらのことを例証しようとするものである。「指定討論者（コメンテーター）」には、2018年に、ビデオデータを元にした「残されるモノの意味：線条体黒質変性症患者とその介護者の事例より」の研究で学会論文賞（優秀ビデオエスノグラフィ論文）を受賞した、堀田裕子先生をお招きする。他の科学とは違う振る舞いを始めている「社会学」の胎動を明確にして下さるだろうと信じている。

話題提供1：医療通訳において、通訳者がしている非通訳的活動（飯田奈美子）

通訳では、通訳者は、「文脈にしたがって話し手の言語Aを聞き手の言語Bに置き換えている」だけではない。通訳者は、通訳をすると同時に、「文脈」を創り出している。そして、この「文脈に従いつつ、文脈を創出する活動」は、どうじに、「話し手-聞き手」関係に対する関与ともなっているのが通例である。つまり、通訳は、常識的に通訳と思われる活動を逸脱して、通訳活動をしている。しかし、そのようにしてしか、通訳は十分には達成できない活動なのである。本発表では、上記のような議論を、現代社会学的に「モノと人間との関係も踏まえた参与枠組構造」に配慮しながら展開する。「常識批判」の豊かさが見えてくることになるだろう。

話題提供 2 : ALS 患者を取り巻く器用仕事化された日常的相互行為 (松浦智恵美)

ALS 患者が在宅療養をするとき、家族介護者はプロフェッショナルになっていく。しかし、そこでの「熟練」の方向は、医療者が「熟練」する方向と同じではない。利用できる資源も違えば、発想の拠点となる思考のスタイルも違うからだ。我々は、インタビューだけでは聞き出すことができない、介護当事者（家族）にも意識化されていない「熟練」を、ビデオ映像の中に読み解いていった。たとえば、人工呼吸器にかかる負荷の上昇は、吸引の必要性の適切な通知として扱われていた。また、吸引カテーテルは置場によって、清濁が区別されていた。家族の中にも、介護参与の程度にかなりの差があるが、むしろ業務が「器用仕事化」されることで、そのような凸凹問題のリスクが回避されていたようでもあった。

話題提供 3 : AI との会話が明らかにする日常会話の暗黙の了解 (加戸友佳子)

我々の生活に、どんどん「人工知能」が入ってきている。本報告は、2022 年 1 月からアマゾン社のエコーショーという「スマートスピーカー」を用いた「遠隔コミュニケーション実験」を複数回行う中で見えてきた「人工知能（アレクサ）」と「人間世界の常識」との相互作用を見ていく。どのような「常識批判」に我々はたどりついただろうか。データを見ながら聞いて頂きたい。

Today's Communication Research Using Video Data:

"Critique of Common Sense" by Researches on Medical Interpreters,
Home Medical Care, and Remote Communication

Yoshio KASHIDA (Kobe City College of Nursing), Moderator

Namie IIDA (Ritsumeikan University), Presenter

Chiemi MATSUURA (Ritsumeikan University), Presenter

Yukako KADO (Kobe University), Presenter

Yuko HOTTA (Setsunan University), Discussant

Language: Japanese

主体性をとらえなおす —社会文化的視点から—

企画・話題提供： 土倉英志（法政大学社会学部）
話題提供： 川床靖子（大東文化大学名誉教授）
話題提供： 青山征彦（成城大学社会イノベーション学部）
話題提供： 宋雪梅（成城大学社会イノベーション研究科）
話題提供： 石渡美穂子（立教大学文学研究科）

企画趣旨

社会文化的な観点から人びとの行為主体性（agency）やアイデンティティ（以下、まとめて主体性と略記する）に迫ろうとする研究に焦点をあてる。主体性はその歴史的経緯や方法論的な制約から、個人の主観や語りの内容に矮小化してとらえられてきたきらいがある。他方で、主体性は問いなおされつつある。実践共同体への参加過程をアイデンティティの変化ととらえたり、社会-技術的なアレンジメントのもと実現されつつあることをエージェンシーととらえたり、語りに示されるポジショニングに主体性を見出す、といった具合である。主体性をとらえる視角は、状況論、活動理論、アクターネットワーク理論、ディスコース研究などの影響のもと多様になってきたと言える。本企画では、社会技術的な編成とのかねあいで達成されるエージェンシー（川床）、自身の理想でありながらも社会文化と切り離せないあり方で存在する理想そして生活（青山・宋）、相互行為での発話の意味交渉過程にみる主体性の制約（石渡）、行為の歴史が蓄積した場で達成される主体性（土倉）に焦点をあてた研究を報告する。各研究が主体性のどのような側面にどう迫ろうとしているのかをあわせて議論することで、主体性をより豊かにとらえる機会としたい（本シンポジウムは、日本認知科学会 教育環境のデザイン分科会の共催で行われる）。

多様な人間存在を描出するエージェンシー研究（川床靖子）

エージェンシーとは、もっと何かがしたい、何かが足りない、欲しいと感じ、プランを立てるといった、人が何かを望み、考え、感じる意志的行為（volitional actions）をいう。エージェンシーは、非人間物がその一部をなす集合体（人、モノ、装置の異種混淆の集合体）の配置・編成のあり方に依存して形成され、変化する。この発表では、ある活動への参加を通して集合的に形成され、変化するエージェンシーのあり方を具体的事例によって見る。そのことを通して、社会技術的配置・編成のあり方次第で多様なエージェンシーの形成、言い換えれば、多様な人間存在が可能であるということは、逆に、人間性の復権を意味するのだということを議論する。

筋トレ女子のライフスタイル：若い中国人女性が筋トレにはげむ理由 （青山征彦・宋雪梅）

本発表では、筋トレにはげむ若い中国人女性に対するインタビュー調査の結果を報告する。中国では、従来、スリムで弱くいと美しい女性がよしとされてきたが、近年は、健康的で力強い女性をよしとするイメージが広がりつつある。フィットネスブloggerや「天鵝臂」（ballet beautiful）、「郑多燕健身操」（Jung dayeon aerobic）（Jung dayeon（チョン・ダヨン）が独自に開発したエクササイズプログラム）などのフィットネスサイトが人気になり、ジムに通う女性も増えてきている。こうした変化の背景には、女性をめぐる社会的状況の変化や、女性自身の価値観の変化が関係していると考えられる。本発表では、インタビュー調査の分析を通じて、筋トレ女子という主体性が、さまざまな要因との関係の中でいかに作られているかを検討したい。

アイデンティティの攻防を捉える方法論としての談話分析（石渡美穂子）

相互行為場面における人々のアイデンティティを捉える際、それは発話に内在するものとして、あるいは発話の背景にあるストーリーを「探し出す」ことを通して解釈されてきた（Georgakopoulou, 2013）。本発表では、ミクロな相互行為がいかに発話の意味を生成し、同時にその意味が参加者を社会的に位置づけるのかを捉えるワーサム(Stanton Wortham, 2006; 2015)の談話分析を取り上げる。偶発的な言説群のアナロジーによって生成された新たな発話の意味が、結果として人種や障害に関わるアイデンティティを再生産するという点について確認し、この方法論における意義や限界について議論したいと考える。

場とつながる人生—コミュニティカフェのオーナーの語りから（土倉英志）

コミュニティカフェは人びとのつながりを支えたり、うながしたりすることに関心を寄せるカフェである。カフェはそれぞれにユニークな雰囲気醸し出している。オーナーや関係者（以下、彼女たち）に話を伺うと、カフェが、彼女たちがたどってきたこれまでの人生と分かちがたいありかたをしていることがわかる。カフェは多くの人びとにとって憩いの場、居場所となるが、そこは当然ながら彼女たちにとっての居場所でもある。つまり、彼女たちの人生とつながっている場のあり方が、他者とつながる彼女たちの人生を支えており、なにより人を惹きつける魅力となっている。

Rethinking Agency and Identity:

From a Socio-cultural Perspective

Eiji TSUCHIKURA (Hosei University), Moderator & Presenting Author

Yasuko KAWATOKO (Daito Bunka University), Presenting Author

Masahiko AOYAMA (Seijo University), Presenting Author

Song XUEMEI (Seijo University), Presenting Author

Mihoko ISHIWATARI (Rikkyo University), Presenting Author

Language: Japanese

生活世界とコモンズ — 農と食と心理学 6 —

企 画： 菅野幸恵（青山学院大学コミュニティ人間科学部）
司 会： 菅野幸恵（青山学院大学コミュニティ人間科学部）
話題提供： 菅野幸恵（青山学院大学コミュニティ人間科学部）
話題提供： 木下寛子（九州大学人間環境学研究院）
話題提供： 石井宏典（茨城大学人文社会科学部）
指定討論： 浜田寿美男（奈良女子大学名誉教授）

企画趣旨

「農と心理学」シンポジウムでは、2010年の茨城大会を初回とし、「農的な営み」から「都市的な生活」へと変容を遂げた時代として「現代」を見据えつつ、さまざまなフィールドからの問いかけとともに議論を積み重ねてきた。6回目となる本シンポジウムでは、「コモンズ」をキーワードとし、認可外保育活動、学校、沖縄北部の集落という三つのフィールドからの問いかけを議論の俎上にのせたい。ここでコモンズとは、宇沢（2000）によれば「もともと、ある特定の人々の集団あるいはコミュニティにとって、その生活上あるいは生存のために重要な役割を果たす希少資源そのものか、あるいはそのような希少資源を産み出すような特定の場所を限定して、その利用にかんして特定の規約を決めるような制度」のことをさす。

話題提供1：子育て・子育ての場としてのコモンズ（菅野幸恵）

私がフィールドとする「自主保育（親たちが自分たちの子どもを預け合う保育活動）」は特定の園庭園舎をもたず、河川敷、海、里山などの自然環境や公園やプレーパークといった場所で活動している。それらの場所は自分たちが占有する場所ではないため、外の力によって活動が制限されたり、変えられたり、時に失われてしまうこともあるが、市民の力で開発を免れ守られた場所やその維持に自主保育のメンバーが一役を担っている場所もある。またそれらの場所はさまざまな人がアクセス可能な場所であるため、思わぬ交流や時には軋轢が生じることもある。市民が共有地として守ってきた場所、自治体が管理する公園でのエピソードから子育て・子育ての場としてのコモンズについて考える。

話題提供2：コモンズとしての学校：「手入れ」する行為に注目して（木下寛子）

公立小学校は、学校教育を担う場であると同時に、地域の小さな単位である「校区」コミュニティの維持・形成拠点としての役割を担うことも期待されている。しかしその期待をよそに、後者の役割が具体的に達成される仕方は必ずしも明確ではない。学校統廃合をめぐる議論されてきた通り、学校施設が地域住民の利用に供されること（施設の共用）や、地域の子供が歴代学ぶ場として記憶され、地域の象徴となること以外に、コミュニティの維持・形成にどのような意味をもつだろうか。本話題提供では、校区や学校の変化の中で「手入れ（アフターケア）」（維持し、立て直し、明確化し、確認する）と呼びうる行為が生じる局面に注目し、学校の場に時に生じるコモンズとしての性格をとらえてみたい。

話題提供3：地域の共同性をささえるコモンズ（石井宏典）

沖縄本島北部のひとつの地域コミュニティをフィールドに、住民共用の広場をコモンズと位置づけ、それらが地域の共同性をささえてきたことを考察する。コモンズについては、「地域社会が一定のルールのもと、共同で持続的に管理している自然環境のこと、また、その共同管理のしくみそのもの」（宮内、2017）という定義をふまえつつ、ここでは、「地域の人びとによって持続的に手入れ活用されてきた場所、およびその運用の仕組み」とする。かつて砂地だった広場は、ムラ人たちの多様な営みが繰り広げられる場所であったが、近年の観光地化にともないアスファルトが敷かれ、観光客向けの駐車場となった。そうした事態のなか、ひとつの広場をめぐる住民共同のあらたな仕組みが編み出された。

Lifeworld and Commons:

Farming, Eating, and, Psychology

Yukie Sugano (Aoyamagakuin University), Moderator

Yukie Sugano (Aoyamagakuin University), Presenting Author

Commons as a place for children to grow up and child rearing

Hiroko Kinoshita (Kyushu University), Presenting Author

School as commons: focusing on the acts of (after)caring

Hironori Ishii (Ibaraki University), Presenting Author

Commons supporting local communality

Sumio Hamada (Nara Women's University), Discussant

Language: Japanese

ヤーン・ヴァルシナーの記号論的文化心理学と 複線径路等至性アプローチ (TEA) の関係性を考える — 「Boundaries (境界)」 概念への着目 —

企画・話題提供:	宮下太陽 (株式会社日本総合研究所未来社会価値研究所)
司会・話題提供:	土元哲平 (日本学術振興会・大阪大学人文学研究科)
話題提供:	小澤伊久美 (国際基督教大学教養学部)
話題提供:	上川多恵子 (立命館大学大学院人間科学研究科)
話題提供:	田中千尋 (立命館大学大学院人間科学研究科)
話題提供:	横山直子 (立命館大学大学院人間科学研究科)
指定討論:	木戸彩恵 (関西大学文学部心理学専修)
指定討論:	滑田明暢 (静岡大学大学教育センター)

企画趣旨

企画者らは、ヤーン・ヴァルシナー(Jaan Valsiner)の基本的な考え方が体系的に記述された著作『An Invitation to Cultural Psychology(文化心理学への招待)』(Valsiner, 2014, SAGE 社)の翻訳に取り組んでいる。ヴァルシナーの文化心理学の特徴は、ヴィゴツキーをその源流とする記号論的な文化心理学であるという点、時間概念を取り入れた動的な心理的過程を明らかにしようとする点にある。本シンポジウムでは『文化心理学への招待』で紹介されている主要概念の中でも「boundaries(境界)」に着目し、複線径路等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach; TEA)との関係性を考察する。

話題提供: 小澤・上川・田中・土元・宮下・横山

『文化心理学への招待』から境界に関わる概念と象徴的な図・ビジュアルを取り上げ、その要約的な解説を行った上で、TEA との関係性について話題提供を行う。取り上げる概念と図・ビジュアルは以下の通り予定している。

「境界: 第2章図 2.4 Boundaries on the beach」、「内化と外化: 第4章図 4.4 Laminar model of internalization/externalization as double transformation」、「サインヒエラルキー: 第6章図 6.6 Emergence of a fixed dominant regulatory (FDR) sign」、「個人的文化と集合的文化: 第9章 図 9.2 Where collective culture works」、「A と non-A: 第10章図 10.9 A model of dialectical synthesis」。

指定討論: 木戸・滑田

文化心理学を専門とし、TEA についての造詣が深いお二方を指定討論としてお招きし、それぞれの視点から境界と TEA との関係について議論を深めていただく。

Consider the Relationship between Jaan Valsiner's Semiotic Cultural Psychology and the Trajectory Equifinality Approach (TEA):

Focus on the Concept of "Boundaries"

Taiyo Miyashita (The Institute for Societal Values in Future Generations, The Japan Research Institute, Limited), Organizer, Presenting Author

Teppei Tsuchimoto (Japan Society for the Promotion of Science/ Graduate School of Humanities, Osaka University), Moderator, Presenting Author

Ikumi Ozawa (International Christian University, College of Liberal Arts), Presenting Author

Taeko Kamikawa (Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University), Presenting Author

Chihiro Tanaka (Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University), Presenting Author

Naoko Yokoyama (Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University), Presenting Author

Ayae Kido (Department of Psychology, Faculty of Letters, Kansai University), Discussant

Akinobu Nameda (Shizuoka University Education Development Center), Discussant

Language: Japanese

研究法を拡張しよう

—『質的心理学研究』21号特集

「質的研究法の拡張——機械、AI、インターネット」合評会—

企画： 松本光太郎（茨城大学人文社会科学部）
企画： 荒川歩（武蔵野美術大学造形構想学部）
話題提供： 香川秀太（青山学院大学社会情報学部）
話題提供： 坂上裕子（青山学院大学教育人間学部）
話題提供： 久保明教（一橋大学社会学研究科）

質的研究で扱う研究対象や研究テーマは個別具体であることが多いために、研究成果を批評し合う機会が少なく感じている。研究対象や研究テーマのダイバーシティが確保されている一方で、批評にさらされ、研究を鍛え、さらなる展開を促す後押しが足りていないところがある。

『質的心理学研究』誌上で特集が組まれるとき、特集の方向性を提示するキックオフシンポジウムが催されているが、特集論文が掲載された後にそれらの論文について批評する機会が設けられたことはこれまでおそろくなかった。

特集は提示された一つのテーマに応答した論文がまとまって掲載される。そのため、読者においては提示されたテーマについて思考を広げて深めるよい機会となることが期待される。『質的心理学研究』21号特集「質的研究法の拡張——機械、AI、インターネット」には、機械をはじめとする媒介物により拡張した新たな研究法とその研究実践を提示した4編の論文が掲載された。論文を通読した読者においては、質的な研究法が拡張可能であることをつかんでもらえたのではないかな。

本シンポジウムでは、『質的心理学研究』21号特集の合評会を催すことを通して、機械をはじめとするテクノロジーにより質的な研究法がさらに拡張していくことを後押ししたい。

今回は、論文の批評を3名の方に依頼した。香川秀太さんには人々が活動する現場で研究をする際に、機械をはじめとする媒介物が介入することによる（新たな）相互行為の形成について展望してもらうことを期待している。坂上裕子さんには本特集論文で取り上げられた媒介物の実用性、すなわち具体的な研究テーマに応える方法として研究を実施する際の有望な点と抱える課題を提示してもらうことを期待している。そして、久保明教さんには「テクノロジーの人類学」という隣接領域から越境してきてもらい、機械をはじめとするテクノロジーにより質的な研究方法を拡張する目論見について批評してもらったうえで、領域間の相互理解を深めることを期待している。

Let's Extend Our Research Methods!:

The J. J. of Qualitative Psychology Vol.21 Special Issue “Extending Qualitative Research Methods—Machines, AI, and the Internet” Joint Review Meeting

Matsumoto, Kotaro (Ibaraki University), Planner
Arakawa, Ayumu (Musashino Art University), Planner
Kagawa, Shuta (Aoyama Gakuin University), Presenter
Sakagami, Hiroko (Aoyama Gakuin University), Presenter
Kubo, Akinori (Hitotsubashi University), Presenter

Language: Japanese

「ザ・ベクデルテスト」をワークショップする —インプロ（即興演劇）とジェンダーの探究2—

企画・話題提供： 園部友里恵（三重大学大学院教育学研究科）
企画・話題提供： 直井玲子（東京学芸大学教育学部）
指定討論： 石田喜美（横浜国立大学教育学部）

企画趣旨

企画者（直井・園部）は、インプロ（即興演劇）におけるジェンダー・バイアスに問題意識をもち、2021年6月、日本で活動するインプロ演者たちとともに「インプロとジェンダー探究プロジェクト」を結成した。同プロジェクトでは、米国のインプロ劇団「BATS Improv」の Lisa Rowland らによって考案された上演形式「ザ・ベクデルテスト」（The Bechdel Test、以下「BT」と略記）を継続的に学び、日本において上演活動を継続している（直井・園部 2021）。

昨年開催された日本質的心理学会・第18回大会では、会員企画シンポジウム「「ザ・ベクデルテスト」をパフォーマンスする」をオンラインにて実施した。BTにおける「演者」と「観客」の関係のあり方、両者が守られるような安全な場所をつくりつついかにパフォーマンスにおけるジェンダー・バイアスの問題を掘り下げられるか、などが課題として残された。

本シンポジウムでは、「からだ」に着目し、「実際にやってみることを重視する。主に、BTの構成要素である【はじめのモノローグ】【ペインティング】【スナップショット】について、ワークショップ形式も取り入れ、実際に「からだ」を通して体験することにより、その意味を探究していく。

話題提供1：女性による即興モノローグの意義と課題（直井玲子）

インプロにおいて、女性演者は、男性主人公らの「母親」「娘」「恋人」といった役を演じることが少なくない。男性主人公には名前がついているのに対して、彼女らには名前がない。男性が演じる役の「アクセサリ」のような存在としてしか物語に登場しない場合もある。

BTでは、主人公は3人の女性であることが決められている。彼女らのモノローグからパフォーマンスが始まり、語られたモノローグをもとに、観客との対話によって彼女ら1人1人に名前がつけられていく。観客との対話をファシリテーションする「ペインター」の役割は、主人公像を決め固めることではなく、主人公を担う演者がインスパイアされるようなアイデアを観客とともに提案することである。

ここでは、こうした【はじめのモノローグ】と【ペインティング】を実際に体験しながら、女性演者による即興モノローグの意義と課題について討論していきたい。

話題提供2：「他の可能性」を探りながら日常を描くということ（園部友里恵）

脚本のないインプロでは、演者が自らのセリフやふるまいをその場でつくっていくことになる。一般に、ロングフォーム（長編の即興演劇）では、1つの物語に集中し、その物語を完結に向かって進めていく。そのとき、演者の意識は、“What comes next?”（次どうなるのか）が中心となる。

対してBTでは、主人公1人1人がどのような「日常」を生きているのか、誰と出会い、どのような感情をやりとりをするのかを断片的かつ複線的に描き出していく。演者の意識としては、“What else?”（他に何があるのか）が中心となる。

ここでは、【スナップショット】の一部分を段階的に体験しながら、BTにおける物語構築の可能性や課題について考察を深めたい。

指定討論：演者／観客の二分法を超えた対話の可能性（石田喜美）

「インプロとジェンダー探求プロジェクト」の目的は、演者と観客とがともに「『ジェンダー・バイアスを含むアイデアが舞台上で出てきたとき、どうするか』を対話し考えていくことであるという（直井・園部 2021, p.S154）。BT では演者と観客とが混ざりあい対話するための時間が設計されている。本シンポジウムでは、さらに参加者全員がワークショップを通じて演者/観客双方の立場を体験するが、このように演者/観客という枠組みを融解することは、どのような対話を可能にするだろうか。本シンポジウムでは指定討論者も一人の参加者としてワークショップを体験したのち、自身の経験を語るとともに、他の参加者の語りをつないでいくことによって、演者/観客が一体となった対話の可能性を探りたい。

*付記：本シンポジウムは、JSPS 科研費（基盤 C、21K00205）の助成を受けている。

Discussion of the Experience in “The Bechdel Test” Workshop:

Inquiry About Improv and Gender -2-

Yurie Sonobe (Graduate School of Education, Mie University), Moderator & Presenting Author
Reiko Naoi (Faculty of Education, Tokyo Gakugei University), Moderator & Presenting Author
Kimi Ishida (College of Education, Yokohama National University), Discussant

Language: Japanese

映画とビジュアル・ナラティヴ —「ドライブ・マイ・カー」の映像、身体、ことば—

企画・司会 : 家島明彦 (大阪大学キャリアセンター)
企画・話題提供 : やまだようこ (立命館大学 OIC 総合研究機構)
話題提供 : 細馬宏通 (早稲田大学文学学術院)
企画・指定討論 : 横山草介 (東京都市大学人間科学部)

企画趣旨

ビジュアル・ナラティヴとは、映像イメージによっても語る行為をさす。語り行為は、狭義のことばだけではなく、映像や身体を含めた広義のことばによって行っていることに、もっと注目すべきであろう。企画者たちは、ナラティヴやコミュニケーションにおいて言語中心主義からのターンが必要ではないかと考え、ビジュアル・ナラティヴのシンポジウムを継続して行ってきた。

今回は、映画とビジュアル・ナラティヴについて考えてみたい。映画は、認知や感情や身体に直接的に働きかけ、観客にさまざまな問いを投げかけてくれる興味深い媒体である。特に「ドライブ・マイ・カー」は、国際的に高い評価を受けた優れた作品というだけではなく、心理学者にとってもきわめて興味深い視点を多々提供してくれる。

そこで、映画「ドライブ・マイ・カー」を媒介にして、ビジュアル・ナラティヴの研究者と身体コミュニケーションの研究者が、共同生成的な対話を交わす場をつくってみたい。

本シンポでは、映画そのものを論じるよりも、映画を媒介にして「ことばとは何か?」「自己とは?」「他者とは?」「ことばと身体の関係」「映像と言語の関係」など、本質的で原理的な問題を考えたい。

ことばと動作、それぞれ違った立場、違った方法論で、二人の研究者がこだわってきたコミュニケーションというテーマに関して、ものの見方や方法論など、広く深く、自由に奔放に語りあってみたい。

もの語りは、「生まれるもの」「生きもの」である。その場の出会いで生まれる「生のことば」「生きたことば」による一回性の共同生成の対話を楽しんでみよう。

話題提供 1：不在のコミュニケーションと多声対話 (やまだようこ)

「ドライブ・マイ・カー」は、「私の車を運転して」という奇妙な題である。私の車(身体)は、私のものなのに、自分では運転できず、他者によって動かされる。演出家の妻が寝物語で語る「八つ目うなぎ」が、他者の身体を乗っ取って生きるのとは、逆である。

車の中では、亡き妻が吹き込んだチェーホフ「ワーニャ叔父さん」の録音テープが繰り返し流れる。不在の人の肉声が、まるで今もここにいるかのように。ことばは、今、ここに現前しているものとは無関係に、指示対象も、感情もなく、無機質に、テキスト通りに繰り返される。その死んだ亡霊のようなことばが、今ここに生きるものたちの身体にひびき、それを聞く人々の人生を変えていく。この映画にバルトやデリダのことばを重ねてみよう。

「二つの時間の間で、わたしは身動きもならない。あなたは行ってしまった(だからこそ、私は嘆いている。)あなたはそこにいる(わたしはあなたに話しかけているのだから)。(バルト『恋愛のディスクール』)。」

「亡霊(=環り来るもの *revenant*)は思いがけず訪ねてきた。このものはただ自分だけで語っていた。わたしの方がそれに対して釈明せねばならず、それに答ええないしはそれを引き受けねばならなかったのだ(デリダ『火ここになき灰』)。」

改めて考えれば、ことばとは自分のものではないし、コントロールもできない。ことばとは、本来的にここにいらないもの(死者)と交わす「不在のコミュニケーション」ではないだろうか?そして自己とは「個」に閉じられた単一体ではない。映画では村上春樹の原作も含めて多重のテキストが、今この映像世界において身体をもつ俳優たちに引用され、かさねられ、むすびあわされる。この多声対話の世界をバフチンの対話論と重ねて考えてみたい。

話題提供 2：手の劇：ことばと動作のあいだ（細馬宏通）

映画では、台詞に基づく俳優の自発的な演技がカメラによって撮影され、それがショットの連鎖として構成され、わたしたちに物語を読み取らせる。これはあらゆる映画にとって基本的な営みだが、それぞれの映画によって異なる形で達成される。本発表では、「ドライブ・マイ・カー」のワン・シーン、イ・ユナとジャニス・チャンが公園で「ワーニャ伯父さん」の一場面を演じるシーンを取り上げ、2人の演技がどのようにショットによって構成され、ショットはどのように2人のいる空間を明らかにしていくのか、2人のどのような身体配置の変化からわたしたちは物語を読み取るのか、そこでは、手話と声という異なるメディアのことばはどのように描かれ、ことばを表す手と動作する手とはいかに対話を編んでいくかを論じる。

Movie and Visual Narrative:

Image, Body, and Language of “Drive My Car”

Akihiko Ieshima (Osaka University), Moderator

Yoko Yamada (Ritsumeikan University), Moderator, Presenting Author

Hiromichi Hosaoma (Waseda University), Presenting Author

Sosuke Yokoyama (Tokyo City University), Moderator, Discussant

Language: Japanese

障害概念の再生産からの逃避

企 画： 楠見友輔（日本学術振興会特別研究員 PD）
司 会： 楠見友輔（日本学術振興会特別研究員 PD）
話題提供： 辰己一輝（大阪大学人間科学研究科）
話題提供： 楠見友輔（日本学術振興会特別研究員 PD）
話題提供： 石渡美穂子（立教大学大学院文学研究科）
指定討論： 石黒広昭（立教大学文学部）

企画趣旨

本シンポジウムの目的は、障害に関する問題を新しい方法で思考するための議論を行うことである。障害概念の理論研究は、20世紀末の社会モデルの紹介以降活発になされ、2000年代以降にはフェミニズム、ポスト構造主義、現象学などの受容により、障害を社会構築物とみる立場が生じた。障害概念についての諸理論は、障害についてのステレオタイプの思考を解消し、障害者の権利擁護のための社会変革を促した。しかし、障害についての存在論的・認識論的な問いに答えることは、現実には生じている障害についての複雑な問題を単純化することと表裏一体の関係にある。また、特定の障害概念に依拠して障害に関する研究をすることは、既存の概念の再生産に陥り、障害当事者の声や経験はそのための道具として使用される恐れがある。これに対して、現実には起こっている障害（者）に関わる問題は、静的な構造に還元し得ないダイナミックな特徴を有する。本シンポジウムでは、障害概念を固定化するという再生産を防ぎながら、どのように障害について新しい方法で思考することが出来るかについて、オープンエンドに検討する。

話題提供1：辰己一輝（大阪大学人間科学研究科）

哲学を専門とする発表者のこれまでの研究成果（辰己2020, 2022）を踏まえて、近年の障害学における新たな諸動向を紹介する。とりわけそれら諸動向を捉えるための一貫した視座として、障害者ごとのアイデンティティの多様性や変化する経験へと応答するために、障害学が依拠する諸前提それ自体もまた変化し続けていくという相互循環的なプロセスに注目することで、既成の「障害」概念の再生産から逸脱していく障害学のあり方を素描する。

- ・辰己一輝（2020）2000年代以降の障害学における理論的展開／転回：「言葉」と「物」、あるいは「理論」と「実践の狭間で」．共生学ジャーナル, 5, 22-48.
- ・辰己一輝（2022）「社会モデル」以後の現代障害学における「新たな関係の理論」の探求. 思想, 1176, 46-54.

話題提供2：楠見友輔（日本学術振興会特別研究員 PD）

自身が執筆した論文の再考を行う。これまで、障害のない子どもと交流をした障害のある子どもへのインタビューを実施し、現象学の立場から協力者の語りを分析する研究を行ってきた。それらの研究では、アイデンティティという概念が筆者の問題関心と分析の中心であった。しかし、人間を存在論的・認識論的に首尾一貫した存在とみるアイデンティティ概念を用いることで、存在の柔軟さや複雑さを捉え損なってきた恐れがある。話題提供では、ドゥルーズとガタリの生成変化という概念に注目し、異なる視点から障害のある子どもの語りを讀んだ時に、どのように障害を新しく考え直すことができるかを検討する。

話題提供3：石渡美穂子（立教大学大学院文学研究科）

批判的障害学は、「誰もが入ることのできる」カテゴリとして障害を捉える。これまである人々が障害者になっていく過程の政治的・社会的分析を通して、障害カテゴリの危うさを露呈してきたが、その危うさこそが実践においては障害者アイデンティティに対する攪乱的な契機になると考えられる。実践から立ち上がる障害者アイデンティティの攪乱のための人々の「戦術」を明らかにすることが、結果として障害概念を固定化し、再生産する思考から逃れるための視座を与えてくれるのではないだろうか。本発表では、実践におけるアイデンティティの攪乱を捉える方法論としてどのようなものが考えられるかについて議論したいと考える。

指定討論：石黒広昭（立教大学文学部）

障がいに対する個体中心主義的な語りが批判されて久しい。その拠り所とされるのが言説、表象の分析に代表される社会構成主義である。障がいを語るこの「個体—社会」の二項図式から逃れることはいかにして可能なのか。この二項図式は障がいの「理解」の枠組ではあるものの、さまざまな「実利」を生み出してきたことも事実である。それ故、その逃避には新たな理解枠組の提示だけでなく、理論の「実用性」も問われることになる。

Moving Away from the Reproduction of the Concept Regarding Disabilities

Yusuke Kusumi (Japan Society for the Promotion of Science Research Fellowships for Young Scientists PD), Moderator

Ikki Tatsumi (Graduate School of Human Sciences, Osaka University), Presenting Author

Yusuke Kusumi (Japan Society for the Promotion of Science Research Fellowships for Young Scientists PD), Presenting Author

Mihoko Ishiwatari (Graduate School of Arts, Rikkyo University), Presenting Author

Hiroaki Ishiguro (College of Arts, Rikkyo University), Discussant

Language: Japanese

言説分析と社会的課題 —三人連句読みつなぎ—

企画・分析者1：川野健治（立命館大学）

企画・分析者2：八ッ塚一郎（熊本大学）

企画・分析者3：岡部大祐（順天堂大学）

企画趣旨

本企画は、2019年度から2021年度まで進めてきた「言説分析と社会的課題—三人三様よみ比べ」を引き継いでの新たな試みである。昨年度までの企画は、「いわば『句会』をお手本に、3人の分析者が共通の材料について言説分析を披露し、その分析をお互いに、また参加者とともに味わうという企画であった。指定討論は置かず、相互の意見交換と参加者の意見を交えて理解を深め、また分析手法の洗練を目指す」（2019年度抄録より）というものである。2019年度は「薬物乱用に対する啓発資材（『ダメ。ゼッタイ。』下敷き）」を、2020年度は文部科学大臣による「新型コロナウイルス感染症に関する差別・偏見の防止に向けて」メッセージを、そして2021年度は「がんサバイバー・クラブの紹介動画『一緒に』」を素材として、3名の分析者がそれぞれの立場から言説分析を通じた読みを披露し、フロアと共に更なる読みの可能性を試みた。分析者それぞれのアプローチからの、素材の読みを提供し、フロアを含めてのインタラクティブな探求の場の創造を目指してきた。

本学会創設以来の研究動向を振り返ってみると、インタビュー法を中心にしたグラウンデッド・セオリー・アプローチや現象学的アプローチ等と比べると、言説分析は相対的に「マイナー」である（あった）と言えるかもしれない。しかし、過去3度のシンポジウムでは、言説分析を主たる方法として用いている研究者の方々のみならず、それ以外の方法で質的研究に従事している方々にもご参加いただくことができ、学会員の関心の高まりも実感された。そして、「言説分析と社会的課題」のトリロジー最終章とするつもりであった2021年度のシンポジウムでは、ありがたくも継続のご提案までいただいた。

そこで、今年度は質的心理学領域での言説分析の新たな可能性を検討したい。アイデアの導き手は、やはり歌詠みのメタファであるが、連句である。連句とは、詠者が読んだ最初の句に対して、その情景から次の句を連ねていく文芸である。最初の句を発句、第二句以下を付句、付句をつけることを付合などと呼ぶ。たとえば、①初しぐれ猿も小蓑をほしげなり（芭蕉）を発句として、②くしゃみひとつを落とす杉谷→③ピクニックおべんとひろげる人もいて、④ファーストキッスキょうはあげよう→④麻の葉の赤い帯しめちとおきやん→（後略）

（https://japanknowledge.com/articles/koten/shoutai_61.html,22.7.15）、というように現代の読み手が付句を連ねていくとき、この付合の手法の多様さと連なる句の響き合いに俳諧を感じる。ここで同時に、言説分析における重要なコンセプトである間テキスト性を重ねてみてはどうだろう。間テキスト性とは「ひとつの、またはそれ以上の記号体系を、もう一つの記号体系に移動させることであり、移動・導入することでその表現の発話および情報の価値が新しく変化すること」（Kristeva,1980）などと説明される。今回試みる言説分析では、連なるテキスト群によって人々の受ける印象に目を向けることに加え、テキストが他のテキストをどのようにして用いたり、組み込んだり、対話しているのかを指摘することで、社会課題の背景にある多声性に迫ろうとする。あるいは、その分析を踏まえて、よりよい付句のアレンジメントを、社会不安解消への処方箋として提示できるかもしれない。実は現時点では、この分析の最適な方法も、可能性と限界も十分に見いだせていない。

ただし現在のSNSの隆盛は、ネット上に入り乱れ、あふれかえる連句とみることもできるだろう。リツイートなどは先人も試さなかった、繰り返すだけ、という最も先鋭化・単純化した連句である。ネットいじめは、その連鎖が脅威を増幅させる側面がある。現代社会における言説の連句＝間テキスト性の分析には、一定の価値がある。

そこで今回は、「自殺」に関わるオンライン上のツイートを発句として、分析者の3名が見出した連句の分析を報告する。これまで同様、分析材料となる具体的なテキストは当日にご披露する予定である。セッションは、3名の登壇者が見出した発句と付句を披露し、これまでの企画と同様に、フロアと共にテキストの読みの可能性を探索する。分析にあたり、分析者の立場性を明らかにしておくことは、質的研究の方法論上も意味があると思われるため、これまでと同様に3人の分析者の基本的なスタンスを簡単に紹介しておく。

分析者1の川野は、近年はメンタルヘルス、特に自殺にかかる研究に従事してきた。必要に応じて、言説分析を選択してきたのであり、特定のスタンスがあるわけではない。例えば2021年度のシンポジウムでは、分析材料としたがんサバイバー・クラブの動画についてマルチモーダルな分析視点を取り、繰り返し提示されるサバイバーの声と顔の集合から提示される一般性の獲得を認めつつ、その「やらされ感」とそこからの排除を指摘した。

分析者2のハッ塚は、集団力学を専攻し、広義の社会構成主義を理論的基盤としている。パーカーの「ラディカル質的心理学」を糸口に、アクションリサーチとしての言説分析を模索、「いじめ」等教育言説の構造解明と代替言説の提案を試みてきた。同じく2021年度は、動画視聴時の居心地悪さを通して「サバイバー」と「クラブ」それぞれに内在する分裂を指摘し、当事者および病イメージの変化と、それに伴う社会との齟齬について考察した。啓発活動にさらなる矛盾と対話性を導入して理解を深化させる代案の可能性も検討している。

分析者3の岡部は、社会言語学や社会心理学のディスコース研究の影響下で、主になんかにまつわるディスコース分析を行なってきた。近年は、場とディスコースの関係に着目し、エスノグラフィとディスコース分析を合わせた研究に取り組んでいる。2021年度は、詩的機能、メタコミュニケーション、レジスターといった分析概念を用いて、サバイバー自身の「声」が引用されながらも、実際にはサバイバーの主体としての固有性は後景化し、がんという「疾患」へと還元され、医学的・科学的コンテクストが前傾化、医学の声（権威）の構成される様子を示した。

Discourse Analysis and Social Problems:

Three Types of Intertextuality Inspired by "Renku" (Japanese poetic dialogue).

Kenji Kawano (Ritsumeikan University), Moderator, Presenting Author

Ichiro Yatsuzuka (Kumamoto University), Presenting Author

Daisuke Okabe (Juntendo University), Presenting Author

Language: Japanese

TEA における個体化の有用性についての検討 —ジルベール・シモンドンの個体化論より—

企画： 福山未智・サトウタツヤ（立命館大学）
話題提供： 福山未智（立命館大学人間科学研究科）
話題提供： 上川多恵子（立命館大学人間科学研究科）
話題提供： 横山直子（立命館大学人間科学研究科）
話題提供： 堀江貴久子（立命館大学人間科学研究科）
指定討論： 宮下太陽（株式会社日本総合研究所未来社会価値研究所）

企画趣旨

フランスの哲学者ジルベール・シモンドン(Gilbert Simondon)の提唱する「個体化(individuation)」について検討を行う。著書である『個体化の哲学』においてシモンドンは、個体の実在から個体化を認識するのではなく個体化の操作を第一義とみなし、その発生の原理を記述した。個体化は物理学的、生物学的、心理学的、情報科学的等の様々な水準で行われるものであるが、本企画では『個体化の哲学』第二章の心理学的水準の個体化について4つの部分にわけて話題提供を行う。議論を通じて、個体化について理解を深め、また、個体化が質的研究、特に複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA) の発展を推進するものとなるのかを考えていく。本企画の参加者は、分からなくて構わないので『個体化の哲学』第二章に目を通してから参加してほしいと思っています。

話題提供1：文化心理学における発達との関わりについて（横山直子）

第1節では、知覚は物理学や心理学において表されるのと同じような個体化の作用 (P383)、とある。シモンドンは、知覚をゲシュタルト心理学により示しているが、「人生径路という次元」はこの中に含まれていない。これらから諸理論をまじえつつ、知覚と文化心理学における発達の観点との関わりについて検討したことを報告する。

話題提供2：TEMで描く意識と個体化の検討（上川多恵子）

本発表者は、これまで特に「意識の変容」に関する研究テーマにおいては、自己のモデルであり第3層で「価値観や信念」を扱う TLMG（発生の三層モデル）を用いて考察してきた。しかし、第2節「個体化と感情的なもの」を読み解く中で、協力者の「意識や感情」を径路の中心にその意識の変容を TEM で分析することは可能かという点に関心を持ち始めている。本発表では、第2節の内容を報告するとともに、TEMで「意識や感情」を中心とした径路をどのように描くことができるかという問題提起から TEA の発展可能性について考えていきたい。

話題提供3：心理的個体化についての検討（堀江貴久子）

本発表では、個体発生の心理的個体化について、人がトランスダクション (transduction;展結) として個体化された存在となるまでのプロセスを第3節から読み解き、報告する。個体は、時間において自らの生成に従って構造化される存在であるというシモンドンの言葉から、生物学的なりアリティ・物理学的なりアリティと相互の交換可能性を持つ心理学的な個体性の概念について、発表者が感情・情動が織りなす相補性を中心に解釈する。

話題提供 4：心理学的個体の反省の問題設定と個体発生の必然性（福山未智）

第3節の5, 6項について扱う。シモンドンによると、心理学的個体は、個体化の過程において発生した問題について反省的意識をもって介入し、同時性と継起性の展結によって解決する(P456)。また、個体は自らの個体化を記憶と想像によって続けるものである(P471)。TEMは径路を示すことが重視されており、自己の発達について描き出すことは困難であった。本発表では、心理学的個体化で重要とされる反省の問題設定と個体発生の必然性について報告し、心理学的個体である人生径路を描く上で、個体化の理論を用いる方法とその意義について検討する。

Inquiring the Individuation Concept in TEA:

From Gilbert Simondon's Theory of Individuation

Misato Fukuyama, Tatsuya Sato (Ritsumeikan University), Planning

Misato Fukuyama (Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University), Presenting Author

Taeko Kamikawa (Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University), Presenting Author

Naoko Yokoyama (Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University), Presenting Author

Kikuko Horie (Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University), Presenting Author

Taiyo Miyashita (The Institute for Societal Values in Future Generations, The Japan Research Institute, Limited), Discussant

Language: Japanese

現象学的人間科学の現段階

企 画： 渡辺恒夫（東邦大学名誉教授）
司 会： 渡辺恒夫（東邦大学名誉教授）
話題提供： 田中彰吾（東海大学文化社会学部）
話題提供： 奥井遼（同志社大学社会学部）
話題提供： 佐々木英和（宇都宮大学地域創生推進機構）
指定討論： 西村ユミ（東京都立大学健康福祉学部）
指定討論： 植田嘉好子（川崎医療福祉大学医療福祉学部）

企画趣旨

現象学はヴントと同時期の19世紀にブレンターノによって心理学として出発したが、その後、フッサールによる超越論的現象学の強調などのため、特に日本では哲学としてのみ認知されてきた時期があった。しかしここ半世紀、A・ジオルジやヴァン・マーネンらの活動によって、質的研究としての現象学的心理学・人間科学の方法論が開拓されてきている。今や現象学的哲学は、虎が死して皮を残すように多くの貴重な方法論的遺産を現象学的心理学・人間科学に残し、静かに主役の座から去りつつあるといっても過言ではない。本企画は、2020年大会シンポジウム「現象学的人間科学への招待」の後を承け、ジオルジらの活動の場である「人間科学研究国際会議（International Human Science Research Conference, IHSRC）」での参加発表経験者・予定者が中心になって、現段階での現象学的人間科学の具体的な研究を紹介する。IHSRCは2023年に東京でも開催の予定であり、その紹介も兼ねる。

話題提供1：IHSRC2023へ向けて（田中彰吾）

企画趣旨にある「人間科学研究国際会議（IHSRC）」が2023年8月に東京で開催される予定であり、心理学だけでなく、教育学、看護学、社会福祉学など、主に対人支援に関係する多様な分野からの参加者が見込まれている。この話題提供では、IHSRCでも近年少しずつ議論が深まってきている、現象学と認知科学の関係について歴史的に俯瞰する。質的研究だけに目を向けると、現象学と人間諸科学のあいだにはその方法論をめぐって溝があるように見える部分もあるが、知覚研究を中心として歴史を振り返ると、ゲシュタルト概念をめぐって両者の間にはもともと密接な関係があったことが理解できる。また、ゲシュタルトの着想をそれぞれ独特のしかたで発展させたM・メルロ＝ポンティやJ・ギブソンの仕事は、現象学と認知科学が協働して「身体性認知科学」を生み出す契機となった。身体性認知研究は今日ではさらに拡大して「4E認知（4E cognition）」研究へと引き継がれている。当日は以上の歴史を振り返るとともに、今後の研究課題についても多少言及したい。

話題提供2：ユトレヒト学派の実践現象学（奥井遼）

ユトレヒト学派とは、現象学の影響を受けて戦後オランダで興隆した人間科学の諸探究に対して、後世の研究者が名づけた学術的立場のことをいう。20世紀中葉、ランゲフェルト、ボイテンディク、ヴァン・デン・ベルクといった研究者たちが、現象学に立脚しながら心理学や教育学などの実践現場の問題に向き合い、ヨーロッパにおいて独特の存在感を示していた。彼らの探究は実験心理学などの台頭によって歴史の舞台からいったん退くものの、その立場は北米やアジアにおいて受け継がれ、IHSRCを含め実践領域に関わる今日の現象学研究につながる水脈を一部形成していた。本発表では、ユトレヒト学派の議論を改めて辿り、とりわけ「身体経験」や「わざ」といったテーマをめぐって今日的な意義を再発見することを目指す。

話題提供 3 : 「他者プレゼンス感覚」のスペクトラム論 (佐々木英和)

I C T (Information and Communication Technology) の高度化と普及は、現代人の普段の生活においてテレコミュニケーションを日常化しているが、この経験の積み重ねにより、私たちの身体感覚や現実感覚が根本的に大きな変質を遂げている可能性が高い。そこで、研究的には、経験帰納的な記述だけでなく、理論演繹的な方向において時間性と空間性に基礎づけられた議論が求められてくる。時間軸としては「いま—どこでも」、空間軸としては「ここで—どこでも」の対比を設定し、見取り図を構築して、諸々の事象を整理してみたい。次に、遠隔的な出会いが当たり前化した社会では「想像力」が大きな要件となるので、遭遇する他者存在に対する「プレゼンス感覚」は、生々しくアクチュアルなものから、「Imaginable (=想像できる)」、さらには「Imaginary (=想像上の)」なものまで階層化しつつ移行するという仮説を提案し、それに伴う実際的问题や実践的課題を明らかにしたい。

Current Stage of Phenomenological Human Science

Watanabe, Tsuneo (Emeritus Professor, Toho University), Moderator

Tanaka, Shogo (School of Cultural and Social Studies, Tokai University), Presenting Author Okui, Haruka (Faculty of Social Studies, Doshisha University), Presenting Author

Sasaki, Hidekazu (Institute for Social Innovation and Cooperation, Utsunomiya University), Presenting Author

Nishimura, Yumi (Faculty of Health Sciences, Tokyo Metropolitan University), Discussant

Ueda, Kayoko (Department of Social Work, Kawasaki University of Medical Welfare), Discussant

Language: Japanese

口頭発表

口頭発表スケジュール （各発表においては第1著者のみ記載）

口頭発表（O1） 10/29 13:30- 15:30 1101 教室 （座長：塚本鋭司 副座長：竹下浩）

No	筆頭者名	発表題目
O-01	大川満里子	がん患者の心理過程II
O-02	李勇昕	アクションリサーチの「後」
O-03	竹下浩	GTA の認識論と GT の実証
O-04	Ye Alina	在日中国人留学生在適応するために必要な心理的支援とは
O-05	塚本鋭司	黎明期の質的研究法
O-06	片岡恋惟	大学英語教員の授業活動に関するストレス過程の変容

口頭発表（O2） 10/29 13:30- 15:30 1102 教室 （座長：能智正博 副座長：川島大輔）
（大会賞選考セッション）

No	筆頭者名	発表題目
O-07	中田千恵子	看護系大学教員が老年看護学の講義で視覚教材を活用する意味
O-08	奥村哲朗	がん経験者の休職期間前後の人生観・仕事観の変化
O-09	鷹屋節子	高次脳機能障害者への就労支援における心理的支援の在り方の研究
O-10	太齋慧	異性愛者である心理支援者は同性愛者をどのように位置づけて語るか
O-11	芝崎文子	外的リソースの獲得・活用に着目した成人 ADHD 者のレジリエンスプロセス
O-12	小林藍	高齢出産・育児の経験をした女性たちの語り

口頭発表（O3） 10/29 16:00- 18:00 1101 教室 （座長：青山征彦 副座長：寺口大）

No	筆頭者名	発表題目
O-13	園部友里恵	模擬授業実践は「真正の学び」になり得るか
O-14	澤田明子	スティグマと自己をめぐる新型コロナウイルス感染症の語り
O-15	青山征彦	異文化間で協働する場を作る
O-16	寺口大	「青年期における重要な他者との関わりの体験」の語りについて
O-17	宮前良平	災害後の故郷の発見の語りについての一考察
O-18	福山未智	コスプレイヤーの個体化(individuation)のプロセスとは

口頭発表（O4） 10/29 16:00- 18:00 1102 教室 （座長：安田裕子 副座長：呉宣児）
（大会賞選考セッション）

No	筆頭者名	発表題目
O-19	加藤望	米国の保育者は日本の幼稚園における当番活動をどのように捉えるのか？
O-20	李睿苗	堀合文子はどのように「何でもやってあげる保育」に辿り着いたのか
O-21	久原向日葵	親からの期待が大学生の生活観・人生観に与える影響
O-22	五十嵐篤	グローバル人材へのキャリア発達プロセス
O-23	加藤誠也	変容的学習過程におけるズレの知覚と想定 of 批判的省察
O-24	福本佳将	学校教育における関係論的パラダイムの展開可能性

口頭発表（O5） 10/30 10:00- 12:00 1101 教室 （座長：矢守克也 副座長：鴨澤小織）

No	筆頭者名	発表題目
O-25	矢守克也	「羅生門問題」の先へ
O-26	加藤雄士	T E A を活用した教育実践
O-27	Pawle Reggie	日本で暮らす西洋人と日本人の異文化結婚を支えるもの
O-28	小松智子	認知機能に障害のある社員へのソーシャルサポート
O-29	鴨澤小織	海外で人格形成期を過ごした女性の心理的再編成の過程に関する研究
O-30	杉山高志	「語りえぬことを語る」防災ツーリズムの語り部に対するナラティブ分析

口頭発表（O6） 10/30 10:00- 12:00 1102 教室 （座長：伊藤哲司 副座長：能智正博）
（大会賞選考セッション）

No	筆頭者名	発表題目
O-31	瀬平劉キャサリン	個人（間）変容における言説分析
O-32	本田陽彦	ACT の心理的柔軟性に基づく新しい現象学的質的研究法
O-33	倉田和佳	復興過程に移住者が与える影響に関する研究
O-34	薛海升	中国農村部における心理療法の「本土化」
O-35	曾谷美華	見落とされやすい日中国際児のアイデンティティ

口頭発表（O7） 10/30 13:30- 15:30 1101 教室 （座長：直井玲子 副座長：町田奈緒士）

No	筆頭者名	発表題目
O-36	直井玲子	インプロ（即興演劇）とジェンダーの実践研究における自己変容
O-37	勝谷紀子	「聞こえにくさをかかえて生きる」の変容過程（3）
O-38	中野元太	行政と市民の重層的な過保護／過依存関係の解消に向けて
O-39	花嶋裕久	ひきこもり 8050 問題に本当に必要な支援とは何か？
O-40	武内陽子	ある精神障害者の「声の主」に関する認識の変容

口頭発表（O8） 10/30 13:30- 15:30 1102 教室 （座長：山田哲子 副座長：石井宏祐）

No	筆頭者名	発表題目
O-41	伴野崇生	難民を対象とした学習支援の実践知の体系化
O-42	小沢一仁	居場所 ID グラムによる大学生のアイデンティティの様相
O-43	今井桂子	就労移行支援所における就労支援員としてのあり方の模索
O-44	石井宏祐	当事者によるアルコール依存症からの回復の物語を配偶者はいかに経験するのか
O-45	山田哲子	知的障がいのある子どもの親が抱く親亡き後の不安と将来のプランニングに関するインタビュー調査

口頭発表 1 (01)

O-01 がん患者の心理過程II

大川満里子(武蔵野心のケア・心理研究所)

2000 年以降、医療現場では、がんを患者に告知し、治療方針を決定する方向性が一般的となった。告知されたがんの内容により、患者の心理過程は異なってくるも、病気の特性から患者の生死の価値観を揺さぶることは否めない。私は、2017 年、あるがん患者の告知以降・再発までの心理過程を当事者へのインタビューから、複線径路・等至性アプローチと脚本分析をつかって分析し、その結果をポスター発表させていただいた。今回は、その方の再発から逝去されるまでの心理過程に焦点を当てた。病気の進行により、何をどのように感じ考え、行動選択をしたか、また、なぜそのように考えたかを、前回と同じ複線径路・等至性アプローチと脚本分析をつかい、分析する。2つの方法を重ねて検討したことで、特に、今回は、死をめぐる感情と思考が明らかになった。

O-02 アクションリサーチの「後」

李勇昕(日本学術振興会・茨城大学地球・地域環境共創機構)

東日本大震災の復興事業がひと段落した地域では、新しい地域復興策を考え始めるステージに差し掛かる。このステージでは、地域が主体となり、復興過程で生じた地域課題を解決することが求められる。しかし、産業の衰退や少子高齢化、そしてコロナ禍などの問題を抱える地域社会にとって、複雑な課題を乗り越え、行動に移すことは困難である。発表者は 2018 年に被災地茨城県大洗町と未災地高知県黒潮町という地域間の交流会を開催したアクションリサーチを行った。その後、大洗町では、コロナ禍の中で、黒潮町の「T シャツアート展」と連携したイベント「風にひろがる T シャツアート展」の開催、そして黒潮町の建物がない、砂浜自体が美術館という「砂浜美術館」からヒントを得て、砂浜で本を読む「砂浜図書館」のイベントを実施した。本発表では、アクションリサーチの「後」に、現場の住民が自ら課題の解決を見出す取り組みおよびそのプロセスを紹介する。

O-03 GTA の認識論と GT の実証

竹下浩(筑波技術大学保健科学部)

GTA は、3 点（帰納の役割・発見対構築・社会的過程対個人的経験）に対する立場の違いにより分派した（Willig, 2021）。本稿は、オリジナル版の認識論（プラグマティズム）を確認することで、対立を解消する。コーディング・パラダイムは押し付けではなく、理論を第三者が観察・テストするための、二者関係の先験的なカテゴリーなのだ。グレーザーはカテゴリー間関係着想のアブダクションを強調しただけで、意見の背反ではない。分析者と協力者が共同で創出した認知的要素の説明図（社会構成主義）は、第三者の観察によるテストが出来ない。次に、認識論の要請（GT の現場でのテスト）が未着手である（木下、2014；竹下、2019）ことを指摘、同じ研究対象（個人間の社会心理学的な相互作用プロセス）と研究哲学（プラグマティズム）であるアクションリサーチ（Lewin, 1946）をパースの格率に統合する実証方法を示す。具体的検証方法と結果、留意点について述べる。

O-04 在日中国人留学生が適応するために必要な心理的支援とは—日本におけるマイクロアグレッションに焦点を当てて—

Ye Alina(立教大学大学院現代心理学研究科)

近年、日本では外国人留学生の受け入れが拡大している。留学生を支援するための支援や制度は見直されているが、心理的支援のあり方は依然として問われている。不慣れな文化や環境に慣れようとする努力が緊張を招き、喪失感、被剥奪感、劣等感などを引き起こすとも述べられている。そこで、本研究は、日本で最も留学生数の多い中国人留学生を対象とし、日本の生活によりスムーズに適応するためにはどのような心理的支援を必要としているのかを明らかにすることを目的として調査を行った。日本人と関わりを持つ中国人留学生が、日本の生活で差別・偏見・マイクロアグレッションをどのように認識し、体験しているのかについて語りを聞き取り、分析し、認識や思考について理解を深めた。

O-05 黎明期の質的研究法

塚本鋭司(愛知大学国際コミュニケーション学部)

本発表では、ポーランド出身でイギリスで教育を受けたブロニスワフ・マリノウスキの質的研究の先駆的な著書である「西太平洋の遠洋航海者—メラネシアのニューギニア諸島における住民たちの事業と冒険の報告」と、アメリカ人女性であるマーガレット・ミードの「サモアでの思春期：西洋文明からみた原始的な若者の心理学的研究」の調査方法を分析して、研究者の母国語でない言語を話す地域において調査を行う場合、どのような点に注意をして、質的調査を行えばよいのかを明らかにする。

例えば、マリノウスキは、調査をするにあたり、immersion（調査対象である社会にとけこむ）ことが大切だと説く。しかしながら、英語を話す白人の研究者が、現地語しか理解できない人々が暮らす非英語圏の社会にとけこむとは、どのようなことなのか。人種や性別、言語といった視点から分析する。またミードの研究は特に女性という観点から彼女の調査法を検証する。

O-06 大学英語教員の授業活動に関するストレス過程の変容—複線径路・等至性モデルによる分析—

片岡恋惟(北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院)

近年、学生や社会の多様化、COVID-19の影響など、大学や大学教員を取り巻く環境はこれまでにない大きな転換期を迎えており、授業活動に関する不安や悩みを抱える教員は少なくない。しかし、これまで大学教員を対象としたストレス研究は十分に行われておらず、特にストレス過程の変化といったダイナミックな視点からの研究は見当たらない。そこで本発表では、大学において英語授業を担当している教員が授業活動においてどのようなストレスを抱き、どのように対処しているのか、またストレスを増幅させる、あるいは低減させる要因にはどのようなものがあるのかについて、質的研究手法を用いて明らかにすることを目的とする。調査は経験年数の異なる大学英語教員3名に対し半構造化インタビュー形式にて行い、分析には複線径路・等至性モデル（TEM）を用いた。なお、本調査は所属機関の倫理審査委員会からの承認後に行い、また調査協力者からの承諾を得ている。

口頭発表 2 (02, 優秀賞セッション)

O-07 看護系大学教員が老年看護学の講義で視覚教材を活用する意味—過去・現在・未来を含み込んだ教育実践—

中田千恵子(横浜創英大学看護学部)

【目的】本研究は、看護系大学教員が老年看護学の講義で視覚教材を活用することの意味を明らかにする。【方法】研究参加者は、看護系大学教員で老年看護学を担当している教員1名であった。データ収集は、講義とインタビューを実施し、それぞれフィールドノートおよびトランスクリプトを作成した。データ分析は現象学的アプローチとした。なお、本研究は研究者の所属していた研究倫理委員会の承認(承認番号:18111)を得て実施した。【結果】講義では「視覚教材」を活用し、高齢者が生きてきた過去・現在・未来へと「学生の視点」が移るよう促していた。それは研究参加者が日々の教育実践において、学生が難しいと捉えた過去の「学生の視点」から教育実践が捉え直され臨地実習を見据えた教育実践となっていた。【考察・結論】「視覚教材」を用いることで教材の現象の中に「学生の視点」が挟み込まれ、看護の本質を見極める一助となる教育実践となっていた。

O-08 がん経験者の休職期間前後の人生観・仕事観の変化

奥村哲朗(名古屋大学大学院発達教育科学研究科)・金井篤子(名古屋大学大学院発達教育科学研究科)

がん治療と仕事を両立する労働者が増加する中、就労環境の整備や経済的な支援だけでなく、両立している労働者の心の理解や支援も重要である。本研究は、がん罹患による休職期間の前後で、人生観・仕事観がどのように変化するのかを明らかにすることを目的とした。がん罹患による休職、または退職から職場復帰を果たした、20代～60代の9名の調査協力者に対して、3回にわたる半構造化面接を行った。その結果、9名すべての協力者が、がんの罹患時、または再発時において、人生観の変化を体験していた。また、仕事観においては、50代～60代では、がん罹患を機に仕事との適切な距離や、仕事以外の活動に関心を向ける協力者が多かった一方、20代～40代では、がん罹患の経験や現在の状況を踏まえた新たなキャリアの模索や展望を考えている協力者が多かった。なお、本研究の実施にあたり、名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究倫理委員会の承認を得ている。

O-09 高次脳機能障害者への就労支援における心理的支援の在り方の研究—複線径路等至性アプローチ (TEA)を用いた一事例研究—

鷹屋節子(川村学園女子大学大学院人文科学研究科心理学専攻)・松岡靖子(川村学園女子大学)

本研究は、脳出血により高次脳機能障害を負った対象者が受傷してから就労移行支援事業所に結びついて就労し、就労後現在に至るまでのプロセスを分析し、その心理的葛藤について検討した。症例は49歳女性で、面接の分析には複線径路等至性モデリング (TEM)を用いた。その結果対象のプロセスは4つの時期に分けられた。第1期：脳出血後忘れっぽさが目立ち感情的にも不安定になるが、その原因が高次脳機能障害であると分かるまで。第2期：自分に合った就労移行支援事業所に繋がるまで。第3期：一般就労(障害者枠)するまで。第4期：就労継続のため新たな課題出現。夫々の時期でどんな要因が促進因子・抑制因子として働いたかを分析した。この分析から高次脳機能障害者の就労支援には、医学的診断だけでなく、個々の状態に寄り添った継続的な心理的支援が重要であると考えられた。なお本研究は、川村学園女子大学倫理委員会の承諾を得て実施したものである。

O-10 異性愛者である心理支援者は同性愛者をどのように位置づけて語るか

太齋慧(東京大学教育学研究科)

同性愛者の肯定的な自己概念を阻害するスティグマ的ディスコースが社会に流通する一方、個人のセクシュアリティを尊重するディスコースも一定の力をもつ。こうした中で同性愛者が安心して自己を語れる対話の条件を検討することは心理的支援に資する。本発表では、同性愛者と異なるディスコース上の位置づけをもつ異性愛者の心理支援者が、どのように同性愛者を位置づけて語るか検討する。同性愛者への意識に関し心理支援者にインタビューを行い、ポジショニング理論を参照して分析した。その結果、意図せずスティグマを再生産し得る表現もみられる一方、「差別し得る自己」「差別してしまうことを恐れる自己」「ポジティブに捉える自己」「ネガティブな経験を理解する自己」といった個人のセクシュアリティを尊重する支援者ポジションのバリエーションが見出された。同性愛者を固定的に位置づける可能性等、これらのポジションの機能について考察した。

O-11 外的リソースの獲得・活用に着目した成人 ADHD 者のレジリエンスプロセス

芝崎文子(東京大学大学院教育学研究科)・今福理博(武蔵野大学教育学部)

ADHD の診断がある成人期の者 10 名を対象に、個人の特性や能力以外で ADHD 者のレジリエンスを促進する何らかの資源(=外的リソース)の獲得・活用プロセスを明らかにした。対象者は、社会生活を営んでいることや、他の重篤な精神障害がないことを条件として、SNS 上で募集した。ADHD 者は、特性に起因すると考えられる失敗経験を重ねつつ、重要な他者からのサポートや、障害に関する情報や薬を活用しながら、ADHD の特性と照らし合わせ、とくに苦手なことを考慮した環境選びを行っていた。成人期に不適応感を抱いている ADHD 者は、他者から求められていると知覚した理想像と自分とのギャップや、ADHD 特性に対する理解の姿勢が見られない、重要な他者との関係に葛藤していることが示された。今後、社会における障害理解の促進をする介入や、ADHD 者を利用可能な支援に繋げていく介入の必要性が示唆された。

O-12 高齢出産・育児の経験をした女性たちの語り—育児環境と経験の意味づけに着目して—

小林藍(立命館大学大学院人間科学研究科)・三品拓人(関西大学, 日本学術振興会)・鶴原美佑(立命館大学総合心理学部)・安田裕子(立命館大学総合心理学部)・矢藤優子(立命館大学総合心理学部)

本研究では高齢での出産の意味づけおよびその後の育児の実態を明らかにすることを目的とする。調査では 0 歳~3 歳の子どもをもつ女性 18 人に対して育児支援、仕事、家族関係、人生の満足などについて幅広く尋ねた。その中から高齢出産を経験し、現在育児を行っている女性 6 人の語りを用いる。分析では語りの内容を高齢で出産・育児を経験したことに伴い、①ネガティブに感じること②ポジティブと感じることに焦点を当てて分類した。その結果、ネガティブに感じられることとして妊娠期・産後早期は特に不安を抱えたり、身体の不調を感じたこと等があげられる。他方で、仕事上でキャリアを築けたことや年齢を重ねたからこそ精神的にゆとりを持って現在の育児が出来るといったポジティブな側面も語られた。以上から、高齢出産を経験した女性への具体的な支援を考察する必要性および高齢出産に対するリスク以外の観点からそのリアリティをとらえる必要性が提起される。

口頭発表 3 (03)

0-13 模擬授業実践は「真正の学び」になり得るか—ブレヒトの演劇理論を補助線に—

園部友里恵(三重大学大学院教育学研究科)

本発表は、教職大学院の院生たちが模擬授業実践を行うことの意味を問うものである。「模擬」、すなわちホンモノを模したものである「模擬授業」が、「真正の学び」（ホンモノの学び）となり得るのかを検討する。分析対象とするのは、三重大学教職大学院の院生たちとの「対話型模擬授業検討会」実践、およびインタビュー調査における彼らの語り（調査概要を説明し同意を得た上で実施）である。

本発表の問題意識としてあるのは、「学習者役」としての模擬授業参加を院生たちにいかに説明し得るかという筆者の苦闘である。「学習者役」を担うことは、子どもを「演じる」ことなのか。「演じる」という意識がステレオタイプの「演技」を引き起こし、その結果「ホンモノではない」状態になってしまうのではないか。模擬授業実践において「ホンモノ」とはどういうことなのか。こうしたことを、ベルトルト・ブレヒトの演劇理論を補助線に検討していく。

0-14 スティグマと自己をめぐる新型コロナウイルス感染症の語り

澤田明子(認定 NPO 法人健康と病いの語りディベックス・ジャパン)

新型コロナウイルス感染症によって引き起こされた社会問題の一つに、感染者やその周辺の人々への差別偏見、スティグマがある。本研究では、感染による差別偏見に関する報道や、差別偏見への警鐘を鳴らす啓発活動がとりわけ盛んだった 2020 年 3 月～2021 年 1 月（第 1～3 波）に感染した人、およびその家族 14 名のナラティブを分析し、自身や家族の感染をめぐる語られたエピソードの中から、スティグマと解釈されうる体験のありようと、そうした体験に語り手がどのように向き合ってきたかを示す。中でも、批判の恐れを感じながらも SNS や各種メディアで不特定多数を対象に姿を明かして感染を公表したケースや、身近ではない第三者に感染を語ったという人々のエピソードを通じ、「感染者」というスティグマを越えて感染を物語る自己がどのように形成されてきたのか、プロセスを検討した。

0-15 異文化間で協働する場を作る—媒介者の役割をめぐる—

青山征彦(成城大学社会イノベーション学部)・岸磨貴子(明治大学国際日本学部)

本発表では、第 2 著者がコーディネーターとして関わっている、東京にあるネパール人学校と、大阪にある私立の小学校とのあいだで行われている交流について採りあげる。両校のあいだには、背景にある文化や、カリキュラムに対する考えかた、学校の規模などさまざまな違いがあり、交流は容易ではない。そうした状況で交流を実現していくために、コーディネーターがどのような関わりをしているかを、インタビュー調査によって分析する。このような交流は、越境（エンゲストロム）と考えられるが、ここでのコーディネーターの役割は、両校のどちらの立場でもない媒介者という立場として、越境で生じるコンフリクトをできるだけ避けつつ、実りある交流となるような協働の場を作ることであると考えられる。本発表では、アクターネットワーク理論をベースに、協働の場を作る媒介者としてのコーディネーターの役割について検討したい。

0-16 「青年期における重要な他者との関わりの体験」の語りについて

寺口大(佛教大学教育学部臨床心理学科)

本研究では、不登校やひきこもりといった状態や強く落ち込む経験をした人が、「青年期における重要な他者との関わりの体験」を語ることを通して、自身のアイデンティティについて整理していく過程を検討した。協力者の語りのデータについて、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。その結果、「重要な他者との関わり」をポジティブな体験として想起する場合、相手が自分に真剣に向き合ってくれたことや、その関わりによって自分が得られたものが、自身の問題に直面化する際にプラスに影響すると感じられることが示された。一方で、ネガティブな体験として想起する場合、今も整理がつかず「どこかで向き合っていないといけない」と自分のテーマとして感じていること、またその語りを通して体験の意味付けをし直すプロセスが生じることが示唆された。なお本調査にあたっては倫理的配慮に充分留意し、書面による同意を得て行った。

0-17 災害後の故郷の発見の語りについての一考察

宮前良平(福山市立大学都市経営学部)・高原耕平(人と防災未来センター)

災害は生まれ育ったコミュニティを破壊する。それは被災地からの人口流出という形で現れることもあるが、被災地内でのコミュニティ構造の変化(吉原, 2021)という形で生じることもある。災害によるコミュニティの崩壊は、復興過程によって決定的となり、自分にはもはや戻るべき場所がないという故郷の喪失の感覚は、カイ・T・エリクソンの「集合的トラウマ」(1976=2021)との関連が論じられている(大門・高原・宮前, 2020)。一方、東日本大震災から10年が経過し、被災地である地元に残りたいと答える人の割合も増えつつある。また、昨今の移住ブーム、関係人口への着目(田中, 2021)の中で、被災地外から被災地へ移り住む人もいる。本研究では、宮城県本吉郡南三陸町で行ったインタビュー調査の結果をもとに、地元である南三陸に住み続ける、震災後南三陸に戻ってくる、南三陸に移住するという語りを分析し、災害後の「故郷」観の変化について考察する。

0-18 コスプレイヤーの個体化(individuation)のプロセスとは—13年のコスプレ経験と写真からの検討—

福山未智(立命館大学人間科学研究科)・隅本雅友(立命館大学 OIC 総合研究機構)・サトウタツヤ(立命館大学総合心理学部)

マンガ等に登場するキャラクター達に扮して遊ぶ「コスプレ」という行為がある。コスプレは21世紀から一般に発展し、現代では多くの若者が楽しむ遊戯である。本研究は、多くの人を引き付けるコスプレの魅力とは何か?という点について明らかにし、コスプレやそれを楽しむコスプレイヤーの文化を総合的に描き出すことを目指す。研究方法は、自身の13年間で201回に及ぶコスプレ経験によって撮影された約5万枚の写真からライフヒストリーの表を作成し、これを元にAuto-TEMを作成した。分析に際してはシモンドンの個体化論を援用し、コスプレに対する目的・目標が変化した時点に注目して行った。その結果、7つの時期区分のうち6つで個体化が行われたことが明らかとなった。これにより、コスプレ活動の魅力とは、個体化のプロセスを繰り返して遊びを発達させ、これはコスプレ活動を終わるときまで続くものであり、この個体化のプロセス自体であることがわかった。

口頭発表 4(04, 優秀賞セッション)

0-19 米国の保育者は日本の幼稚園における当番活動をどのように捉えるのか？

加藤望(名古屋学芸大学ヒューマンケア学部)・肥田武(一宮研伸大学看護学部)・内田千春(東洋大学ライフデザイン学部)・何京玉(青島大学師範学院)・権赫虹(広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期)・中坪史典(広島大学大学院人間社会科学研究科)

日本の多くの幼稚園で行われている保育活動の一つに、当番活動がある。活動内容は園やクラスにより様々だが、一般的には飼育動物や植物の世話、給食時の配膳等の仕事の一部を、子どもたちが順番に引き受けるものである。本研究の目的は、日本の幼稚園では自明のこととして行われている当番活動について、米国の保育者が抱く違和感から文化的差異を明らかにし、その背景にある日本の幼児教育に特有な教育的意図を検討する。研究方法として、Tobin (1989) の映像を用いた多声的エスノグラフィーに倣い、日本の幼稚園の日常を撮影した映像を米国の保育者に視聴してもらい、オンラインによるフォーカス・グループ・インタビューを実施した。得られたデータは質的分析の手法である SCAT (大谷, 2019) を用いて分析した。なお、本研究の実施にあたっては、所属研究機関の倫理審査を受け承諾を得た。

0-20 堀合文子はどのように「何でもやってあげる保育」に辿り着いたのか—TEMによる分析—

李睿苗(広島大学大学院人間社会科学研究科)

堀合文子は 60 年以上の現場経験を持っており、「保育の神様」と呼ばれている実践者である。彼女の保育の特徴として、「何でもやってあげる」(内田 1998) ことだと言われている。堀合の保育が注目され、彼女へのインタビュー記録・保育の観察記録などの文献資料や著書 16 本と映像資料は保存されてきた。加えて、彼女自身による保育記録や研究発表などの文献資料も今 101 本が筆者は収集できた。また、時代の変遷とともに堀合の専門性発展の軌跡を描き出した研究も見られた(浜口 2016)。しかし、堀合はどのように「何でもやってあげる保育」という特徴的な保育に辿り着いたのかがまだ解明されていない。したがって本研究では時間的変化にそった人間の変容と、変容を規定する外的要因とともに記述する TEM (サトウ 2007) を用い、主に前述した堀合自身が書いた文章 101 本を対象にし、彼女が「何でもやってあげる保育」に辿り着いたプロセスを明らかにしていきたい。

0-21 親からの期待が大学生の生活観・人生観に与える影響

久原向日葵(東京大学大学院教育学研究科)・野坂祐子(大阪大学大学院人間科学研究科)・渡邊芳之(帯広畜産大学人間科学研究部門)

本研究では、親からの期待が大学生の生活観・人生観に与える影響を明らかにするためにインタビュー調査を行った。関西地方の国立総合大学に通う大学生 6 名(女性 4 名, 男性 2 名)にこれまでに親から受けてきた期待はどのようなものであったのか、またその期待が自分の生活観・人生観に与えた影響はどのようなものであったかについての半構造化面接を行い、結果を M-GTA を用いて分析した。その結果、特に女性において母親からの「女性らしさ」や「人間性」の期待は現在も生活観や人生観に影響を及ぼしていることが明らかになった。具体的には、それらの期待を受けることで、現在も女性らしくあらねばならないというような強い義務感を感じていることや、人への頼り方がわからないというような人間関係への負の影響を及ぼしているということが挙げられた。

0-22 グローバル人材へのキャリア発達プロセス—日本人複数名の統合TEM（複線径路等至性モデリング）による検討—

五十嵐篤(社会構想大学院大学実務教育研究科)

「グローバル人材の確保が依然として大きな経営課題」（総務省 2017）とされ、「近年、日本の人材の競争力は下がっている」（経済産業省 2022）とも言われている。グローバル化が進む日本の社会経済において、言語・文化的背景の異なる他者と働くことができる人材を増やすことは重要である。本発表では、TEM（複線径路等至性モデリング）を用い、研究対象者が、異環境で外国人と働く過程で、なにを経験し、葛藤し、行動したか、意思決定や行動に影響を与えた要因には何があったかというライフストーリーを言語化・図式化する。複数名のTEM図を統合し、挫折や葛藤を経験しながらも、必要な能力を獲得し、自らのキャリアを形成し続けていく過程を描き、共通する内面の発達や影響を与えた要因をみつけ、経験の類型化を可視化する。この可視化・言語化したグローバル人材につながるキャリア発達プロセスをキャリア支援やキャリア教育への活用につなげていく。

0-23 変容的学習過程におけるズレの知覚と想定 of 批判的省察—変容のための「再考」の考察—

加藤誠也(東京工業大学環境・社会理工学院社会・人間科学系)

変革・創新が主題となって久しい企業経営では、新たなパフォーマンス創出を担う経営層および組織成員の正統的周辺参加（Lave & Wenger, 1991）の取り組みにおける変容的学習（Mezirow, 2009 等）のあり方が問われている。特に混乱やジレンマを伴う自己の批判的省察の過程は、個人が孤立した状態で進捗することは難しく、異なる見方をもった他者との協力的な対話や助成が必要とされるが、これはどのように促進され、あるいはなぜ停滞してしまうのだろうか。そしてその成否の違いは何によるものなのか。本研究は、人がそれまでの経験知やスキルが通用しない困難に直面した際、違和感やズレをどのように知覚・認知し、どのようにマインドワンダリングをポジティブモードに変換し、どのように批判的省察を進捗するかを、企業等に従業する実務者を対象としたインタビュー調査の結果に対する混合研究のためのプログラム MAXQDA を用いた分析と考察により明らかにした。

0-24 学校教育における関係論的パラダイムの展開可能性—中学校のバスケットボール部をフィールドにした実践の試み—

福本佳将(加西市立善防中学校)・山中一英(兵庫教育大学大学院学校教育研究科)

本研究は、中学校のバスケットボール部をフィールドに生徒が関係論的パラダイムを学ぶ場をデザインすることで、生徒に事象理解にかかる新たな視座をもたらすとともに、学校教育における関係論的パラダイムの展開可能性について検討することを目的とした。まず、バスケットボールという競技にみられる一連の選手の動き（戦術）を関係の網目（ネットワーク）の視点で捉えるための取り組みを行った。つぎに、そうした取り組みが関係論的パラダイム等の概念のもとに学術的に整理されることを学び、それが日常の様々な行為にも接続可能であることを理解する実践が試みられた。この一連の学びの過程で生徒は、顕在する行為者からその周辺の者へと視線の移動を行うようになり、それに伴って、新たな「関係」「共同」といった視点を弁証法的に創出していく可能性が示唆された。

口頭発表 5 (05)

0-25 「羅生門問題」の先へー連城三紀彦『戻り川心中』を読むー

矢守克也(京都大学防災研究所)

連城三紀彦著『戻り川心中』は、同氏の名声を高らしめた連作ミステリー「花葬」シリーズの作品群を収録した書物である。連城ミステリーの衝撃は、世界の「内部」に対する「外部」が開示されたときの驚愕に喩えることができる。この意味での外部は、エスノグラフィー（小説）における「了解不能点」に通じる。曇りなく透明なはずの現実に重大な了解不能点が存在し、その背後に外部が広がっている。パーカーは、こうした了解不能点を開示するエスノグラフィーこそ一整然としたそれより一優れていると論じており、あの「羅生門問題」の中核にも了解不能点が存在する。ただし、連城ミステリーにおいて、時間、自己、言葉といった認識の基盤をトリックとして用いて緻密に練りあげられた了解不能点は、「羅生門問題」におけるそれよりもはるかにラディカルなもので、その意味で、エスノグラフィーを中心とした質的研究のあり方にも大きな示唆を与えるものである。

0-26 T E Aを活用した教育実践—人材開発論の講義における取組み—

加藤雄士(関西学院大学経営戦略研究科)

大学院生を対象とした人材開発論の講義におけるT E A（複線径路等至性アプローチ）を活用した教育実践について報告する。演者は本授業において学生同士で人材開発過程を相互にインタビューさせ、その成果物として自分と他の学生のT E Aを作成するように指導している。これらの実践により、学生は自身と他者の人材開発過程を俯瞰して分析することができる。具体的には、E F PとP—E F Pの分析により授業の成果が確認でき、B F P分析ではどのような分岐点でどのような緊張状態にあったのか分析できる。また、T L M Gによる分析では、どのような信念・価値観の変化があったのかを抽象化して可視化できる。こうした学習効果について検討する。

0-27 日本で暮らす西洋人と日本人の異文化結婚を支えるもの—生活の多様性の解釈的現象学的分析—

PAWLE Reggie(Kansai Gaidai University-Asian Studies Program)

この研究は、日本で共に暮らす西洋と日本の文化的背景を持つ夫婦がどのように結婚を維持しているかを理解することを目的としました。日本国内で、日本に暮らす異文化の背景を持つ夫婦に関する研究はほとんどありません。異なる文化の人間がどのようにお互いを調和して、繁栄することができるかを理解する必要性は、現代の世界でますます重要になっています。私は、13人の参加者（日本人5人、西洋人8人）に半構造化された面接を実施しました。この面接のデータから、夫婦の多様な経験とその意味に対処するのに役立ったものと役立たなかったものに関するテーマが発見されました。それを、解釈的現象論的方法を使用して分析しました。調査結果が認知の柔軟性、同化、関係の絆、および親密さが、日本で異文化間の結婚を維持するための基本であることを示しました。それらが生活の多様性にどのように貢献するかについて議論します。

0-28 認知機能に障害のある社員へのソーシャルサポート

小松智子(九州大学人間環境学研究院)

現在、脳画像診断の発展等により、高次脳機能障害に限らず、精神障害や発達障害においても、脳機能の障害に伴う認知機能の障害が広く認識されている（内田，2011）。この認知機能に障害のある者にとって、職場や職場外における重要な他者（同僚、専門家、家族など）からのソーシャルサポート（久田，1987）は、早期離職の防止要因として機能する可能性（福岡，2019）が指摘されている。従来の研究では、精神障害や発達障害、高次脳機能障害などの障害種別に支援を変える方法が検討されてきた。本研究では、障害種別を超えて、「認知機能に障害のある社員」という新たな枠組みで捉えなおし、質的研究を用いて、認知機能に障害のある社員の職場適応支援に有用なソーシャルサポートの効果と課題を検討する。なお、本研究は倫理審査承認後に実施され、対象者には研究趣旨およびデータの扱いについて説明を行い、同意を得ている。

0-29 海外で人格形成期を過ごした女性の心理的再編成の過程に関する研究

鴨澤小織(日本大学文理学部)

海外で人格形成期を送った人たちは、その地でつくりあげた価値観や意味づけの枠組をもって、日本へ帰国する。帰国とともに自分の内側にある価値観や意味づけの枠組は実際の日本社会と噛み合わないことからくる様々な問題に直面する事がわかっている。特に、人格形成期に海外で教育を受けた女兒は、帰国後ジェンダー平等に関する意識がまだ低いといわれている日本において、女性として就職・結婚などに直面し多くの生きづらさを抱えている。しかしそこからくるメンタルヘルスの問題には心理的・社会的支援の視点が少ないのが現状である。本研究では、ソーシャルワークの視点から、特に自分の意志とは別に子どもの時期に海外生活の経験をする事からくる困難を、個人の女性のメンタルヘルスに注目して、複線経路・等至性アプローチ（TEA）を用いて質的分析をし、彼女たちを取り巻く日本社会の課題を考察したい。

0-30 「語りえぬことを語る」防災ツーリズムの語り部に対するナラティブ分析

杉山高志(東京大学生産技術研究所)・矢守克也(京都大学防災研究所)

本研究では、防災を主題にした観光プログラム、いわゆる防災ツーリズムで活動する語り部のナラティブ分析を行った。具体的には、高知県黒潮町や室戸市で行われている防災ツーリズムで活動する語り部のナラティブを、倫理的な配慮を施した上で収集し分析した。高知県沿岸部では南海トラフ地震によって甚大な津波被害が想定されており、津波避難タワーや津波避難シェルターが建設された。それらのハード施設を津波避難の本来的な用途だけではなく、防災学習のための資源として活用しようと防災ツーリズムの活動が始まった。防災ツーリズムの中では、地域防災を行う住民が中心になってガイド活動（語り部活動）を行っており、ハード施設に関する解説や津波防災に対する思いを語っているが、大半の語り部は津波災害を直接的に経験しておらず、未体験の災害について語っている点で、「語りえぬことを語っている」語り部ともいえ、その語りの特徴を分析した。

口頭発表6 (06, 優秀賞セッション)

0-31 個人（間）変容における言説分析

瀬平劉キャサリン(九州大学人間環境学府教育システム専攻)

言説分析は社会的文脈で使用される言葉に着目した研究方法である。言語は人間と社会に依拠して成り立っているが、同時に人間と社会に作用し、作り直すこともできると主張する。ナラティブ・セラピーは、家族療法家でソーシャルワーカーのマイケル・ホワイトが開発したカウンセリングの手法の一つだ。人間は自分の物語の著者でありながらも、他人と一緒に自分の人生に意味を与え、アイデンティティを形成していることはその手法の中心的な考えである。本発表では、ナラティブ・セラピーと言説分析がいかに類似した概念に根ざしているかを示す。次に、ホワイトの『ナラティブ実践地図』から抜粋した対話を言説分析で分析する。本発表は、ホワイトによる言説分析の意識的な使用が、クライアントにいかに関与の再認識を促し、積極的にクライアントを支援するかを迫る。本発表では、質的研究の一形態である言説分析の応用可能性の幅広さを示したい。

0-32 ACTの心理的柔軟性に基づく新しい現象学的質的研究法

本田陽彦(九州大学大学院人間環境学府)

本発表では、新たに設計した現象学的質的研究法の方法論について、分析事例を示しながら紹介する。同方法は、マインドフルネスを中核技法とするACTの心理的柔軟性(PF)を解釈促進のヒューリスティックとして用いることで、人間の経験のあらわれ【行動・価値・思考・感情・気づき・自己概念】などの自身の経験の内容だけでなく、人間がそれらとどのように関わろうとするのかという自己関係の位相も分析可能になる。たとえば、困難な経験をしている人が、ネガティブな思考内容に絡め取られて立ち往生しているのか、あるいはそれを受容しつつ価値に沿った行動へ向かおうとしているのか、というように。PFはACTのプロセスによって構築されるが、人間の基本的プロセスとリンクしており、同方法の適用範囲は病理に制限されない。発表では、PFの基盤の自己理論がスピリチュアルな経験の位相まで分析射程を広げることを含めて同方法による分析の機能的な特徴を紹介する。

0-33 復興過程に移住者が与える影響に関する研究—宮城県気仙沼市唐桑半島での復興曲線インタビューから—

倉田和佳(大阪大学大学院人間科学研究科)・宮本匠(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究は、東日本大震災後に被災地に入った外部支援者が移住者となり、現在に至るまでネットワークを広げ続けている宮城県気仙沼市唐桑半島をフィールドとして、「復興曲線インタビュー」を実施し考察するものである。「復興曲線インタビュー」とは、語り手にx-y座標の描かれたシートを提示し、横軸を災害から今までの時間、縦軸を被災者の気持ちの変化とし、その変化を表す曲線を描いてもらいながら進めるインタビュー手法である。本研究は、唐桑半島の住民と、震災以降に移住した人々に復興曲線インタビューを実施し、唐桑半島の復興を様々な角度から描き出すことを目的とする。住民・移住者双方にとって、復興過程において重要だと思われる出来事や言葉を手がかりとしながら、唐桑半島における震災からの復興過程に、移住者たちはどのような影響を与えていたのかを分析する。

0-34 中国農村部における心理療法の「本土化」―ディスコースとの関わりを通じて―

薛海升(東京大学教育学研究科臨床心理学コース)

改革開放以降の中国における急速な経済発展に伴い、北京など大都市ではメンタルヘルスに関わる多様なサービスが提供され始めている。その一方で、農村部になると、そのような公的なサービス資源がまだ貧弱である。本研究では、中国東北地域の農村部で発展を見せる心理援助機関を対象とし、その発展の背景にいかなる条件があるのかを検討する。具体的には、エスノグラフィーの手法を用いて多方面からデータを収集し、治療者と利用者がどのような言説を用いてこのような心理療法を説明しているかを分析したうえで、その社会的背景を考察する。

0-35 見落とされやすい日中国際児のアイデンティティ―他者との関係性における質感に着目して―

曾谷美華(京都大学人間環境学研究科)

「ハーフ」と呼ばれるような、2つの民族的背景を持つ国際児は人々の社会的関心を集めている。しかし、身体的形質から日本人と見分けがつかない日中国際児は、国際児の表象から不可視化されやすく、見落とされやすい国際児のあり方は十分に検討されていない。本研究では、国際児を生きる実感に着目して、日中国際児のアイデンティティに関する検討を試みた。ある日中国際児の成人期男性を対象に語り合い法を用いたインタビューと分析を行った結果、他者との関係性において民族性にこだわる心的枠組みが見出された。この枠組みをめぐって、「帰属意識を自由に切り替え民族性を見せつけたい自己」と「民族性にとらわれずありのままでいたい自己」との葛藤が質感を伴う語りから見出された。この質感を基に当事者の体験世界に迫りつつ、2つの自己の関係性から日中国際児のアイデンティティについて考察していく。

口頭発表 7(07)

0-36 インプロ（即興演劇）とジェンダーの実践研究における自己変容—乗り越えることから、協働することへ—

直井玲子(東京学芸大学教育学部)

本研究の目的は、インプロ（即興演劇）とジェンダーに関する実践研究プロジェクトにおける演者の変容過程をたどるアクションリサーチにおいて、研究者であり実践者である「私」がどのように変容していったかを、TEM（Trajectory Equifinality Model：複線径路・等至生モデル）によって質的に分析し明らかにすることである。インプロは即興であるがゆえに、社会の中で形成してきたジェンダー・ステレオタイプの影響を受けて物語が構築されることがある。インプロの上演形式「ザ・ベクデルテスト」を学び上演していく中で、はじめ私は男性に勝って乗り越えようとしていた。次第に男女を問わずそこに参加する仲間を信頼して一緒にゆっくりと協働してインプロを創っていくことが面白くなってきた。その変容過程を質的に分析していく。

0-37 「聞こえにくさをかかえて生きる」の変容過程（3）—障害がある研究者としてのインタビューの質的分析—

勝谷紀子(東京大学先端科学技術研究センター・日本福祉大学大学院)

勝谷（2020, 2021）は、Auditory Neuropathy という難聴を起こす希少疾患を持つ発表者自身の体験について、自己エスノグラフィと複線径路等至性アプローチ、計量テキスト分析による検討をしてきた。本研究では、勝谷(2021)で計量テキスト分析で検討した DIPEX-Japan のインタビューデータを SCAT(Steps for Coding and Theorization)（大谷, 2008; 大谷, 2011; 大谷, 2019）で質的データ分析をおこなった。発表者が障害のある研究者として体験を語った内容を分析した結果、ストーリーラインから、軽度難聴で聴取困難の無自覚があると曖昧なままのコミュニケーションを完結させる方略を使用する場合があること、言葉の聞き取り困難を経験しつつも原因不明の状態が長く自身でも説明が困難だと障害を「なかったこと」にすること、希少疾患の診断は自分を説明できる言葉の発見であり、過度な努力帰属や自分を責めるような考え方からの解放であること等が示された。

0-38 行政と市民の重層的な過保護／過依存関係の解消に向けて—メキシコでの津波防災実践—

中野元太(京都大学防災研究所)・矢守克也(京都大学防災研究所)

メキシコ太平洋岸シワタネホ市において継続してきた津波防災アクションリサーチの成果を、ダブル・バインド状態の解消と市民の主体性回復に焦点を当てて論じる。同市では、防災教育の現場で観察される市民防災局（行政）と教員との間のダブル・バインド状態（前者による過保護と後者による過依存の関係性で、スモール・ダブル・バインドと呼ぶ）は、より広い文脈での行政と市民との間のビッグ・ダブル・バインド状態の中であって、重層的な過保護／過依存関係が観察されていた。そこで、重層的ダブル・バインド状態解消を目指す防災実践、いいかえれば、個別の市民防災局と学校との間の過保護／過依存関係の解消を目指すのみならず、より広く市民が参加するスタイルの防災実践を取り入れてビッグ・ダブル・バインド状態の解消を目指した。このことにより、シワタネホにおいて市民が主体的に参加・関与できる様々な防災実践が立ち上がったことを論じる。

0-39 ひきこもり 8050 問題に本当に必要な支援とは何か？

花嶋裕久(帝京大学心理臨床センター)

ひきこもり「8050 問題」は差し迫った日本の社会問題である。中高年の当事者に就労支援重視の施策では立ち行かなくなっている。提供されるひきこもり支援と当事者が求めているものの間にミスマッチが生じており、「若者の就労支援」から「福祉政策」への移行が求められている。本発表では、中高年のひきこもり当事者（本人・家族）及び支援者の語りを基に、8050 問題に本当に必要な支援は何かを検討する。そもそも当事者は「就労」や「社会参加」をどの程度望んでいるのだろうか。経済的懸念や親亡き後の生活についてどう考えているのか。中高年のひきこもり家庭にとって最低限事足りる暮らしとはどういうものか。当事者にとってまずまずの幸福とはどういうことなのか。支援者はこれからのひきこもり支援をどう考えているのだろうか。調査協力者の語りを基に 8050 問題に必要な支援について提言する。なお、調査協力者には事前に調査依頼書を送付し書面にて同意を得た。

0-40 ある精神障害者の「声の主」に関する認識の変容—社会関係の再形成に焦点を当てて—

武内陽子(川崎医療福祉大学大学院医療福祉学専攻博士後期課程)・飯田淳子(川崎医療福祉大学医療福祉学部)・長崎和則(川崎医療福祉大学医療福祉学部)

本研究では、ある精神障害者が「声の主」との関係はどう捉え、それに社会関係の再形成がどう影響しているのかを本人の視点から明らかにすることを目的とする。精神障害者の社会関係に関する先行研究では、精神障害者本人が重要とする「声の主」との関係を支援者の視点から理解する研究は見られるが、本人がそれをどう捉えているのかについては十分に明らかとなっていない。研究方法は、その人の世界観や社会関係に着目するため、エスノグラフィーを用いた。なお、本研究は川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施している。ある精神障害者の「声の主」は、発病後、限られた関係の中で周囲の人から否定的に捉えられていたため、症状の一つとしか認識されてこなかった。しかし、現在は「声の主」との関係がそれ以外の多様な関係の中で認められたことにより、「憑依妄想」から「他者」の一人へと本人の認識が変容したことが明らかとなった。

口頭発表 8 (08)

0-41 難民を対象とした学習支援の実践知の体系化—質的心理学の手法としてのパターン・ランゲージによる〈わざ〉の記述—

伴野崇生(社会構想大学院大学実務教育研究科)

本研究の目的は、パターン・ランゲージという手法を用いて難民を対象とした学習支援の実践知の体系化を行うことである。パターン・ランゲージとは、優れた実践をしている人たちの実践知の本質（例えば、行動や認識・判断やそれを支える価値などを）抽出していき、それを状況（Context）で生じ得る問題（Problem）とその解決（Solution）の形で記述したものである。本研究では、難民を対象とした学習支援の熟達者に対するインタビューを実施し、その成果を KJ 法の手続きを援用してまとめていく。パターン・ランゲージを手法として用いることで、それぞれの実践者が経験を通じて培ってきたコツやわざを、抽象的すぎない形で言語化・体系化することができ、また、現場の実践の質を高めたり遍在する知の体系化、さらにそれを研修等で用いることのできる教材としてまとめることが可能となる。発表では作成したパターン・ランゲージ全体について報告を行う。

0-42 居場所 ID グラムによる大学生のアイデンティティの様相

小沢一仁(東京工芸大学教職課程)

小沢(2020)によるアイデンティティ概念の捉え直し、小沢(2022)による現象学的方法を用いたアイデンティティ概念の検討（「本質学研究第 10 号」）のふたつの理論研究に基づいて、調査研究を行った。アイデンティティ・ステイタスを発展させて、居場所-アイデンティティ・グラムを開発した。このツールを用いて面接調査を行い、大学生のアイデンティティの様相、姿を明らかにすることを目的とする。居場所-アイデンティティ・グラムとステイタスとの違いは、重要な領域を本人における居場所と捉えたこと、全体的ステイタスを現在の居場所全体における自分を納得できるかどうかと捉えたことである。さらに、居場所の変遷と、生まれという実存と自分が自分であることの基準となる願いとを加味して、個人のアイデンティティの様相を捉え、自己理解に寄与することのできる研究をめざす。

0-43 就労移行支援所における就労支援員としてのあり方の模索—M-GTA を援用した省察—

今井桂子(社会構想大学院大学実務教育研究科)・伴野崇生(社会構想大学院大学実務教育研究科)

本発表では、就労移行支援所における就労支援員として働く筆頭発表者自身の支援員としてのあり方を模索し、言語化・体系化することを通じて省察を行う。そのような省察を通じて、就労支援員としてあるべき支援のあり方について記述を行い、他者にとっても活用可能な形式知としていくことを目指す。筆頭発表者は、以前 TAE ステップを用いて「今後の目標」について言語化を行い、「今後は自分の能力を意識し、意図的に行為することで、自分の中に新しい秩序を構築する」というセンテンスを得た。本発表では、TAE ステップによる言語化以降筆頭発表者が、自分の能力をどのように意識し、どのように意図的に行為することで、どのように自分の中に新しい秩序を構築してきたのかを M-GTA を援用した省察を行うことで明らかにする。

0-44 当事者によるアルコール依存症からの回復の物語を配偶者はいかに経験するのか

石井宏祐(佐賀大学教育学部附属教育実践総合センター)・石井佳世(熊本県立大学共通教育センター)

石井ら（2015）はアルコール依存症当事者からのDVサバイバーの語りを分析した。その結果、サバイバーは当事者の飲酒時期のみならず回復過程の様々な段階で苦悩を経験していることが示唆された。そこで本研究では、アルコール依存症の当事者が語る「回復の物語」を配偶者がいかに経験するのかについて、半構造化面接法によるインタビュー調査と記述的現象学的分析によって検討した。一組の夫婦を対象とし、当事者である夫の語りもふまえて妻の語りの記述を行った。その結果、自助グループ等での語りが媒介となり夫婦の対峙的なコミュニケーションを助けること、自助グループ等での当事者による語りは一見繰り返される同じようなものであっても、当事者にとっては毎回少しずつ変化を感じるが、配偶者にとっては長い年月をかけて認識の転換ともいえるような大きな変化を感じるようになるものであることなどが示唆された。

0-45 知的障がいのある子どもの親が抱く親亡き後の不安と将来のプランニングに関するインタビュー調査

山田哲子(立教大学現代心理学部)

かねてより知的障がいのある子どもの親が抱く不安の最たるものには「親亡き後の不安」が挙げられている。しかし同時に、将来に不安があっても具体的に将来について計画を立てている知的障がい家族が少ないことも以前より指摘がされている（望月・秋山，1999）。子の誕生から親が限界を迎えるまで、障がいのある子のケアを親が担う傾向の強い日本では、障がいのある子どものケアを家族の発達段階に応じて社会と家族が共有できるようになることが求められている。本研究では、山田（2018）の親亡き後に関連して将来の準備を促すことを狙いにした心理教育プログラムに参加した知的障がい者家族を対象に、「親なき後の不安」と「将来のプランニング」、そして心理教育プログラムに参加するという行動が生起した背景をインタビュー調査によって探索的にアプローチする。これにより、知的障がい者家族が将来に直面化することへの心理的抵抗に関する示唆を得る。

ポスター発表

ポスター発表スケジュール (各発表においては第1著者のみ記載)

ポスター発表1 大会1日目 (10/29) 501・502教室
(優秀賞選考セッション)

No	筆頭者名	発表題目
P-01	田中千尋	COVID-19危機と対峙する看護教員の経験のプロセス
P-02	廣瀬太介	宗教カルト体験者のポジションの取り方の検討
P-03	越智拓也	教育実習生の指導を通じて教師はどのように専門的成長するか？
P-04	新井素子	表現としての自傷行為
P-05	谷晴加	多職種による Web 上での育児支援座談会を通して起こった母親の変容について
P-06	玉井誠	ゲームへの依存傾向がみられるようになるまでのプロセス
P-07	落合美貴子	集団生活において個別の配慮を必要とする幼児をめぐる母親と保育者の認識のズレに関する一考察
P-08	建部智美	死別を経験した遺族が地域・社会や周囲に求める関わり
P-09	生田邦紘	軽度知的障害のある青年の障害受容
P-10	眞崎光司	作曲家の学習過程における触発の意味

ポスター発表2 大会1日目 (10/29) 503・504教室
(優秀賞選考セッション)

No	筆頭者名	発表題目
P-11	NguyenThi ThackNgan	ベトナム人技能実習生と日本人雇用主とのコミュニケーションのズレ
P-12	土元哲平	離島の子どもはどのように「未来のじぶん」を想像／構想するのか？
P-13	福田聖	メタファーとしての COVID-19
P-14	千田真緒	越境する BTS ファンダムにおける連帯と熱狂

P-15	杉浦彰子	「川の記憶」の語りを伝承する (2)
P-16	齋藤優希	会話による性格決定が関係性によってどのように変化するか
P-17	三野宮春子	創造的アイディアの生成と表現におけるマルチモダリティ
P-18	石井大成	心理学系研究誌全体における『質的心理学研究』の特徴
P-19	平松友紀	コミュニケーション行為における意識を捉える質的調査方法

ポスター発表3 大会1日目 (10/29) 505・506 教室

No 筆頭者名 発表題目

P-20	押切久遠	薬物依存からの回復に関する質的心理学的研究
P-21	古屋由美	言語聴覚士の臨床実習におけるコミュニケーション技能の学びに関する一考察
P-22	杉本菜月	模擬裁判員裁判における裁判官と裁判員の関係変容
P-23	松浦李恵	「創作者になること」にみる学び
P-24	菊地快	精神科領域におけるピアサポーターに必要な条件について
P-25	鹿嶋ひかり	親子関係や親からの期待認知の変容とそれに伴う強迫的心性の変容について
P-26	田中寿夫	“物語る自己視点”の変化に関する質的研究
P-27	岸野麻衣	「エージェンシー」の立ち現れる場の構成としての幼小接続
P-28	太田礼穂	インプロ・ワークショップにおける児童同士の固定化した台本の変容

ポスター発表 4 大会 2 日目 (10/30) 501・502 教室

No 筆頭者名 発表題目

P-29	荘島幸子	安心感を生起させる雰囲気とは何か
P-30	荒川歩	装いとしての部屋、プロセスとしての部屋
P-31	石田喜美	「やさしい日本語」をめぐるポリティクス
P-32	杉山陽香	中学生の問題行動に対する教師の問題観
P-33	黒田真由美	Round Study に参加者はどのように取り組んでいるのか
P-34	呉宣児	二つの国に墓を買う
P-35	松藤遥香	横浜市都筑リビングラボに参加する各団体の関係性の質的研究
P-36	澤田英三	三重県答志島における青年の島外流出とそれに伴う地域内役割の変容と納得の様式(2)
P-37	河合直樹	AI (人工知能) の社会的言説構造を明らかにする新聞記事分析の試み
P-38	安達仁美	ユネスコスクール卒業後の意識変容と活動選択

ポスター発表 5 大会 2 日目 (10/30) 503・504 教室

No 筆頭者名 発表題目

P-39	石井俊行	成人急性期実習・オンライン実習効果の検証
P-40	河本尋子	災害後の生活復興過程における援助要請・被援助行動に関する分析
P-41	岡谷ゆい	障害児保育に関する体験学習を通じた学生の意識変化に関する一考察
P-42	梶原佐保	重度障害児・者とのコミュニケーション
P-43	坂倉真衣	博物館での「出会い (encountering)」は、日常生活の中でどのように形を変えていくか (3)
P-44	三好真人	ガス症状を有する過敏性腸症候群への高等学校における当事者から見た合理的配慮
P-45	山村江美子	訪問看護師が実践する看取り家族の語りに対する傾聴

P-46	鮫島輝美	医療的ケア児の生活支援から学ぶ専門職連携のあり方
P-47	広津侑実子	聴覚障害のあるクライエントと心理職の関係性構築

ポスター発表 6 大会 2 日目 (10/30) 505・506 教室

No	筆頭者名	発表題目
P-48	田中元基	地域子育て支援拠点施設を利用する父親に対する場への適応過程に関するインタビュー分析
P-49	仲本美央	図鑑・科学絵本を活用した保育の営みに関する研究
P-50	大河内瞳	未就学児の子育てをしながら日本語教育に携わる 3 名による語り聴く場の意義と限界
P-51	上山瑠津子	乳児の保育所入園を通じた母親の心理的変容
P-52	松原未季	幼稚園のある 4 歳児の「つまずき」場面における対処とそれに対する保育者の援助
P-53	森和子	多くの里子を育ててきた里親のライフストーリー
P-54	上田敏丈	保育の見守る場面における「最小限の一時介入」
P-55	鶴原美佑	子どもを通じた母親同士のつながり
P-56	古賀松香	保育における「個と集団を育む実践」とはどのようなものか

ポスター発表 1(優秀賞セッション)

P-01 COVID-19 危機と対峙する看護教員の経験のプロセス—分岐点に着目したイマジネーションと展結 (Transduction)

田中千尋(立命館大学大学院人間科学研究科)・サトウタツヤ(立命館大学総合心理学部)・吉田さとみ(梅花女子大学看護保健学部看護学科)・川口弥恵子(熊本保健科学大学保健科学部看護学科)・横山直子(立命館大学大学院人間科学研究科)

新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)の流行によって看護基礎教育の現場では、臨地実習の実施が困難となり、様々な代替方法を駆使して教育の質の維持が試みられている。具体的には、臨地実習の代替方法を模索し、オンライン活用や学内教員、劇団員による模擬患者等の工夫をしながら実施している現状がある。こうした教育現場の急速な変化に看護教員たちはどのように対応しているのだろうか？本研究では、COVID-19 危機に直面した看護教員の経験のプロセスを明らかにするため、教育実践経験 15 年の看護教員 1 名を対象とし複線径路等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach ;TEA)を用いて分析及び考察を試みる。さらに、COVID-19 危機と対峙する経験において重要と考えられる分岐点に着目し、看護教員がどのようにイマジネーションの助けを借りて新たな次元を見出しているか分析し、社会・文化的文脈の中に意味を創造する看護教員の姿を浮き彫りにする。

P-02 宗教カルト体験者のポジションの取り方の検討—対象関係論に基づく考察—

廣瀬太介(立命館大学人間科学研究科博士課程)

宗教カルト体験者は、組織に過剰適応しているあいだ、組織という外部ポジションに対して肯定的な内部ポジションを取る一方で、一般社会という外部ポジションに対して否定的な内部ポジションを取っている。それゆえ、組織内の他者に対しては受容的で親密に振る舞うものの、一般社会の他者に対しては排他的で攻撃的に振る舞う妄想-分裂的なポジションの取り方をしている。それに対して、組織という外部ポジションに対して肯定的なポジションを取る一方で、否定的なポジションも取っている。それゆえ、組織内の他者に対して、感謝しながらも、嫌悪感を抱くという抑うつ的なポジションの取り方をしている。本発表では、宗教カルト体験者が経験した分岐点をハーマンスが提唱した対話的自己によって分析した結果を、クラインが提唱した対象関係論の視点から考察する。

P-03 教育実習生の指導を通じて教師はどのように専門的成長するか？—初めて教育実習生を指導する若手教員に着目して—

越智拓也(聖ドミニコ学園中学高等学校)・太刀川祥平(聖ドミニコ学園中学高等学校)

専門職として、教師がいかにして成長するのかは、学校教育における重要な論点の 1 つである。とりわけ教員養成において教育実習は、その核をなす存在であり、その意義は多くの研究で示されてきた。教育実習生の学びは指導教官との相互作用的な影響が大きく、指導教官の重要性は数多く指摘されている。一方で、その学びは相互作用的なものであるにもかかわらず、指導教官自身が教育実習の指導を通じて何を学ぶのかはほとんど研究されていない。そこで、本研究では、初めて教育実習生を指導する教員が、教育実習生の指導を通じてどのように専門的成長するのかを論究することを目的とする。本研究では、2022 年度に初めて教育実習の指導を担当し、中高一貫校に勤務する教職 4 年目の国語教員を対象とした。教育実習の前後、およびさらにその 1 ヶ月後の 3 回、半構造化インタビューを実施し、教育実習生の指導を通じて、教師はどのように専門的成長するのかを論究する。

P-04 表現としての自傷行為—青年期にある体験者の語りの分析から—

新井素子(東京大学大学院教育学研究科)

本研究は、人前で自傷行為に及んだ体験のある人の語りの分析から、その行為が何を表現しているのかを明らかにすることを試みるものである。筆者の所属大学（当時）の倫理審査委員会の承認を得て、大学生らに対し「自傷質問紙」（2010, 岡田）の実施と半構造化インタビュー調査協力を依頼した。協力者へのインタビューで得たデータは逐語化し、研究目的に合致する5名（男性2名、女性3名）のデータを、テーマティク・アナリシス法（土屋, 2016）を参考にカテゴリ分析した。その結果4つの主テーマ（①自傷行為の社会的容認の伝達, ②自傷行為の衝動の強さの訴え, ③自分に注目しないで欲しいという依頼④周りへの配慮のアピール）が生成された。人前でなされる自傷行為は、他者はこの程度の行為を見逃してくれるはずという行為者の目論見と（①, ④）、対人不安の強さから（②）行為を盾に行為者自身は他者の目から隠れていることを（③）表していると思われた。

P-05 多職種による Web 上での育児支援座談会を通して起こった母親の変容について—複線径路等至性アプローチによる考察—

谷晴加(大阪大学人間科学研究科)・管生聖子(大阪大学人間科学研究科)・北畠康司(大阪大学医学系研究科)・松崎政代(大阪大学医学系研究科)・遠藤誠之(大阪大学医学系研究科)・中本剛二(大阪大学医学系研究科)

周産期は心身共に変化の大きい時期であり、心理社会的危機をはらみやすい。コロナ禍では妊産婦のメンタルヘルス上の問題が指摘されているが、その一要因に、コロナ禍以前は受けることのできたサポートを、コロナ禍以降受けることが難しくなったことが挙げられる。そこで、親が他者とつながることをきっかけに、孤独感を軽減し、親自身が持つ自己効力感やレジリエンスを高め、安心感を持てるようになることを目的に、妊婦と生後1年までの乳児をもつ親を対象として多職種による Web 上での育児支援座談会を行った。本発表は、その効果を明らかにするため座談会に参加した母親5名へのインタビュー調査を行い複線径路等至性アプローチによる分析をしたものである。発生の三層モデルを用いることで、育児不安や困難感についての変容が明らかになった。本研究は大阪大学医学部附属病院倫理審査委員会の承認を受けている（承認番号 19290(T2)-4）。

P-06 ゲームへの依存傾向がみられるようになるまでのプロセス

玉井誠(別府大学大学院文学研究科臨床心理学専攻)・川崎隆(別府大学文学部人間関係学科)

ゲームへの依存は疾病として扱われており、ICD-11には Gaming disorder(ゲーム障害)が記載されている。しかし、ゲーム障害が含まれている嗜癖には、正常と障害を分ける明確な境界が存在しておらず、正常から障害への連続性があることが指摘されている(洲脇, 2003)。そこで、本研究はゲーム障害の患者ではなくゲームの依存傾向がみられる者へ焦点を当て、ゲームに依存していったプロセスを明らかにすることを研究目的とした。ゲーム依存度に関する質問紙で高得点だった大学生を対象にインタビュー調査を行った。収集した10名のインタビューデータに関して M-GTA(木下, 2003)を用いて分析を行った。本研究で描かれたゲームに依存していくプロセスから、ゲームへの依存に対する予防的な支援について考察を行う。

P-07 集団生活において個別の配慮を必要とする幼児をめぐる母親と保育者の認識のズレに関する一考察

落合美貴子(出雲コアカレッジこども福祉科)

本研究では、集団生活において個別の配慮を必要とする幼児に対する母親と保育者の認識の違いとその要因を探り、保育者の母親支援を明らかにすることを目的とする。方法は、保育者4名に対し、半構造化面接を実施し、その語りを分析した。その結果、保育者と母親の認識のズレが生じる場面として懇談場面が抽出され、保育者と母親とでは幼児に向ける視点が異なること、言葉の発達のような目に見える幼児の困り感は保育者も母親も認識しやすいが、社会性や情緒面の発達の幼児の困り感には保育者の方が母親よりも気づきやすいこと等の違いが明らかになった。このことから、母親支援の在り方として、保育者は早期発見につながる重要な立場ではあるが、母親の「気づき」を促すことが、保育者にとって最も難しい課題であり、母親に対して認識及受容を求めるのではなく、支援する必要性と方法を認識できるような働きかけが重要になると考えられる。

P-08 死別を経験した遺族が地域・社会や周囲に求める関わりーテキストマイニングを用いた分析ー

建部智美(中京大学大学院心理学研究科)・古賀佳樹(中京大学大学院心理学研究科)・川島大輔(中京大学心理学部)

死別を経験した遺族への支援について、これまで死別後の心理的適応を促す効果や精神的健康に及ぼす影響などを検討した研究が蓄積されてきた。しかし、心理的介入の効果やサポートグループの機能を検討した研究は散見される一方、遺族が求める周囲の人や地域・社会との関わりについて検討した研究は少ない。そこで本研究では、遺族が地域、社会や周囲にどのような関わりを求めているのか探索的に検討した。448名の中高年遺族を対象とした質問紙調査において、死別後に周囲や地域社会からどのような関わりがあると良いかを尋ねた自由記述への回答内容を、テキストマイニングにより分析した。分析により得られた構成要素を用いて多重対応分析を実施し、固有値の落ち込みと解釈可能性を考慮して軸を採用した。さらに、得られた成分を元にクラスタ分析を行い、他の変数との関連についても検討した。結果をもとに、今後の支援や関わりの在り方について考察する。

P-09 軽度知的障害のある青年の障害受容ー青年・家族・教師の対話の分析からー

生田邦紘(神戸大学人間発達環境学研究科)

軽度知的障害のある青年が障害受容の苦悩を抱えていると多数報告されている。しかし、中途障害を対象に構築された障害受容の理論や定義が軽度知的障害に適応できない可能性が指摘されており、別の観点からの研究が必要である。そこで、本研究は先行研究をふまえて「ふつうになりたい」という心理に着目する。具体的には、かつて「ふつうになりたい」と語り、特別支援学校で不適応に陥っていた青年の変容プロセスを分析した。青年1人と両親および元担任教師へのFGDを行い、ナラティブ論で分析した。大学の研究倫理審査委員会の承認のもと、各々に研究概要を説明して同意を得た。その結果、以下の2点が明らかになった。1点目は、軽度知的障害における障害受容の固有性である。障害者にも「ふつうの人」にもなれない複雑な心理が検討された。2点目は、本人の障害受容の在り方が、本人と家族と教師の価値観の交錯により変容していく過程が明らかになった。

P-10 作曲家の学習過程における触発の意味―独学の作曲家 A 氏のライフストーリー―

眞崎光司(社会構想大学院大学実務教育研究科)

本研究は、教育機関における体系的な音楽教育や熟達者との徒弟的な関係における個人指導などの形で教育を受けていない、所謂「独学」の現代音楽作曲家 A 氏のライフストーリーから、その作曲の独習過程における外界や他者による触発の意味を明らかにすることを目指す。先行研究によると芸術の学習は触発の経験と関係していることが示唆されているが、まだ十分な検討が行われているわけではない。そこで本研究では、作曲を学ぶ際の学習内容や方向性が触発によって形成されていると推測される独学の作曲家 A 氏の学習過程に注目し、その学習過程における触発の意味に焦点を当てる。学習過程においてどのような触発が起き、作曲家自身がそれをどう意味づけるのかを明らかにすることで作曲家にとっての芸術学習と触発の関係を探索的に検討する。なお、本研究は調査協力者を匿名化するとともに発表の際のデータの提示においても個人が特定できないよう配慮する。

ポスター発表 2(優秀賞セッション)

P-11 ベトナム人技能実習生と日本人雇用主とのコミュニケーションのズレ—相互理解不足を招く社会的・文化的要因の検討—

NGUYEN THI THACHNGAN (茨城大学人文社会科学研究科)

近年、外国人技能実習生が増える一方で、それに関連して起こる社会問題はより複雑になってきている。本研究ではベトナム人技能実習生と日本人農家とのコミュニケーションにおいて社会的文化的要因による相互理解不足を招いて生じたズレの要因を検討した。本研究では茨城県のベトナム人農業技能実習生を研究対象とし、研究協力者の人権を尊重し、研究による不利益が生じないよう、監理団体および指導教員とも十分協議したうえで遂行している。研究目的は以下の2つである。①実習生と農家とのコミュニケーションにおいて社会的文化的な価値観・物事の捉え方の違いがお互いに理解を偏狭にし、誤解・ズレが生じて揉め事や対立が起きている例を見出す。②その揉め事や対立に対して実習生の対処行動や開示意向の傾向・方法を分析し、各々の特徴を見出す。これらの調査結果を踏まえ、両者のコミュニケーションを円滑に図る必要な知見について考察する。

P-12 離島の子どもはどのように「未来のじぶん」を想像／構想するのか？—Inter-Modal Pre-construction (IMPreC) 法を用いた探求—

土元哲平(日本学術振興会・大阪大学人文学研究科)

本研究では、離島の子ども達の自己についての未来展望を明らかにする。離島の子ども達の未来展望は、都市部とは異なる記号的資源を用いて、ブリコラージュ的に想像／構想されたものであると考えられる。ただし、未来展望は、更一般化された記号（言語を超え、精神全体を圧倒する記号領域、以下 HGS）であり、容易に分析・言語化できない。そこで本研究では、IMPreC 法に基づく「未来のじぶん」ワークによって、このような未来展望を明らかにする。この方法は、様式（詩、絵、説明、音楽など）を切り替えながら、HGS を探求するものである。協力者（22 名）のワークシートを分析した結果、協力者は「未来に関係する対象」（買い物や動物など）や「有意義な場所」（家の中や職場）といった記号的資源を用いて、「やりたいことができる自由」や「自分の仕事が誰かのためになる」といった HGS としての未来展望を発生させていることが明らかになった。

P-13 メタファーとしての COVID-19 —メディアに現れた表現のディスコース分析から—

福田聖(東京大学大学院教育学研究科)・堀内多恵(東京大学大学院教育学研究科)・新井素子(東京大学大学院教育学研究科)・江刺香奈(東京大学大学院教育学研究科)・太齋慧(東京大学大学院教育学研究科)・若子静保(東京大学大学院教育学研究科)・能智正博(東京大学大学院教育学研究科)

言葉は現実を再表象しているのではなく、表現の仕方やレトリックによって現実が生み出されるが、そうした現実表現する側の生きる文化や立ち位置により異なってくる。私たちの体験する病いも例外ではなく、2019 年以来世界を席巻している新型コロナにもあてはまる。本発表では、日本国内でメディアに現れた新型コロナに関わる発言や創作表現を対象として Willig(2001)のディスコース分析を参考に検討を行った。その上で人々の用いるレトリックにみられる新型コロナのイメージを整理し、新型コロナが日本人にどのような体験をもたらしたかを考察した。結果として、戦争・動物・モンスター・自然災害など海外文献とも共通のメタファーが見出された一方、コロナ禍の持続に伴ってユーモラスにさえ捉える点、災厄からの癒しとしての自然が強調される点、他者への思いやりを示しながら状況を達観しようとする点など、独自の特徴的な体験も浮かび上がってきた。

P-14 越境する BTS ファンダムにおける連帯と熱狂—日米ファンのフィールドワークを通して—

千田真緒(東京都市大学大学院環境情報学研究科)・岡部大介(東京都市大学メディア情報学部)

本研究では、韓国アイドルグループ BTS のファンダム(「ARMY」と呼ばれる)を対象とし、「ファン活動を通じた社会参加」(ジェンキンス, 2009=2021)に着目する。韓国は国家戦略として文化産業を世界に向けて発信してきた。そのなかでも K-POP は、コンテンツに限らず、ファン文化も海外で拡大・再生産されている(ホン, 2021)。ARMY は、K-POP ではまれな草の根式に形成され(キム, 2020)、それゆえ多様な社会的関心がつながる場となっている。ファン自身も知らずしらずのうちに政治や人権問題に関心を持つようになり、単に BTS を愛好するだけの活動とは大きく異なる。いわば ARMY の活動は、日常生活世界の見え方を変容させる。本稿では、(倫理的手続きのもと同意を得て行われた)日米ファンへのインタビューに基づき、ARMY として「社会と関わること」もまた、ファン活動の楽しみを拡張することを記述する。

P-15 「川の記憶」の語りを伝承する (2) —「語りマップ」を活用した災害・地域レジリエンス向上の取り組み—

杉浦彰子(茨城大学地球・地域環境共創機構)・藤田由美子(日本原子力発電株式会社)・関口豪之(日本原子力発電株式会社)・馬場紗矢香(茨城大学人文社会科学部)・榎田容子(国立研究開発法人国立環境研究所)・伊藤哲司(茨城大学人文社会科学部)

本研究は台風 19 号(2019 年 10 月)の被災地、水戸市飯富地区をフィールドとし、住民と調査者が対話を通して災害・地域レジリエンス向上につなげていくことが目的である。特徴は、住民と調査者が一緒に現場を訪れ、そこでの語りを記録することである。調査の結果、住民が水害現場に身を置きながら語る内容は、被災当時の様子だけでなく、子どもの頃のエピソードや両親から語り継がれた水害の記憶など、さまざまな「川の記憶」を蘇らせるものであった。そこで、住民たちの語りをまとめたデジタルの「語りマップ」を作成し、そのマップを見ながら住民と調査者が語りあいながら「語りマップ」をさらに共同生成し、他の住民とも記憶を共有しながらまちの未来を考えるワークショップを行った。このように、複数の個人語りから共同語りへとつなげ新たな知を見出し、「語りマップ」を活用した「川の記憶」の伝承を通じ、レジリエンス向上にどうつなげられるかを考察した。

P-16 会話による性格決定が関係性によってどのように変化するか—アイドル診断テストを用いて—

齋藤優希(立命館大学人間科学研究科)・土元哲平(日本学術振興会・大阪大学人文学研究科)・サトウタツヤ(立命館大学総合心理学部)

本論文では、ある個人が関係性の異なる複数の人とアイドル診断テストを行ったときにどのように性格決定がなされ、どのようにモード性格が見いだされるかということについて検討した。20 代の女性 2 名に母・きょうだい・友人と会話をしながらビッグファイブに基づく TIPI-J の質問項目を用いたアイドル診断テストを行ってもらった。そして、診断結果の 5 因子が関係性の中でどのように変化するのかを検討し、大槻(2019)のプロセス的理解と藤澤(2020)の KJ 法による構造的な理解に則して、会話を分類し検討した。また、モード性格的理解が見られた箇所については会話についての分析を行った。その結果、同一人物の性格を決定する際であっても構造とプロセスの組み合わせは会話によって差があるということがわかった。よって、性格決定には様々な方法が見られ、表出する性格が関係性によって異なり、性格が相手との相互行為によって変容するものであることが示唆された。

P-17 創造的アイディアの生成と表現におけるマルチモダリティー言語テキストと視覚イメージの不一致を利用した絵本を用いて—

三野宮春子(東京大学大学院)

伝統的外国語学習では、言語記号を正確に操作して所与の意味に符合させる訓練が中心である。しかし今日、意味が生成変化する相互行為の過程で創造的に言語を使う力が重視されている。言語の創造性に関する議論では文学的表現技法に注目が集まり易いが、より日常的な創造性は、文体の独創性よりも、文脈や目的に応じた言語使用の柔軟性として顕在化する。本研究は、学習者が新規の問題や状況に直面した際に、多様な資源を活用して意味や行為を生産する過程の詳細に接近する。4名の大学3年生（研究協力の承諾を書面で得た）に、絵と文の間に齟齬を含む絵本を見せ、齟齬を解消するような短い説明を考えるゲームに参加してもらった。後日マルチモーダル会話分析を行った結果、参加者たちが言語・視覚イメージ・ジェスチャーといった複数のモーダルを自発的に組み合わせて利用し、アイディアの生成および表現という目的を達成する相互行為の過程が明らかになった。

P-18 心理学系研究誌全体における『質的心理学研究』の特徴—テキストマイニング的手法を用いての検討—

石井大成(立命館大学人間科学研究科)・中田友貴(立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構)・サトウタツヤ(立命館大学総合心理学部)

本研究は『質的心理学研究』の特徴を明らかにすることを目的とし、『質的心理学研究』とそれ以外の心理学系研究誌数誌に収録される研究の抄録をテキストマイニング的用法を用いて解析、研究内容、対象の比較を行った。本研究では2002年から2020年の間に発行された日本の心理学系研究誌を対象にコーパスを作成した。J-STAGEに収録される心理学系研究誌28誌から英語の書誌情報と要約を取得し、書誌情報解析ツールであるVOS-viewerを用いてコーパスに含まれる論文の抄録から関連語を抽出、用語の共起に基づく可視化、分析を行った。その結果、心理学全体においては各研究領域を反映していると思われる複数のクラスターが見られ、それぞれstimulus, patient, humanなどを中心とするネットワークが形成されていた。一方『質的心理学研究』においてはstoryなど心理学全体では見られない単語の頻出が見られ、心理学における質的研究の特殊性を示唆する結果が得られた。

P-19 コミュニケーション行為における意識を捉える質的調査方法 —メールのやりとりを通じた主体の語りに着目して—

平松友紀(早稲田大学大学院日本語教育研究科)

本発表は、やりとりにおいて、コミュニケーション主体の意識と表現を捉える、メールを用いたロールプレイによる質的な調査方法を検討するものである。本研究は、人間関係や場といった場面認識に基づき、意識、内容、形式を連動させてコミュニケーションが成立すると捉える立場に立つ。日本語教育学におけるロールプレイを用いたメールの研究では、言語使用を形式面から明らかにする言語的アプローチによる調査が主な方法として蓄積されてきた。本発表では、やりとりを行う際に場面をどのように捉えたのか、どのような経験が想起されたのかといった主体の意識に重点を置き捉える本研究の試みを提示する。やりとりという展開の中での意識の変容を捉える、場面認識に加え、やりとりにより想起された経験などのコミュニケーションの前提にある認識を捉える、外的場面に変化を加えるといった観点からやりとりにおける意識を捉える方法を検討する。

ポスター発表 3

P-20 薬物依存からの回復に関する質的心理学的研究—男性覚醒剤事犯者の保護観察プロセスに焦点を当てて—

押切久遠(法務省保護局・東京成徳大学心理学研究科)・石隈利紀(東京成徳大学心理学研究科)

保護観察となった男性覚醒剤事犯者の回復プロセスと再犯プロセスに焦点を当てて調査分析を行い、薬物依存からの回復のために重要なポイントを明らかにすることを目的とした研究である。刑の一部執行猶予の言渡しが確定した男子覚醒剤事犯者4名（回復ケース2及び再犯ケース2）の保護観察事件記録について、法務省保護局の了解と東京成徳大学の研究倫理承認を得た上で調査し、質的研究法の一つである複数径路・等至性モデル（TEM）の枠組み等を用いて分析した。TEM図又はTEM図作成を目指す過程において示唆されたのは、回復への径路の分岐点となったのが、「自分は薬物依存症であるという自覚を持てたか」「薬物使用の多様な引き金を認識できたか」「重要な他者との関係を良好に保てたか」「希望する仕事に就職できたか」「仕事に充実感を持つことができたか」「疲れや体調不良に陥った時にすぐに対応できたか」などであることであった。

P-21 言語聴覚士の臨床実習におけるコミュニケーション技能の学びに関する一考察

古屋由美(青山学院大学社会情報学研究科)

言語聴覚士とはコミュニケーションに障がいがある者を支援する専門職種である。しかし、養成課程の臨床実習において学生のコミュニケーション能力の問題を指摘されることは少なくない。本発表では、くも膜下出血により重度のコミュニケーション障がいを呈した患者と学生、指導者である発表者との臨床実習場면을対象に相互行為分析を用いて検討し、実習日誌の記録の分析と併せて、学生がコミュニケーション技能として何を学んだかを考察する。結果、学生は実習の経過とともに自身の身体や道具（訓練教材や言語刺激）の配置を患者の視覚や触覚に対して調整することが可能となり、目標となる行為を協同的に達成していた。このことが言語聴覚士のコミュニケーション技能の重要な側面の一つである可能性が示唆された。なお、倫理的配慮については、青山学院大学における人を対象とする研究倫理審査委員会の承認の元、参加者から同意を得た上で研究を実施した。

P-22 模擬裁判員裁判における裁判官と裁判員の関係変容—複線径路等至性モデリングと関係学の融合による評議プロセス分析—

杉本菜月(立命館大学大学院人間科学研究科)・サトウタツヤ(立命館大学総合心理学部)

裁判員裁判は法律の専門家である裁判官と非専門家である裁判員が協働し判決を下すものであり、裁判員は裁判官によって説示される法律概念を理解することが求められる。本研究では、難解な法律概念である未必的殺意の説示・理解プロセスにおいて、知識を媒介し裁判官と裁判員が対等に議論できる関係を築く過程を分析する。データは模擬裁判員裁判の録音・録画データを対象とし、プロセスを捉える複線径路等至性モデリング（安田他，2015）及び関係を「外在・外接・接在・内接・内在」という5つの質で捉える関係構造図（日本関係学会，1994）によって分析する。なお、参加者には模擬裁判の実施概要について説明した上で謝金を支払い、データ利用の許諾を得ている。裁判官と裁判員と法律概念の三者の関係変容をTEMと関係構造図の融合様式で描くことにより、裁判官が占有する法律概念が裁判官と裁判員の共通基盤として共有され、協働が実現するまでを可視化する。

P-23 「創作者になること」にみる学び

松浦李恵(宝塚大学東京メディア芸術学部)

マンガやイラストは身近な創作物であり、芸術系の大学や専門学校を通して漫画家やイラストレーターといった創作者を目指す学生も多い。またファン文化においては、愛情や興味の表現としてマンガやイラストの二次創作を行うことが一般的な活動になっており、創作者として活躍できる場となっている。しかし創作の場が多様になった今日において、創作者を目指す者がどのように学び、創作へ参加しているのかを明らかにしているものは少ない。そこで本研究では、漫画家やイラストレーターを目指す学生を対象としながら、創作者になる過程を明らかにし、近年の創作に関する新たな知見を獲得することを目的とした。芸術系の大学に通う学生 10 名を対象にインタビュー調査を実施し、学校、SNS、商業創作、二次創作といった多様化した活動やコミュニティを往還し、それぞれの場における適切なふるまいを学びながら創作者になろうとする姿が見えてきた。

P-24 精神科領域におけるピアサポーターに必要な条件について

菊地快(あすぴれんと)・小出結紀(あすぴれんと)・佐藤航一郎(あすぴれんと)・中川優子(あすぴれんと)

近年、精神疾患に罹患する者は増加傾向にあり、それに伴いピアサポーターのニーズも高まってきている。しかし、ピアサポーターになる為にはどのような要素が必要であるかが明らかにされていない。現在のピアサポート活動従事者も、その育成過程に統一性が保たれていないのが現状である。そこで本研究では、精神科領域におけるピアサポーターにはどのような要素が必要となるのかを明らかにするため、GTAによる分析を行った。その結果、最終的に6つのカテゴリーが生成された。ピアサポーターには個人の経験や体調のコントロール、対人関係等における理想と現状とのギャップを修正することが重要であると示唆された。特にピアサポーター個人の経験が重要であるという考えは、偏りのある支援につながる可能性があり、今後ピアサポーター育成プログラムを作成する際の知見が得られた。

P-25 親子関係や親からの期待認知の変容とそれに伴う強迫的心性の変容について

鹿嶋ひかり(別府大学大学院文学研究科臨床心理学専攻)・川崎隆(別府大学文学部)

強迫性障害(Obsessive-Compulsive Disorder : OCD)の特徴とされる強迫観念や強迫行為が日常生活において健常な範囲でみられる強迫的心性は親子関係との関連が指摘されてきた。しかし、家庭によって異なる親子関係を子ども自身がどのように捉え、それがどのように強迫的心性につながっていくのか、一人ひとりの語りから分析した質的研究はほとんど行われていない。本研究では親子関係や親からの期待に対する青年の認知の変容とそれに伴う強迫的心性の変容について個々人の語りから共通性や多様性を見出すことを目的とした。質問紙調査によって強迫的心性が高いと判断した大学生 15 名にインタビューを実施した。分析テーマを「親子関係や親からの期待認知の変容とそれに伴う強迫的心性の変容」とし、得られたデータに関して M-GTA(木下, 2003)を用いて分析した。

P-26 “物語る自己視点”の変化に関する質的研究—対人プロセス想起法訓練におけるカウンセラーの自己についての語りに着目して—

田中寿夫(淑徳大学総合福祉学部)・神信人(淑徳大学総合福祉学部)・緒方淳(東京工科大学ヘルスサポートセンター)

本発表では、カウンセラーが自ら実施した試行カウンセリングの録画データを質問者と視聴しながら、各場面での体験について話し合う対人プロセス想起法訓練において、カウンセラーの「語り」がいかに変化するのかについて報告する。大学院生カウンセラーと臨床心理士の質問者による一組の対話データを対象とし、カウンセラーの自己についての語りに着目して分析を行った。結果、視聴直前では「その時（試行カウンセリング時）の自己」視点からの語りを中心であったのに対して、視聴と質問者との話し合いを通じて「今（視聴時）の自己」視点が派生し、次第に「今の自己」視点が参照基準となって「その時の自己」を解釈する語りが現れるなど、「物語る自己の視点」が変化していた。また、その変化を基盤に「未来（今後）の自己」について質問者と話し合う中で、「今の自己」を「今の自己」視点から省察し、自己理解の深化や拡張を得ている語りも現れていた。

P-27 「エージェンシー」の立ち現れる場の構成としての幼小接続—小学1年生の学級における1年間のフィールドワークを通して—

岸野麻衣(福井大学連合教職大学院)

幼児教育から小学校教育への接続においては、教育課程や教師の教育観や関わりが異なる環境の中で、子どもなりに調整を図りながら適応していることが明らかにされてきた。一方で、現在、子どもが主体となって力を発揮できるようなカリキュラムを開発することが求められている。授業や行事などさまざまな制約をもたらす枠組みがある中で、子どもはどのようにエージェンシーを発揮することが可能となるのだろうか。本研究では、小学1年生の学級における1年間のフィールドワークを行い、エピソードを質的に分析した。授業や行事の枠組みのもとで活動することを強いられながらも、その中で子どもなりの発見や思考が表現され、教師はそれを活かしていた。また活動の枠組みそのものについてネゴシエーションも行われていた。幼小接続は個の適応の問題としてだけでなく、エージェンシーが立ち現れる場や状況の構成の問題として捉え直す可能性が示唆された。

P-28 インプロ・ワークショップにおける児童同士の固定化した台本の変容—ゲーム場面に現れた葛藤ならびに提案の変化に着目して—

太田礼穂(青山学院大学社会情報学部)

近年、教室実践に即興演劇遊び（インプロ遊び）を接続する試みが盛んになっている。この接続により学校の固定化した台本（説明と理解、質問—応答—評価といった教室の振る舞い）を演劇遊びで転換させ、共同の内に子どもの創造的学習を引き起こすと期待できるためである（e.g., Lobman, 2010, Holtzman, 2009）。ただしこれまでの知見では固定化された関係をほぐす意識的・無意識的な会話の運用の存在が指摘される一方で、その発話シークエンスが成り立つ過程や、台本で演じる主体から即興する主体への転換がいかにも生まれ新しい活動につながる過程は断片的にしか分かっていない。本研究は、演劇的手法に関心がある小学校教員と協働したアクションリサーチで企画・実施したワークショップを対象に、固定化された台本がどのような相互作用で可視化され、変容していくかを探索的に検討する。

ポスター発表 4

P-29 安心感を生起させる雰囲気とは何か—イメージ画と語りによるモチーフの探求—

荘島幸子 (帝京平成大学健康メディカル学部)・藤丸優香 (帝京平成大学大学院臨床心理学研究科)

人が安心感を抱く状態とは、自己のみならず、他者や社会との関係のなかで成立しうるのであり (岩瀬・野嶋, 2013)、その成立は対人関係に確かさがある、社会とつながるなかで獲得されるものである。しかし、「確かさ」や「つながり」は実体がなく、雰囲気やフィーリングに類似するため概念的に明確化しづらい特徴をもつ。そこで本研究では、ヴィジュアル・ナラティブの方法論に依拠したイメージ画の分析を通して、人に安心感を生起させる雰囲気を明らかにすることを目的とする。研究協力者は雪だるま式にリクルートし、研究同意を得られた 10 代から 50 代の 47 名の方を対象に安心感がある人についてイメージ画および、できるだけ詳細な説明を求めた。描かれた内容と説明 (語り) に注目して分析した結果、①自然物、②人物、③衣食住、④抽象物の 4 つのモチーフに分類された。本研究は帝京平成大学倫理委員会による承認を得て実施された。

P-30 装いとしての部屋、プロセスとしての部屋

荒川歩 (武蔵野美術大学造形構想学部)

部屋を中心とした住空間は、従来、環境という観点から検討されてきた。しかし、住空間を整えることは、自己のアイデンティティの強化や気分の切り替えることにも関係する。これらは、装い研究で従来から取り上げられてきた点である。そこで本研究では、部屋を変化させる動機やその効果を人々がどのように捉えているのかをインタビューに基づいて検討したうえで、装いと比較して論じる。インタビュー対象者は、事前調査で比較的多い頻度で部屋の模様替えをすると回答した 30 代女性 3 名 (それぞれ会社員・無職・自営業) であった。インタビューの結果、インタビューは、物理的・家族的な制約や、家具を購入するたびに変わる部屋の印象の中で、期待する効果をもった部屋にするために調整を繰り返していることが示された。

P-31 「やさしい日本語」をめぐるポリティクス—留学生・教育学部生共同ワークショップ参加者の語りにおける言語管理—

石田喜美 (横浜国立大学教育学部)・半沢千絵美 (横浜国立大学国際戦略推進機構)

本発表では、多文化化が進行する日本の中で規範化されつつある「やさしい日本語」に焦点を当て、その使用をめぐるポリティクスを描き出す。事例として、日本語初級レベルの留学生との共同ワークショップに参加した教育学部生へのインタビューに見られた、「やさしい日本語」に関する語りを取り上げ、彼らの語りに見られる「やさしい日本語」使用に対する規範、およびその規範の揺らぎについて報告する。具体的には、我々が日常生活の中で行う自他の言語使用に関する判断や介入に焦点を当てる「言語管理 (language management)」 (ネウストプニー 1995 ほか) の視点から、教育学部生の「やさしい日本語」についての語りを分析・考察することによって、「やさしい日本語」が、日本語母語話者とそうでない者との間の非対称な関係性を前提としていること、さらにいえば、その前提を固定化しうる危険性があることを指摘する。

P-32 中学生の問題行動に対する教師の問題観—生徒指導実践についての語りから—

杉山陽香 (中京大学大学院心理学研究科) ・ 川島大輔 (中京大学心理学部)

教師の実践的思考について授業や学習指導の分野で知見が積み重ねられてきたが、生徒指導に関しては研究が少ない。また、生徒指導の実践において生徒の問題は、教師が生徒を問題だと見なすことで創り出すことから、教師の問題観を問い直す研究が求められる。以上より、本研究は、中学生の問題行動に対する学校教師3名の語りから、教師がどのような問題観を有しているかを探索した。調査は、半構造化インタビューを行い、得られた語りはKJ法に準じた手法で分析した。結果から、教師が問題視している「問題行動」と「問題に至る背景要因」が明らかとなり、それらを「問題観」として統合的に解釈しうるモデルが生成された。具体的には「時間的観点」(今の問題/将来の問題)「問題対応可能性」(どうしようもない問題/どうにかしたい問題)という2つの軸が見出された。この全体的なモデルと、3名それぞれの問題観モデルを比較することで特徴や相違点を考察した。

P-33 Round Studyに参加者はどのように取り組んでいるのか

黒田真由美 (京都大学大学院教育学研究科)

小学校の授業の事後検討会の一つの方法としてRound Studyが行われている。本研究では、Round Studyに参加者は何を意識しながら取り組むのかをインタビューから明らかにすることを目指した。研究協力者は、教員経験29年、Round Study経験5年の教師である。インタビュー実施時には、個人情報に配慮すること、インタビューの中断は可能であること等を伝えた。教師は、Round Studyでは他の教師から聞ける言葉の多さが圧倒的であること、最後に発表の時間をもつと他者の意見を聞く機会も増、自分の中でも整理につながるなどの見解が示された。一方で、まとめることなくそのまま終わる場合は、個人の見解が十分に整理できないとの課題も指摘された。これまでのRound Study研究でも、Roundが進むに連れて参加者の見解が深まる様子が示されてきたが、参加者はそれだけではなくそれをどうまとめるかということ意識していることが明らかになった。

P-34 二つの国に墓を買う—死を意識しながら生きるあるフィリピン人女性移民の語りから—

呉宣児 (共愛学園前橋国際大学国際社会学部) ・ 岡井宏文 (京都産業大学現代社会学部)

本報告は、日本の移民(ニューカマー)の生と、そこから想起される死にまつわる意識を捉えることを目的とする。これまで日本の移民研究においては、定住化や社会統合に関心が向けられてきた。移民の生活にまつわる現状と課題が明らかになる一方、人生の終局である死や死にまつわる事柄については等閑視されてきた。移動は、移民に対して最後の休息地を想定する際に複数の選択肢を開く(Casal et al., 2010)。出身国と移住先にまたがる人生は、最終的な埋葬地の決定に際して、アイデンティティにまつわる重大な実存的選択に直面することがある(Hunter, 2018)。本報告は、在日フィリピン人女性を対象として、移民の死を巡る意識を捉える。移民が移住先で死を意識したとき、生きることや死ぬことをどのように捉えるのか。また、死後の行き場としてどんなところを望むのか。そしてこれらの意識に介在する要因はどのようなものなのかを明らかにする。

P-35 横浜市都筑リビングラボに参加する各団体の関係性の質的研究

松藤遥香 (NEC 通信システム株式会社) ・ 小池星多 (東京都市大学メディア情報学部)

本研究は、横浜市都筑区において精神障がい者、NPO、企業、大学、行政で構成された“都筑リビングラボ”が横浜市の小学校と協働し、学校の教室へ入れないという困難を抱えた児童への個別サポート活動を行った。そしてこの活動を通して各ステークホルダーの関係性や、児童を取り巻く環境の変容を考察して以下のことを明らかにした。(1) 大学が小学校へ入り込み、課題を可視化したことで、都筑リビングラボのステークホルダーの参加を促した。(2) 外部の人との触れ合いと、リソースを使用した遊びにより児童は従来と異なる振る舞いを見せた。また、児童が特別支援学級に入り込んでゆくという変化をもたらした。(3) これらの活動を通じて、児童が特別支援学級へ入り込み始め、その変容を見た児童の保護者が特別支援学級への移籍を決意した。教員、特別支援学級、保護者にも相互に影響を及ぼしあい、新たな環境が構成された。

P-36 三重県答志島における青年の島外流出とそれに伴う地域内役割の変容と納得の様式(2)

澤田英三 (安田女子大学心理学部)

三重県鳥羽市答志島では、近年、多くの青年が島外に流出している。それに伴って、青年団や寝屋子制度など、青年がこれまで担ってきた地区内での一定の役割を、青年だけでは果たすことができなくなってきた。本報告では、青年団や他の成人集団（消防団や漁業組合、各世古）などへのインタビューを通して、かつての青年が担ってきた役割を、他の年齢集団等がどのように分担しながら、コミュニティの日常や伝統行事を維持してきたのか、そしてそこで生じた変容を住民はともにどのように納得しながら進めているのかを明らかにする。本報告では、特に島に残った青年に対するインタビューを通して、地域の伝統行事や日常生活における役割や上の世代からの支援と協働、および島を離れた青年の参画など、新たに形成されつつある地域の形と、それに対する住民の認識（納得の様式）の一端を明らかにする。〔安田女子大学研究倫理審査委員会の承認済（番号：180002）〕

P-37 AI（人工知能）の社会的言説構造を明らかにする新聞記事分析の試み

河合直樹(札幌学院大学人文学部)

近年ますます AI 教育の必要性が強調される一方、これまでに人々が参照または使用してきた AI 言説そのものの特徴や構造を検討する研究はほとんどない。そこで、新聞に掲載された AI 関連記事の内容と傾向を分析し、社会に流布されてきた AI 言説の特徴を明らかにする。まず、2021 年内（1 月 1 日から 12 月 31 日まで）に発行された読売新聞および朝日新聞において、「人工知能」という言葉が使用された新聞記事データを取得した。そのうえで、各記事において「人工知能」のどのような点が強調されているのかを判定する複数の基準を設定してコーディングを行い、結果として新聞記事全体がどのような言説構造を呈示しているのかを検討した。

P-38 ユネスコスクール卒業後の意識変容と活動選択—なぜ、ユネスコ活動を継続したのか—

安達仁美 (信州大学教育学部)

ユネスコが主導する ESD (Education for Sustainable Development) の推進拠点校とされるユネスコスクールの数は、ユネスコ加盟国中で日本が最多となっている。一方で、戦後に始まった日本の民間ユネスコ運動の歴史は長く、全国各地にユネスコ協会が存在するものの、民間ユネスコ協会に所属しながら継続的にユネスコ活動に取り組む人数は減少しており、特に若者に対するユネスコ活動への参加促進が課題とされている。そこで、ユネスコスクールから民間ユネスコ活動への継続を考えるにあたり、本発表では、ユネスコスクール卒業生の中から、ユネスコ協会に所属し継続的に活動している者とそうではない者に対してインタビュー調査を実施し、在学中から現在までのライフストーリーから、ユネスコに対する意識の変容や卒業後の活動選択要因について明らかにすることを試みる。

ポスター発表 5

P-39 成人急性期実習・オンライン実習効果の検証—グループインタビュー内容の質的分析—

石井俊行 (兵庫大学看護学部)

本研究は、新型コロナ感染拡大により看護学生3年生の病院実習が急遽学内実習(オンライン実習)に変更した学習効果を明らかにすることを目的とした。A大学研究倫理委員会の承認を得た後、対象学生8名に同意を得て、グループインタビューを行い、分析した。その結果、オンライン実習であったが、「術前・術後看護をイメージできた」「病院実習と同じ学び」「受け持ち患者への看護技術の困難さ」「時間的猶予による思考過程の重要性」と大きく4つの学習効果に分類できた。病院実習より受け持ち患者を設定、日々の行動計画より観察、看護技術を提供したことで、「術前・術後看護をイメージできた」「病院実習と同じ学び」につながったと考えられた。一方で、看護技術への反応など患者役割が準備不足であったことが課題として示唆された。

P-40 災害後の生活復興過程における援助要請・被援助行動に関する分析

河本尋子 (常葉大学社会環境学部)

本研究は、東日本大震災を災害事例として、災害発生後に生活復興に向かう過程に着目し、同過程における援助要請・被援助行動に関連する諸要素の抽出を目的とした。本研究では、東日本大震災による住まいの被害を経験されたかたを対象に、半構造化面接法による調査を実施し、そのテキストデータを用いて内容分析をおこなった。既往研究として、EQS・EQスケール(内山・島井・宇津木・大竹, 2001)や災害時自己効力感(元吉, 2019)がある。それらの成果をふまえながら、本研究では、被災後における援助要請・被援助行動の関連要素の特定、行動と結びつく情動や価値観の抽出を行い、それらの時系列的な変化と特徴等について考察を行う。本研究の倫理的配慮として、調査対象者に、研究目的・方法・期待する結果と協力に伴う利益・不利益等について口頭及び文書により事前説明し、同意が得られた方にご協力いただいた。

P-41 障害児保育に関する体験学習を通した学生の意識変化に関する一考察

岡谷ゆい (名古屋女子大学短期大学部)

保育者の専門性の一つとして、子どもの状況や発達過程を踏まえ理解することが重要であると窺われる。特に障害児や特別な配慮を必要とする子どもにおいては、多様化する現代の保育の実情を踏まえ、保育者には子どもの理解を追求し専門性を向上することが求められている。そこで、本研究では、保育者養成課程の学生を対象とし、障害児保育に関する体験学習を通した学生の意識変化を検証することを目的とした。「障害児保育」の授業内での体験学習に対するコメントをテキストマイニングツール「KH Coder」にて分析を行った結果、学生は体験学習を通して障害のある方の日常生活での困難感に触れ、気持ちを理解した上で支援することの重要性を自ら見出していると考察された。障害児への保育や支援について教授する際、体験学習を通して学ぶことが子どもの気持ちに寄り添った保育や支援について学生が自ら考える一助となると考えられた。

P-42 重度障害児・者とのコミュニケーション—水泳サークル活動のフィールドワークによる検討—

梶原佐保 (無所属)・能智正博 (東京大学大学院教育学研究科)

重度障害児・者は、その障害により他者とのコミュニケーションを妨げられることが多い。本研究では、第一著者が参与している障害児・者の水泳サークルにおける実践的フィールドワークを通じて、重度障害児・者と援助者とのコミュニケーションが行われるプロセスを探索的に理解することを目的とした。結果として、援助者が重度障害児・者の発語や頭・視線の動き、表情といった非言語的な表出を意思表示と解釈していること、そして、重度障害児・者が援助者の意思表示を理解した根拠として、彼らの事後の行動がその意思表示と矛盾しないのを確認していることが浮かび上がってきた。援助者はその過程で重度障害児・者のコミュニケーション能力を見出すと同時に構築しており、彼らをコミュニケーションの主体として認識し、その認識を保つために積極的にコミュニケーションを図るというプロセスが明らかになった。

P-43 博物館での「出会い (encountering)」は、日常生活の中でどのように形を変えていくか (3) —来館者の博物館体験を理解する試み—

坂倉真衣 (宮崎国際大学教育学部)・真鍋徹 (北九州市立自然史・歴史博物館)・南博文 (九州大学)

「出会いを起点とした文脈モデル」は、来館者と「展示物との出会い (encountering)」、すなわち展示物—来館者間の相互作用過程を可視化することのできるモデルである (坂倉 2015)。著者らは、2018 年より 2 組の被験者 (いずれも当時幼児～小学生とその保護者) を継続的に調査し、博物館を訪れた初期の「展示物との出会い」が、日常生活の中で変容していく過程や、再び博物館を訪れた際に起こった展示物との出会いは、初期にはなかった新たな要因が引き出され、初期のものとは異なる様相であることなどについて報告してきた (坂倉・真鍋 2018, 2019)。しかしながら 2019 年度以降は、コロナ禍で 2 組の被験者らもしばらく博物館を訪れることができなかった。本発表では、博物館を訪れることができない中で、被験者らの「博物館体験」はどのように変容していったのか (体験はどのように記憶されているのか) についてその後のヒアリング調査をもとに明らかにする。

P-44 ガス症状を有する過敏性腸症候群への高等学校における当事者から見た合理的配慮 —インタビュー調査による回想体験の検討—

三好真人 (常葉大学教育学部)・門間咲紀 (常葉大学教育学部)

本研究は、ガス症状を有する過敏性腸症候群 (以下、IBS) 当事者から見た高等学校における合理的配慮に関する問題を扱うものである。IBS 当事者が高校生活を送るうえでどのような配慮を求めているのか、またその実施に向けた経験を抽出することで学校適応に向けた具体的な環境調整をめぐる当事者の思いを明らかにすることができる。高校で IBS のガス症状に悩まされた経験のある 19～24 歳の現在社会適応の良好な当事者 5 名へ当時を回想するインタビューを行った。調査は 2022 年 6 月に実施し、対象者には文面と口頭で研究の目的、録音の許可、参加拒否の権利、匿名性の確保、データの管理について説明し参加同意を得た。録音記録から逐語録を作成し、M-GTA を用いて分析した。分析の結果、「自己開示をめぐる葛藤・学校関係者との環境調整・配慮内容の具体的な希望」が抽出された。合理的配慮を学校へ申請するプロセスにおける当事者の葛藤の構造を検討していく。

P-45 訪問看護師が実践する看取り家族の語りに対する傾聴

山村江美子 (聖隷クリストファー大学看護学部)・長澤久美子 (常葉大学健康科学部看護学科)

在宅で看取りを行う家族の語りに対して、訪問看護師が傾聴するという経験知に基づく看護実践について、明らかにすることを目的とした。実施にあたっては、所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した（認証番号 18057）。訪問看護師 11 名に、半構造化面接法を行い、質的記述的に分析を行った。訪問看護師の行う傾聴は、家族の語りを妨げることなく、静かに聴くという受動的な姿勢にとどまることなく、【あえて知ろうという能動的な姿勢】が示された。ここには、看取り期以前より会話を通して家族の思いを聴き、【意識して情報として蓄積】するという姿勢が示された。看取り期の家族の意思決定場面において、よりよく意思決定ができるように、蓄積していた情報を活用して支援につなげていたことが明らかとなった。訪問看護師が行う傾聴については、【看護実践の前提となる根拠を探る】という能動的な姿勢が示された。

P-46 医療的ケア児の生活支援から学ぶ専門職連携のあり方

鮫島輝美 (関西医科大学看護学部)・東村知子 (京都教育大学教育学部)・末永美紀子 (特定非営利活動法人 こどもコミュニティケア)

日常的に医療的生活援助を必要とする「医療的ケア児」は、周産期医療の進歩に伴い、増え続けている。これまで、専門職や環境が整備された預け先の不足により、子どもたちが適切な支援や教育を受けられないだけでなく、24 時間対応のケアが必要な場合もあり、家族の生活も含めて大きな社会問題となっていた。2021 年に「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律」が施行され、自治体の支援が「努力義務」から「責務」となり、体制の拡充が急務となっている。特に、今後、現場に求められるのは、保育士や看護師などによる専門職連携の体制である。本研究では、障害児や医療的ケア児の保育に 20 年前から取り組んできた A 園における、専門職が業務を限定しない「分けない実践」の事例を通じて、子どもとその家族の生活支援のための専門職連携のあり方について考察する。

P-47 聴覚障害のあるクライアントと心理職の関係性構築

広津侑実子 (東京都公立学校スクールカウンセラー)

聴覚障害のあるクライアント (Cl) に対して心理職 (Th) がどのように関係性を構築して支援しているのかを検討することを本研究の目的とする。聴覚障害のある Cl への心理的支援を行っている Th 10 名の語りについて、ディスコース分析を援用して分析を行った。結果、関係性のあり方にはいくつかのバリエーションが見られ、心理職の属性や特徴によって用いられやすい関係性は異なっていた。聴覚障害がある Th や手話の堪能な Th は、聴覚障害のある Cl を自分の「後輩」のように位置づけていた。一方で、聴覚障害のない Th では、聴覚障害のある Cl を聴こえる Cl と比較し、自分とは異なる者（「わからない部分をもつ存在」）と捉えたり、心理的支援の対象者（「ケース」）と意味づけたりすることが明らかになった。なお、研究実施において、筆者旧所属機関における倫理審査委員会の許可を得ている。

ポスター発表 6

P-48 地域子育て支援拠点施設を利用する父親に対する場への適応過程に関するインタビュー分析

田中元基 (東京都健康長寿医療センター研究所 東京都・介護予防フレイル予防推進支援センター)・田中寿夫 (淑徳大学 総合福祉学部)

本発表では、地域子育て支援拠点施設（未就学児の子どもと保護者が交流する場を提供する事業の施設）を利用する父親が、定期的な利用に至る過程について報告する。近年、母親だけでなく父親に対する子育て支援の重要性も高まり、中でも、子どもと一緒に過ごすことのできる家庭以外の居場所が重要になっている。本発表では、地域の居場所の一つとして想定される、地域子育て支援拠点施設を定期的に利用している父親10名に対し、施設利用に関する半構造化面接を行い、定性的コーディングに基づく内容分析を行った。分析の結果、最終的に「利用することのメリット」、「母親との関係性」、「子どもを介した関係性構築」、「外部の関係性の持ち込み」という4つのカテゴリーが見出された。父親は施設利用することにメリットを感じたうえで、母親や自分の子どもの関係性を介して周囲との新たな関係を構築したりしながら、居場所としての施設に適応していった。

P-49 図鑑・科学絵本を活用した保育の営みに関する研究

仲本美央 (白梅学園大学)

本研究発表は、全国の保育・幼児教育施設 1043 施設の保育者に対して図鑑・科学絵本を活用した保育実践の有無や具体的な工夫、現状の課題に関する質問紙調査を実施し、その回答結果から保育者の専門性を明らかにしようとするものである。研究協力者である保育者によって自由記述で回答された内容のデータの分析には、佐藤(2008)が説明する①意味的にまとまりのある特定部分（文書セグメント）の特定②コード付与による情報の検索と抽出③コード付与及びコード同士の関係の割り出しによる報告書全体のストーリー構成というエッセンスが含まれた QDA（Qualitative Data Analysis：質的データ分析）ソフトウェア MAXQDA 11（Release11. 11）を用いた。また、この分析結果から、図鑑・科学絵本を活用した保育の営みの概念図を作成し、保育者がいかに自らの専門性を持って子どもの科学的思考を育てているのかを検討している。

P-50 未就学児の子育てをしながら日本語教育に携わる3名による語り聴く場の意義と限界

大河内 瞳 (大阪樟蔭女子大学学芸学部)・菅智穂 (立命館大学国際関係学部)・杉本香 (大阪大谷大学文学部)

未就学児の子育てをしながら日本語教育に携わる発表者ら3名は、産前産後休暇、育児休暇を経て復職した時、仕事と子育ての狭間で沸き起こってくる感情をうまく処理できずにいた。そこで、自身のそうした思いを語ったり他者の思いを聴いたりする語り聴く場を開くことにした。本発表では、その語り聴く場には、どのような意義や限界があったかを報告する。2020年1月から2022年3月にかけて5回行った語り聴く場の逐語録を分析した結果、語り聴く場において、断片化されていた出来事が結び付けられていたり、意識せずに使っている表現の意味の探求が行われたりしていた。語り聴く場でその意味が明らかになるというよりは、これをきっかけとして捉え直しが促されていた。その一方で、3名が作り出す場が語りによって方向づけられた結果、語れることと語れないことが生まれたり、場が求める語りが規定されたりしていた。

P-51 乳児の保育所入園を通した母親の心理的変容

上山瑠津子 (福山市立大学教育学部)

本研究は、保育所入園準備期間における12か月児の子どもの姿と母親1名の心理的変容を半年間の育児日誌をもとに明らかにし、乳児期の家庭から園生活への環境移行について考察することを目的とする。定性コーディング(佐藤, 2008)による分析の結果、母親の心理的変容過程は、3期に分けられた。第一期は、登園時の泣きやしがみつきの姿に焦りや心苦しさを感じたり、日によって様子が違うことに揺れ動いたりする「子どもの様子に一喜一憂期」である。第二期は、登園時の泣きも次第に止むことや登園の疲れの出やすさが分かってきた「予想に基づく受けとめ期」である。そして、第三期は、園生活に慣れ、指差しを通して保育者に思いを伝える姿や保育所での遊びを家庭で再現したりする姿が見られる「子どもの成長に安心と驚き期」である。以上から、入園を通した環境移行は母子ともに葛藤を経験する機会であり、家庭と保育施設との連携の重要性が示唆された。

P-52 幼稚園のある4歳児の「つまずき」場面における対処とそれに対する保育者の援助

松原未季 (東京大学・日本学術振興会特別研究員 PD)

本発表では、新規な場面で不安や混乱を感じて揺らぎやすいアイ(仮名)の「つまずき」場面に焦点を当てて、幼稚園4歳児の「つまずき」場面への対処とそれを支える保育者の援助を明らかにすることを目的とする。4歳児クラスの午前の保育場面において、「つまずき」場面を中心に観察し、学期末に保育者にインタビューを行った。アイは、1学期では「つまずき」場面において、自分と同じく新奇な場面で躓きやすいカオリと共に過ごし、不安や混乱を共有することで対処していた。保育者は、アイにスキンシップを図ったり、不安や混乱に共感したりしていた。2、3学期では、保育者は、行事の経験を契機として、アイの「つまずき」を見守ったり、他の園児に伝える援助を積極的に行ったりした。その結果、アイは、カオリと支え合ったり、他児に支えられながら「つまずき」を乗り越えたり、仲間関係の広がりによって新奇な場면을ポジティブに捉えられるようになった。

P-53 多くの里子を育ててきた里親のライフストーリー

森和子 (文京学院大学人間学部)

第2次世界大戦によって親を失った戦災孤児の深刻な問題から1947年児童福祉法が制定され里親制度開始されたが委託率は次第に低下していった。里親養育の難しさも指摘され培ってきた里親養育の経験をもってしても乗り切れない困難な状況があることも示されている。本研究では1970年代後半の低迷期から40年以上多くの里子の養育をしてきた2名の里親にライフストーリー・インタビューを実施した。多くの里子の養育を継続することができた理由と里親養育の課題について明らかにしたいと考えた。その結果、子どもを助けたいという信仰を基盤とした強い思いがあったこと、委託解除されても元里子と繋がり続け「嬉しいことばかりではなかったが決して見捨てずに過ごし良い人生だった」という思いが共通して見いだされた。課題としては委託を解除されて30年以上たっても元里子には様々な問題が起こることから相当長期間の公的なアフターケアの必要性が明らかになった。

P-54 保育の見守る場面における「最小限の一時介入」

上田敏丈(名古屋市立大学)・中坪史典(広島大学)

保育者が幼児と関わる場面において「見守る」ことは重要な保育者の関わりである。「見守る」とは平成元年の幼稚園教育要領の改訂以後、保育における中心的な方法として捉えられている。このような「見守る」行為について、これまで保育者側の意図や、その行為の意味の多層性について明らかにされてきている。中でも、最小限の一時介入は、「見守る」上で重要な要素と考えられる。本研究では保育者が「見守る」上で、最小限の一時介入をどのように捉えているのかをマルチ・ヴォーカル・エスノグラフィを用いて明らかにする。研究協力園は、当事者が含まれる園、日本国内の4園、海外の3園の保育者である。その結果、非介入的関与空間としての見守る場面において、幼児の主体性を重視し、子ども中心活動を展開しつつ、保育者の介入の最小化を行っていること、最小限の一時介入には、3つのレベルがあり、見守る保育者は適宜使い分けていることが明らかになった。

P-55 子どもを通した母親同士のつながり—関係性と情報交換に着目して—

鶴原美佑(立命館大学総合心理学部)・三品拓人(日本学術振興会・関西大学)・小林藍(立命館大学大学院人間科学研究科)・安田裕子(立命館大学総合心理学部)

本研究では「ママ友」とされてきたような関係性を先行研究や語りに即して「子どもをきっかけにつなげた女性同士の幅広い人間関係」と捉え、その実態を明らかにすることを目的とした。調査は0~3歳の子どものを育てている女性18名にインタビューを実施した。その中で周りに同じように子育てをしている人がいるか、どのようなサポートを利用しているか、どのように育児の情報を取得しているのか等を尋ねた。結果として育児を経験した女性同士のつながりの深さに差はあるものの、多くの場合同じ保育園や子育て支援施設で知り合ったといった偶然なきっかけからつながりが形成されている。それは継続されることもあれば一時的でもある。また、その中で子育てに関するあらゆる情報(プライベートな相談や非公式な情報も含めて)を交換する姿が詳細に確認できた。その一方で情報の入手が人間関係によって差があるため、公的なサポートとしてその充実を求める声もあった。

P-56 保育における「個と集団を育む実践」とはどのようなものか

古賀松香(京都教育大学教育学部)・東村知子(京都教育大学)・平田裕紀(無所属)

日本の保育実践の一つの特徴として、集団を育もうとすることが挙げられるだろう。全国規模の保育実践者の研究会において、1960年代頃から「集団づくり」が検討されてきており、多くの実践の報告が蓄積されてきた。また、穴戸健夫を代表とする保育カリキュラム論としての展開もなされてきている。そういった研究組織を中核とした展開だけでなく、保育においては「集団と個々の幼児との関係を受け止めて、具体的な保育の手立てを考えていかなければなりません」(文部科学省,2019)とあるように、相互に影響を与え合う関係をとらえ育むことが求められており、広く実践的な関心として、個と集団を育むことが考えられてきたと言っていいたいだろう。しかし、その実践のプロセスの分析は、多様な要素が入り組み、容易ではない。ここではある5歳児クラスの保育の詳細を分析することを通して、日本の保育における「個と集団を育む実践」とはどのようなものか検討する。

日本質的心理学会第 19 回大会準備・実行委員会

大会準備・実行委員長

塚本鋭司（愛知大学）

大会準備・実行委員（順不同）

松嶋秀明（滋賀県立大学）（副委員長）

家島明彦（大阪大学）（副委員長）

川島大輔（中京大学）（事務局長）

能智正博（東京大学）

勝浦眞仁（桜花学園大学）

小松藍生（放課後等デイサービス アミティエ東苗穂）

町田奈緒士（名古屋大学）

田中元基（東京都健康長寿医療センター研究所）

古賀佳樹（中京大学）

広告・展示（五十音順）

アカデミックソフト（Academic-soft.com）/ JUCA, Inc.

北大路書房

新曜社

誠信書房

ひつじ書房

ユサコ

ライトストーン

日本質的心理学会第 19 回大会プログラム抄録集

発行日：2022 年 10 月

発行者：日本質的心理学会第 19 回大会準備・実行委員会

大会事務局：愛知県名古屋市中村区平池町 4 丁目 60 番地 6 愛知大学国際コミュニケーション学部

制作（HP, 印刷物等）(株)コームラ

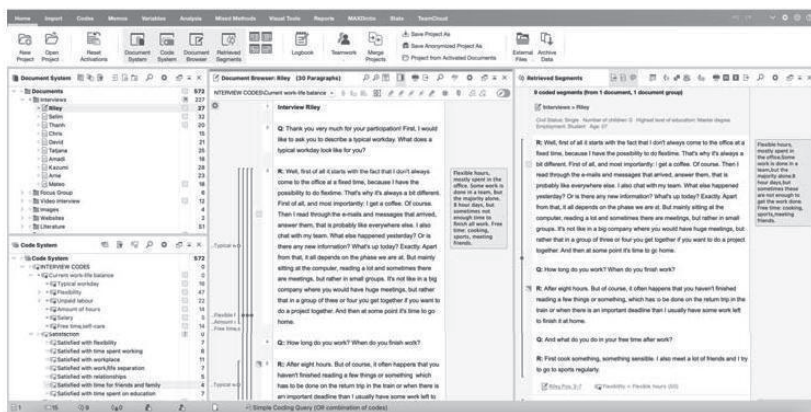
協賛企業（五十音順）

academic-soft.com

世界中から、海外、研究ソフトウェアを調達します
大学生協店舗でも、お受け取り・お支払いできます



質的データ分析には、
Windows でも Mac でも同じ操作で同じ機能が利用できる
MAXQDA が絶対お薦め



主な機能

- さまざまなデータ形式のサポート
- 手動および自動コーディング
- 高速で高度なフィルタリングによる検索
- さまざまなメモ機能
- シンプルで使い易いレポートツール
- 優れたデータ視覚化
- 強力な混合研究法機能
- 音声および動画分析
- 書き起こし機能の内蔵
- プロジェクト内の広範な検索
- 複数の言語をサポート
- 定量的テキスト分析 (MAXQDA Plus)
- 統計データ分析 (MAXQDA Analytics Pro)

ライセンスの種類

使用目的に合ったライセンスを選択できます。
MAXQDAには以下のライセンス種類があります。

シングルライセンス (永続・サブスクリプション)

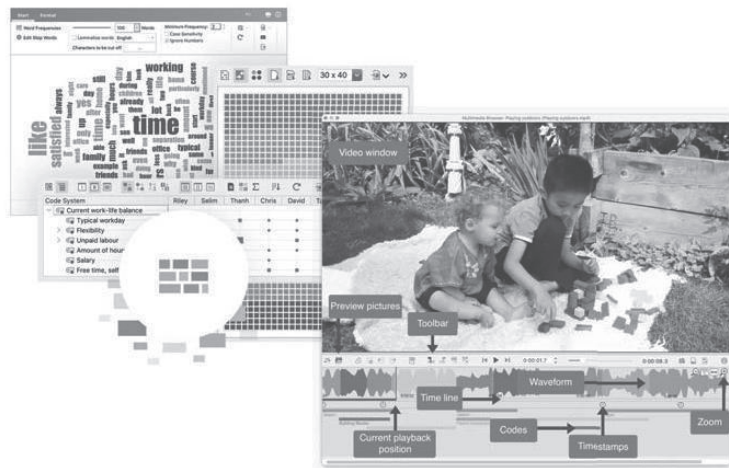
個別のPCにインストールして利用するライセンスです。
サブスクリプション 5本以上+TeamCloud (クラウドストレージ)で、
グループ研究をより効率的に行なえます。

ネットワークライセンス (サブスクリプションのみ)

複数のPCにインストールし、同時起動数で管理されるライセンス。

学部・学科サイトライセンス (サブスクリプションのみ)

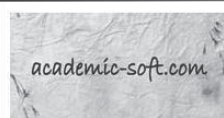
学部・学科・大学全体など組織内全体で利用できるライセンス。



エディションの違い

	Standard	Plus	Analytics Pro
質的/混合法データ分析	●	●	●
量的テキスト解析と辞書作成 (MAXDictio)		●	●
統計的データ解析 (Stats)			●

本製品のお問い合わせ先



www.academic-soft.com

ご購入・お問い合わせは、正規代理店のアカデミックソフト(JUCA, Inc.)へ
大学生協でも、お支払い・お受け取りいただけます。
Email : info@academic-soft.com 製品価格はウェブサイトでご確認ください。
アカデミックソフトドットコムはJUCA, Inc.の登録事業名称です。©JUCA, Inc. 2022



北大路書房

〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8
☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393
<https://www.kitaohji.com> (価格税込)

〈ふれる〉で拓くケア タッピングタッチ

中川一郎編著 A5判・272頁・定価3300円 やさしくふれることで、なぜケアされる人だけでなくする人まで癒されるのか。核となるホリスティックケアの概念や実際の動き、活用法やエビデンスを丁寧に解説。さらに心理、教育、医療、看護、福祉等の現場で活躍するインストラクター達が、豊富な実践例を通してシンプルなのに効果的なケアの魅力を紹介。

社会構成主義の地平 カップル・カウンセリング入門

ー関係修復のための実践ガイドー M・ペイン著 国重浩一他訳 A5・308頁・定価3960円 カップルの「二つの視点」の間で複雑な関係におかれるセッションをどう構造化するのか、性的な問題、暴力・虐待といった「固有の問題」を取り上げて実践的に解説する。社会文化的な影響を探究し、カップル自らが「物語」るよう導くセラピーを展開。

はじめての家族療法

ークライアントとその関係者を支援するすべての人へー 浅井伸彦編著 坂本真佐哉監修 A5・208頁・定価3080円 家族療法の考え方や理論、背景、技法を概括的に捉えられる入門書。カップルカウンセリングやジェノグラムの実践、さらには家族支援にも役立つ書。オープンダイアログなど、発展し続けるセラピーの〈多様性〉を紹介。

教育研究のための質的研究法講座

関口靖広著 A5・256頁・定価3080円 現場教員にもわかりやすい教育現象の質的な研究法の手引書。前半の入門編では、専門用語を使わずに具体的な研究の進め方を概説。より専門的な理論や研究法のテクニックは後半の各論編にまとめられ、必要に応じて関心のあるところをピックアップして読めるようになっている。

シシリー・ソンドース、ケアを語る

ー私のスピリチュアリティー C. ソンドース著 小森康永訳 四六上製・160頁・定価2750円 最晩年に出版した「自叙伝」ともいえるべき自選論文集。人間性、相互主観性、そして苦しみの意味を理解するための努力を含む、より広い宗教的・精神的な視点へと、彼女がどのように導かれてきたかを生き生きと伝える。

Journey with Narrative Therapy ナラティブ・セラピー・ワークショップ Book I

ー基礎知識と背景概念を知るー 国重浩一著 日本キャリア開発研究センター編集協力 A5・312頁・定価3080円 熟練ナラティブ・セラピストによるワークショップを再現するシリーズ第一弾。基本的知識や背景をわかりやすく初学者に向け解説。ワークによる実践の具体例やデモも一部掲載し、参加者の声も多数紹介。

児童虐待における司法面接と子ども支援

ーともに歩むネットワーク構築をめざしてー 田中晶子、安田裕子、上宮 愛編著 A5・280頁・定価3850円 事実確認と子どものケアをどう両立させるのか、実践と研究を往還して探る。福祉行政、医療・看護など、多様な現場での取り組みを紹介。次いで、トラウマ記憶研究、アタッチメント理論をはじめ、司法面接研究の最前線を解説。

人間科学のための混合研究法

ー質的・量的アプローチをつなぐ研究デザインー J. W. クレスウェル, V. L. プラノクラーク著 大谷順子訳 A5・328頁・定価3630円 研究プロセスの各段階において、質的・量的アプローチでデータを収集・分析・混合し、各々のアプローチの長所を組み合わせることをめざした研究方法論。

質的研究ハンドブック(全3巻)

N. K. デンジン他著／平山満義監訳 定価5060円～6160円

人間科学のための混合研究法

J. W. クレスウェル, V. L. プラノクラーク著／大谷順子訳 定価3630円

教育研究のための質的研究法講座

関口靖広著 定価3080円

質的研究用語事典

T. A. シュワント著／伊藤 勇他監訳 定価3520円

なるほど！ 心理学観察法

三浦麻子監修／佐藤 寛編著 定価2420円

〈当事者〉をめぐる社会学

宮内 洋、好井裕明編著 定価3080円

質的データの取り扱い

リチャーズ著／大谷順子、大杉卓三訳 定価3520円

心理学マニュアル 観察法

中澤 潤、大野木裕明、南 博文編著 定価1430円

ナラティブ・アプローチの理論から実践まで

G. モンク他編／国重浩一、バーナード案訳 定価2860円

質的研究をはじめのための 30の基礎スキル

—おさえておきたい実践の手引き—

J. クレスウェル & J. バイアス 著 廣瀬眞理子 訳
A5 判並製 432 頁・定価 5,060 円



質的研究者のように考えることから、研究に際しての感情的側面、リサーチクエスションの設定、インタビューやデータ分析のノウハウ、論文を書くプロセスまで、混合研究法の第一人者が実践に役立つ 30 の基礎スキルを豊富な具体例とともに伝授する。
ISBN 978-4-7885-1769-1

ワードマップ 心理検査マッピング

—全体像をつかみ、臨床に活かす—

鈴木朋子・サトウタツヤ 編
四六判並製 296 頁・定価 3,080 円



実践の場でよく使用される 41 の心理検査について、開発者や使用経験豊かな研究者が解説し、文化 × 個人、文化 × 集団、自然 × 集団、自然 × 個人の 4 つのマトリクス上にマッピングしてその特徴を検査の全体像の中で捉えた、これまでにない入門書。
ISBN 978-4-7885-1785-1

やまだようこ著作集 7 巻

人生心理学

—生涯発達モデル—

やまだようこ 著

A5 判上製 480 頁・定価 5,280 円



人生はものの語り。これまでの発達観は、直線的に上昇し、成功をめざす近代的な進歩モデルにもとづいていた。生涯発達心理学の専門家が、明と暗を二つながら生きる「両行する」世界観に立ち、新しい「人生心理学」の多重サイクルモデルと方法論を提案する。
ISBN 978-4-7885-1737-0

協働するカウンセリングと 心理療法

—文化とナラティブをめぐる臨床実践テキスト—

D. パレ 著 能智正博・綾城初穂 監訳
A5 判上製 640 頁・定価 6,820 円



機能不全を矯正する営みからクライアントがもつ知識と能力を最大限活用する異文化間の協働作業へ。変化を生み出せるよう、積極的にクライアントにかかわっていくカウンセリングや心理療法に必要な態度と技法を、援助過程に即して懇切に述べた入門書。
ISBN 978-4-7885-1744-8

質的心理学研究 第21号

特集 質的研究法の拡張——機械、AI、インターネット
日本質的心理学会 編
B5 判並製 192 頁・定価 2,860 円
ISBN 978-4-7885-1768-4



ソーシャル・ コンストラクショニズムと 対人支援の心理学

—理論・研究・実践のために—

能智正博・大橋靖史 編
A5 判並製 328 頁・定価 3,960 円



〈現実〉は人びとのあいだで構築される——ソーシャル・コンストラクショニズムの考え方は、対人支援の理論と研究、実践を問い直し、それらを結ぶツールとなりうる。その有効性を読み解き、対人支援の新たな可能性をひらく試み。
ISBN 978-4-7885-1750-9

保育実践への ナラティブ・アプローチ

—保育者の専門性を見いだす 4 つの方法—

二宮祐子 著
A5 判並製 240 頁・定価 2,530 円



相互作用に埋め込まれた保育者の専門性をいかに見いだすか。連絡帳、クラスだより、生活画、創作劇を対象に、それぞれのナラティブ特性をいかした方法で分析しその内実に向き合う。ナラティブ・アプローチの基礎から実践的意義までわかりやすく論じた一冊。
ISBN 978-4-7885-1775-2

- 1 質的研究のデザイン
U. フリック 著/鈴木聡志 訳 A5 判並製 196 頁・定価 2,310 円
- 2 質的研究のための「インター・ビュー」
S. クヴァール 著/能智正博・徳田治子 訳
A5 判並製 272 頁・定価 2,970 円
- 3 質的研究のためのエスノグラフィーと観察
M. アングロシーノ 著/柴山真琴 訳
A5 判並製 168 頁・本体 1,980 円
- 4 質的研究のためのフォーカスグループ
R. バーバー 著/大橋靖史ほか 訳 (※近刊)
- 5 質的研究におけるビジュアルデータの使用
M. パンクス 著/石黒広昭 監訳 A5 判並製 224 頁・定価 2,640 円
- 6 質的データの分析
G.R. ギブズ 著/砂上史子・一柳智紀・一柳梢 訳
A5 判並製 280 頁・本体 3,190 円
- 7 会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析
T. ラブリー 著/大橋靖史・中坪太一郎・綾城初穂 訳
A5 判並製 224 頁・定価 2,640 円
- 8 質的研究の「質」管理
U. フリック 著/上淵寿 訳 A5 判並製 224 頁・定価 2,640 円

新 曜 社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-9
TEL 03-3264-4973 (代表) / FAX 03-3239-2958
<https://www.shin-yo-sha.co.jp/>

日本質的心理学会 会員限定 15%OFF!

日本質的心理学会 会員の方は、ご注文時に会員であることをご明記してください。
掲載以外の本もOK。公費でのご注文も承ります。
詳細は右記QRコードにて。 2022年11月末まで

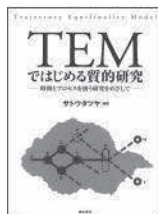




TEAによる対人援助プロセスと分岐の記述

——保育、看護、臨床・障害分野の実践的研究

安田裕子・サトウタツヤ 編著 TEA (複線経路等至性アプローチ) による対人援助に関する実践的研究の醍醐味を味わうことのできる書。第I部ではTEAの基礎およびTEAを構成するHSI (歴史的構造化招待)、TEM (複線経路等至性モデリング)、TLMG (発生の三層モデル) を解説する。第II部では保育、第III部では看護、第IV部では臨床・障害に関連した実践的研究を紹介する。研究の内容だけでなくとどまらず、その裏舞台についても詳述されており、TEAを用いた研究を行ううえで有益な示唆に富んでいる。具体的な研究を通してTEAの理解を深めることができる。(3630円)



TEMではじめる質的研究

——時間とプロセスを扱う研究をめざして

サトウタツヤ 編著 TEM (Trajectory equifinality model)、「複線経路・等至性モデル」ではじめる研究とは、個人の人生を時間と共に描くことを目標とする質的研究の流れの新しい方法論である。多くの人のデータを取ったり平均を出したりせず、フィールドワークやインタビューのデータをもとに研究が行われる。人間と環境を一種のシステムとして考え、関心があることには何でも使える人間の多様性や複雑性を扱うための方法論となっている。(3300円)



TEMでわかる人生の径路

——質的研究の新展開

安田裕子・サトウタツヤ 編著 前著『TEMではじめる質的研究』に続く第2弾。質的研究に時間の概念を導入し、視覚的に理解を促す試みの集大成。誰でも自分自身の人生の径路をTEMに描くことができ、人生の径路が視覚的に分かるため、初学者でも簡単に質的研究用のデータを拾っていくことが可能になる。新しい技術による丁寧な研究法を読者に薦める、読みやすい専門書。(3740円)



TEMでひろがる社会実装

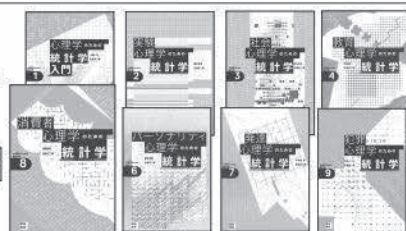
——ライフの充実を支援する

安田裕子・サトウタツヤ 編著 今やTEMは、質的研究法としてひろく用いられるに至っている。シリーズ第3弾となる本書では、外国語学習および教育、看護・保健・介護などの支援の現場に焦点をあてた論文に加え、社会人のキャリアデザイン、学生相談、臨床実践のリフレクションにおける実践的応用の事例を収録。その汎用性の高さを明らかにし、TEMによる社会貢献のひろがりをめざす。序章および終章で、改めて基本概念の検討を行い、収録論文の読解を助けるとともに今後の展望を指し示す。(3740円)

心理学のための統計学 [全9巻]

荘島宏二郎編集・各巻共著
心理学の分野別に優先度の高い統計手法を取り上げて解説。各巻の各章は、90分の講義で説明できる内容に構成。心理学を学ぶ人に必須の統計テキストシリーズ。

- ① 心理学のための統計学入門 (川端一光)
 - ② 実験心理学のための統計学 (橋本貴充)
 - ③ 社会心理学のための統計学 (清水裕士)
 - ④ 教育心理学のための統計学 (熊谷龍一)
 - ⑤ 臨床心理学のための統計学 (佐藤寛)
 - ⑥ パーソナリティ心理学のための統計学 (尾崎幸謙)
 - ⑦ 発達心理学のための統計学 (宇佐美慧)
 - ⑧ 消費者心理学のための統計学 (斎藤朗宏)
 - ⑨ 犯罪心理学のための統計学 (松田いつみ)
- ☆シリーズ新刊☆
既刊 ① 2100円 / ②・③・④・⑤ 各 2600円 / ⑥・⑦・⑧・⑨ 各 2800円



医療の質・安全を支える心理学

——認知心理学からのアプローチ

日本心理学会 監修 原田悦子 編 「医療安全」と「健康・死・ケア」といった概念理解に関する認知心理学的研究の醍醐味を紹介し、これからの医療のあり方を考える。(2090円)



認知症に心理学ができること

——医療とケアを向上させるために

日本心理学会 監修 岩原昭彦・松井三枝・平井 啓 編 アセスメント、意思決定の支援、ケアの視点、早期発見、心理職の人材育成など、認知症に関連する心理学の多様な側面を論じた書。(2090円)



スキナーの徹底的行動主義

——20の批判に答える

B.F. スキナー 著 坂上貴之・三田地 真実 訳 20世紀に最も影響力を与えた心理学者の一人で、行動分析学の創始者であるB.F. スキナーが、行動分析学の哲学的基盤である「行動主義」のエッセンスを解説した書。冒頭で行動主義に向けられた20の批判を取り上げ、その後の13章にわたって徹底的に考察する。そして、最後の14章で、一つひとつの批判に答える形式をとっている。「心」や「意識」という虚構を越え、「なぜ人はそのように振る舞うのか」について考えていく。(4180円)



記憶の心理学

——基礎と応用

ガブリエル・A・ラドヴァンスキー 著 川崎 恵里子 監訳 「人間の記憶」に関する多岐にわたる理論や研究を1冊にまとめた画期的なテキストブック。記憶研究を学ぶ読者はもちろんのこと、それ以外の領域——心理学の各分野、医学や法学、教育学など——を学ぶ人にとっても必要となる「記憶研究」の各トピックについて、理解し活用できるよう、過不足のない情報を提供。全章を通して、図、グラフ、写真が豊富に使われており、読者が勉強しやすいよう、細かいところまでサポートされた、頼りになるテキストブック。(9900円)



シリーズ 言語・コミュニケーション研究の地平

外界と対峙する

伝康晴・前川喜久雄・坂井田瑠衣監修 牧野遼作・砂川千穂・徳永弘子編 定価 3,200 円＋税

LC (Language and Communication) 研究会による研究成果をまとめたシリーズ。“外界”とは単に屋外のことを指すわけではない。本巻では“外界”をコミュニケーションに参加していない人々やモノと捉え、文化人類学、ロボット工学、会話分析、語用論などの幅広い分野からのアプローチによる研究を収録。執筆者：川口一画、黒嶋智美、清水大地、須永将史、砂川千穂、徳永弘子、名塩征史、蓮見絵里、平本毅、牧野遼作。

パフォーマンス・アプローチ心理学

自然科学から心のアートへ

日本質的心理学会
大会初登場!!

フレッド・ニューマン、ロイス・ホルツマン著 茂呂雄二監訳 岸磨貴子・北本遼太・城間祥子・大門貴之・仲嶺真・広瀬拓海訳

19 世紀の成立以来、危機が叫ばれ続けてきた心理学。現在の隆興も、科学性の勝利というよりも、社会と文化の心理学化と心理学の産業化の結果にすぎないと批判するニューマンとホルツマンは、生活の形を変えるためのアートとしての心理学を提案する。それは自然科学を模倣し心の内部を覗き込み測定する科学的心理学を超えて、人々がコミュニティ作りを通して、新しい振る舞い、新しい声、新しい生を紡ぎ出す新しいアプローチだ。

手話が「発音」できなくなる時

言語機能障害からみる話者と社会

石原和・菊澤律子編 定価 1,700 円＋税

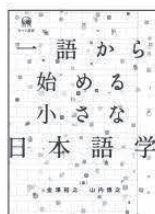
「手話は言語である」が、手話が「話せなく」なると、どうなるのか？ 交通事故で手話が「発音」できなくなった例を元に、話者の立場、言語学からみた解釈から、手話を考える。



一語から始める小さな日本語学

金澤裕之・山内博之編 定価 2,600 円＋税

一語にこだわった分析を行う 17 本の論文を収録。ネタ・素材に触れた時の発想・着想がとて重要で、論証は最小限でよい。これが、本書の提案する「小さな日本語学」である。



フィールドワークではじめる言語学

なじみのない言語から考える

古閑恭子著 定価 2,200 円＋税

言語学入門書にこそ、なじみのない言語を！ ガーナの言語を取り上げ、日本語とは違った世界を知り、言語のしくみを学んでいく、一味違った入門書。



日本語プロフィエンス研究の広がり

鎌田修監修代表 鎌田修・由井紀久子・池田隆介編 定価 4,400 円＋税

非流暢だが自然な日本語、視覚・聴覚障害者や定住外国人の社会エンゲージメント、談話分析…。多岐多様に渡る日本語プロフィエンス研究の広がりを一挙に披露。



越境者との共存にむけて

村田和代編 定価 4,200 円＋税

日本社会の喫緊の課題の多文化共生をめぐる、ナラティブ分析から言語教育・公共政策への提言まで、分野を超えて多層的に考察。越境者との共存や多様性をあらためて問直す。

モビリティとことばをめぐる挑戦

社会言語学の新たな「移動」

三宅和子・新井保裕編 定価 3,200 円＋税

モビリティとことばがいかに相互に影響を与え、人々の言語生活の実態を形成しているのか、そのリアリティを深く掘り下げ、21 世紀に必要な社会言語学とは何かを追究する。

ELAN 入門

言語学・行動学からメディア研究まで

細馬宏通・菊地浩平編 定価 2,400 円＋税

映像や音声に注釈をつけ自在に分析する事ができるフリーのソフトウェア ELAN。いまや様々な分野で使われている ELAN の最初の一步から応用まで丁寧に解説した入門書。

シリーズ フィールドインタラクション分析

1 多職種チームで展示をつくる

日本科学未来館『アナグラのうた』ができるまで

高梨克也編 定価 3,200 円＋税

職能の異なるメンバーのチームが展示を制作する際、どのように様々な困難を乗り越えていくのか。懸念による問題提起や、表象を利用した問題の共有や解決について分析する。

5 「三夜講」で火祭りを準備する

野沢温泉道祖神祭りの伝承を支える仕組み

榎本美香編 近刊

野沢温泉の道祖神祭りの準備を担う「三夜講」という集団の協働インタラクションを分析。言葉では表現しきれない身体技法や作法とともに、伝統的精神が伝承される様を著す。

■ひつじ書房の刊行案内や特別セールなどのお知らせは「ひつじメール通信」から配信しております。

ご希望の方は toiawase@hituzi.co.jp までメールでご連絡ください。

〒112-0011 東京都文京区千石 2-1-2 大和ビル 2F 株式会社ひつじ書房

TEL 03-5319-4916 FAX 03-5319-4917 toiawase@hituzi.co.jp <https://www.hituzi.co.jp/>

【新刊書籍】
QRコードより
ぜひご覧ください
[https://www.hituzi.co.jp/
books/anaka.html](https://www.hituzi.co.jp/books/anaka.html)



ひつじ書房

世界150ヶ国以上、150万人以上のユーザーが使用する定番ソフト

インタビュー分析
アンケート分析
文献レビューには

NVIVO

質的・混合研究支援 (QDA) ソフトウェア

01 データをかんたんに一元管理

NVivoでひとまとめ！

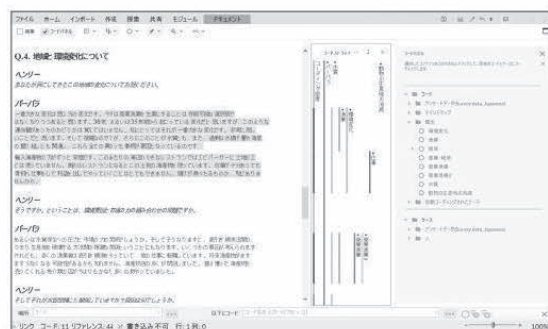
インタビュー文字起こし(逐語録)やアンケート回答から参考文献、動画、音声、ウェブサイトからTwitterの書き込みまで
どんなファイルもNVivoにひとまとめ。
研究に必要なデータを1ヶ所にまとめて整理することが可能です。



02 データのカテゴリライズ・コーディングを効率化

操作は快適かつスムーズ！

カードや付箋、表計算ソフトを使ってデータのカテゴリライズ・コーディングと比較し、NVivoはドラッグ&ドロップで簡単にデータをコーディングすることが可能です。名前をつけて階層化管理しつつ、1クリックで元の場所に戻ることができます。



03 データを上手に活用しましょう

さまざまな切り口でデータを分析、簡単に可視化！

データを、回答者の性別や年齢、使われている言葉の頻度などによってNVivo上でかんたんに図式化。
図は出力して、ポスターや発表資料でそのまま利用することが可能です。



他にも世界中の研究者や学生から愛される便利機能満載！

専任スタッフのサポートが付いているので慣れない方でも安心。
まずは14日間無料トライアル！

NVivo トライアル

検索



【国内代理店】

ユサコ株式会社

E-mail: shop@usaco.co.jp

<http://www.usaco.co.jp/>

ライトストーンのブース ご来場者様限定！

質的 & 混合法データ分析ソフトウェア

MAXQDA

Analytics Pro (最上位エディション)

**30日
ライセンス**

**使い方ガイド
(PDF)**



無料配布！

ご来場お待ちしております！



開発元

VERBI

VERBI Software. Consult. Sozialforschung GmbH

Software – Consult –
Sozialforschung GmbH

正規国内代理店



LightStone®

株式会社ライトストーン

25年以上の経験と実績でお客様をサポートします。

〒101-0031

東京都千代田区東神田2-5-12 龍角散ビル7F

TEL 03-3864-5211 FAX 03-3865-0050

E-Mail : sales@lightstone.co.jp

<https://www.lightstone.co.jp/pr/ad22jaqp19/>

